

坂井長永遺跡（1・2次）
西蒲池古塚遺跡（1～4次）
西蒲池将監坊遺跡（1・2次）
西蒲池古溝遺跡
西蒲池下里遺跡

—福岡県大川市坂井・柳川市西蒲池所在遺跡の調査—

2008

福岡県教育委員会

さかいちょうえい
坂井長永遺跡（1・2次）

にしかまちこつか
西蒲池古塚遺跡（1～4次）

にしかまちしょうげんぼう
西蒲池将監坊遺跡（1・2次）

にしかまちふるみぞ
西蒲池古溝遺跡

にしかまちさがり
西蒲池下里遺跡

—福岡県大川市坂井・柳川市西蒲池所在遺跡の調査—

序

ここに報告する坂井長永遺跡、西蒲池古塚遺跡、西蒲池将監坊遺跡、西蒲池古溝遺跡及び西蒲池下里遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査された遺跡です。

今回の調査では、平安時代から鎌倉時代に至る土坑や水田を区画していた溝、耕作痕など、柳川市北西部に広がる条里遺構が明らかになり、有明海沿岸地域における土地開発の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

発掘調査・報告書作成に当たって御協力を頂いた国土交通省福岡工事事務所、柳川市教育委員会をはじめとする諸機関、地元有志の方々の御協力に対し、深く感謝の意を表します。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば幸いです。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会教育長 森山 良一

例言

- 1 本書は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査を実施した、大川市坂井・柳川市大字西蒲池に所在する坂井長永遺跡1・2次調査、西蒲池古塚遺跡1～4次調査、西蒲池持監坊遺跡1・2次調査、西蒲池古溝遺跡、西蒲池下里遺跡の報告書である。
- 2 発掘調査・報告書作成は、国土交通省福岡工事事務所の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
なお、調査・報告書作成に関して国土交通省福岡工事事務所、柳川市教育委員会の多大な御協力を得た。
- 3 金属器は、九州歴史資料館において、同館学芸第二課加藤和哉の指導の下で整理を行った。
- 4 掲載した図は、遺構を秦・今井・坂本・一瀬が、遺物を秦・今井・坂本・一瀬・平田春美・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・若松三枝子・棚町陽子・中村洋子・栗林明美・中川真理子・荒川妙・西亜彩子が作成したものを豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
- 5 掲載した写真は、遺構を秦・今井・坂本・一瀬が、遺物は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
- 6 使用した方位は主として日本測地系（旧）座標北である。
- 7 陶磁器の分類名は主に『大宰府条坊跡Ⅱ』1983を参考とした。
- 8 本書は、第1・2・5・6・9・11・13章を秦が、第3・7章を秦・坂本が、第4・8・10章を一瀬が、第12章を今井が執筆し、秦が編集した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	位置と環境	6
第3章	坂井長永遺跡1次調査	9
第4章	坂井長永遺跡2次調査	15
第5章	西蒲池古塚遺跡1次調査	19
第6章	西蒲池古塚遺跡2次調査	23
第7章	西蒲池古塚遺跡3次調査	35
第8章	西蒲池古塚遺跡4次調査	47
第9章	西蒲池将監坊遺跡1次調査	49
第10章	西蒲池将監坊遺跡2次調査	55
第11章	西蒲池古溝遺跡	61
第12章	西蒲池下里遺跡	67
第13章	まとめ	75

図版目次

図版1	1. 坂井長永遺跡1次調査全景(上空から)	2. 同上I区北半全景(南東から)
	3. 同上I区南半全景(北西から)	
図版2	1. 坂井長永遺跡1次調査II区東半全景(上空から)	2. 同上西半全景(上空から)
	3. トレンチ内土層断面(南から)	
図版3	1. 1号土坑(北西から)	2. 1号土坑土層断面(北西から)
	3. 2号土坑(北東から)	4. 2号土坑土層断面(南西から)
	5. 3号土坑(北東から)	6. 4号土坑(北西から)
	7. 1号溝状遺構土層断面(南東から)	8. I・II区出土遺物
	9. II区出土墨書土器	
図版4	1. 坂井長永遺跡2次調査I区全景(上が北東)	2. 1号土坑(東から)
	3. 2号土坑(南から)	
図版5	1. 4号土坑(東から)	2. 1号溝状遺構(南から)
	3. 2号溝状遺構(西から)	
図版6	1. 西蒲池古塚遺跡1次調査全景(北東から)	2. 1号土坑(北西から)
	3. 2号土坑(東から)	4. 2号土坑土層断面(北から)
	5. 1・3号溝状遺構(北西から)	
図版7	1. 1号溝状遺構西部土層断面(南東から)	2. 1号溝状遺構南部土層断面(北から)

	3. 1号溝状遺構北東部(北東から)	4. 2号溝状遺構(南西から)
	5. 2号溝状遺構南部土層断面(北から)	
図版8	1. 西蒲池古塚遺跡2次調査遠景(北東上空から)	2. 同上全景(上空から)
図版9	1. 1号土坑(南から)	2. 2号土坑(北東から)
	3. 2号土坑土層断面(北西から)	4. 3号土坑(北から)
	5. 3号土坑土層断面(北から)	6. 5号土坑(南東から)
	7. 6号土坑(北西から)	8. 7号土坑(北西から)
	9. 7号土坑土層断面(北東から)	
図版10	1. 8号土坑(南西から)	2. 9号土坑(南西から)
	3. 10号土坑(北東から)	4. 12号土坑(南東から)
	5. 12号土坑土層断面(南東から)	6. 13号土坑(南東から)
	7. 13号土坑土層断面(南東から)	8. 16号土坑(南東から)
図版11	1. 17号土坑(南東から)	2. 18号土坑(南東から)
	3. 19号土坑(北東から)	4. 19号土坑土層断面(北東から)
	5. 5号溝状遺構(北西から)	6. 5号溝状遺構土層断面(北西から)
	7. 6号溝状遺構(北西から)	8. 6号溝状遺構土層断面(北西から)
図版12	1. 7号溝状遺構(北西から)	2. 8号溝状遺構土層断面(北東から)
	3. 13号溝状遺構土層断面(北西から)	4. 13号溝状遺構土層断面(南西から)
	5. 西蒲池古塚遺跡3次調査出土遺物	
図版13	1. 西蒲池古塚遺跡3次調査南半部全景(上空から)	2. 同上北半部東側全景(上空から)
	3. 同上北半部西側全景(上空から)	
図版14	1. 1号土坑(北から)	2. 1号土坑土層断面(南から)
	3. 2号土坑(北西から)	4. 2号土坑土層断面(北西から)
	5. 3号土坑(東から)	6. 3号土坑土層断面(東から)
	7. 4号土坑(南西から)	8. 4号土坑土層断面(南西から)
	9. 5号土坑(西から)	10. 6号土坑(北西から)
図版15	1. 7号土坑(北西から)	2. 7号土坑土層断面(北西から)
	3. 8号土坑(北から)	4. 8号土坑土層断面(北から)
	5. 9号土坑(南から)	6. 10号土坑(南から)
	7. 25号土坑(南から)	8. ビット1遺物出土状態
図版16	1. 1号溝状遺構土層断面(北から)	2. 1・4号溝状遺構土層断面(南から)
	3. 2号溝状遺構土層断面(北から)	4. 3号溝状遺構土層断面(南西から)
	5. 4号溝状遺構土層断面(北から)	6. 5号溝状遺構土層断面(南西から)
	7. 6号溝状遺構土層断面(東から)	8. 7号溝状遺構土層断面(北東から)
	9. 8号溝状遺構土層断面(北東から)	10. 9号溝状遺構土層断面(北西から)
図版17	1. 10号溝状遺構土層断面(北西から)	2. 11号溝状遺構土層断面(北西から)
	3. 12号溝状遺構土層断面(北東から)	4. 13号溝状遺構土層断面(北東から)
	5. 14号溝状遺構土層断面(北西から)	6. 15号溝状遺構土層断面(北西から)
	7. 19号溝状遺構土層断面(南から)	8. 19号溝状遺構土層断面(南西から)

9. 調査区南西部小溝群（上空から）
- 図版18 1. 土坑出土遺物 2. 溝状遺構出土遺物
3. その他の出土遺物
- 図版19 1. 西蒲池古塚遺跡4次調査地全景（西から） 2. 2号土坑（左・西から）
3. 3号土坑（西から）
- 図版20 1. 西蒲池将監坊遺跡1次調査遠景（東上空から） 2. 同上北東部全景（上空から）
- 図版21 1. 西蒲池将監坊遺跡1次調査南西部全景（東から） 2. 1号土坑（北東から）
3. 1号土坑土層断面（北東から） 4. 2号土坑（南西から）
5. 2号土坑土層断面（南から） 6. 3号土坑（南から）
7. 3号土坑土層断面（南から）
- 図版22 1. 4号土坑（北東から） 2. 4号土坑土層断面（北東から）
3. 5号土坑（南東から） 4. 6号土坑（南西から）
5. 6号土坑土層断面（南西から） 6. 7号土坑（北西から）
7. 7号土坑土層断面（北西から） 8. 8号土坑（南東から）
9. 8号土坑土層断面（南東から）
- 図版23 1. 9号土坑（西から） 2. 9号土坑土層断面（西から）
3. 13号土坑（北から） 4. 13号土坑土層断面（北から）
5. 1号溝状遺構（北西から） 6. 1号溝状遺構土層断面（南東から）
- 図版24 1. 西蒲池将監坊遺跡2次調査地全景（上が北） 2. 14・15号土坑（西から）
3. 14・16号土坑（西から）
- 図版25 1. 17号土坑（南から） 2. 18号土坑（西から）
3. 19号土坑（北から）
- 図版26 1. 20号土坑（北から） 2. 2号溝状遺構（南から）
3. 包含層出土土器
- 図版27 1. 西蒲池古溝遺跡全景（東上空から） 2. 同上（上空から）
- 図版28 1. 1号土坑（北東から） 2. 1号土坑土層断面（北東から）
3. 2号土坑（北東から） 4. 2号土坑土層断面（北東から）
5. 3号土坑（西から） 6. 3号土坑土層断面（西から）
7. 4号土坑（南西から） 8. 4号土坑土層断面（南西から）
9. 5号土坑（北西から） 10. 5号土坑土層断面（北西から）
11. 6号土坑（西から） 12. 6号土坑土層断面（西から）
- 図版29 1. 1号溝状遺構（北西から） 2. 小溝群内土器出土状態（南から）
3. 小溝群部分土層断面B-B'（南東から） 4. 西蒲池古溝遺跡出土遺物
- 図版30 1. 西蒲池下里遺跡調査区全景（上空から） 2. 1号溝状遺構出土土器
3. 出土土器・石製品

挿図目次

第1図	柳川市の位置	目次最終ページ
第2図	坂井長永遺跡(1・2次)・西蒲池古塚遺跡(1～4次)・西蒲池将監坊遺跡(1・2次)・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡調査範囲図(1/3,000)	1
第3図	有明海沿岸道路調査地点位置図(1/50,000)	2
第4図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	7
第5図	坂井長永遺跡1次調査遺構配置図(1/300)	10
第6図	坂井長永遺跡1次調査Ⅱ区土層実測図(1/40)	11
第7図	坂井長永遺跡1次調査Ⅰ区遺構実測図(1/60)	12
第8図	坂井長永遺跡1次調査出土遺物実測図(1/3)	13
第9図	坂井長永遺跡2次調査Ⅰ区遺構配置図(1/300)	15
第10図	坂井長永遺跡2次調査遺構実測図(1/60)	16
第11図	坂井長永遺跡2次調査出土遺物実測図(1/2)	17
第12図	西蒲池古塚遺跡1次調査遺構配置図(1/300)	20
第13図	西蒲池古塚遺跡1次調査遺構実測図(1/60)	21
第14図	西蒲池古塚遺跡2次調査遺構略配置図(1/800)	23
第15図	西蒲池古塚遺跡2次調査1～10号土坑実測図(2は1/80、他は1/60)	25
第16図	西蒲池古塚遺跡2次調査11～13・16～19号土坑、2・5・6・8・9・12・13号溝状遺構土層断面実測図(1/60)	26
第17図	西蒲池古塚遺跡2次調査出土遺物実測図(8・23・24は2/3、他は1/3)	31
第18図	西蒲池古塚遺跡3次調査遺構略配置図(1/900)	35
第19図	西蒲池古塚遺跡3次調査土坑・ピット実測図(12は1/30、他は1/60)	38
第20図	西蒲池古塚遺跡3次調査溝状遺構土層断面実測図(1/60)	42
第21図	西蒲池古塚遺跡3次調査出土遺物実測図1(1/3)	43
第22図	西蒲池古塚遺跡3次調査出土遺物実測図2(29は1/2、他は1/3)	45
第23図	西蒲池古塚遺跡4次調査遺構配置図(1/300)	47
第24図	西蒲池古塚遺跡4次調査遺構実測図(1/60)	48
第25図	西蒲池将監坊遺跡1次調査遺構配置図(1/300)	50
第26図	西蒲池将監坊遺跡1次調査遺構実測図(1/60)	52
第27図	西蒲池将監坊遺跡1次調査出土遺物実測図(1/3)	53
第28図	西蒲池将監坊遺跡2次調査遺構配置図(1/300)	55
第29図	西蒲池将監坊遺跡2次調査遺構実測図(1/60)	57
第30図	西蒲池将監坊遺跡2次調査出土遺物実測図(8は1/1、9は1/2、他は2/3)	58
第31図	西蒲池古溝遺跡遺構略配置図(1/800)	61
第32図	西蒲池古溝遺跡土坑・溝状遺構実測図(1/60)	63
第33図	西蒲池古溝遺跡小溝群部分断面図(1/40)	64
第34図	西蒲池古溝遺跡出土遺物実測図(1/3)	65

第35図	西蒲池下里遺跡遺構略配置図 (1/800)	67
第36図	西蒲池下里遺跡1号土坑・溜り状遺構実測図 (1/60)、2・5号溝状遺構実測図 (1/30) ..	69
第37図	西蒲池下里遺跡出土遺物実測図 (10・12・13・22・23は1/4、他は1/3)	70
第38図	坂井長永遺跡・西蒲池古塚遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里 遺跡遺構略配置図 (1/3,000)	75
第39図	中世旧地形・条里推定図 (1/30,000)	79

付図目次

付図1	西蒲池古塚遺跡2次調査遺構配置図 (1/300)
付図2	西蒲池古塚遺跡3次調査遺構配置図 (1/300)
付図3	西蒲池古溝遺跡遺構配置図 (1/300)
付図4	西蒲池下里遺跡I区遺構配置図 (1/300)

表目次

表1	国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要	3
----	----------------------------	---

写真目次

写真1	2区作業風景と全景 (西から)	16
写真2	重機による表土剥ぎ作業 (東から)	47
写真3	作業風景 (北西から)	48
写真4	調査地東上空から大川市方向を望む	56
写真5	作業風景 (西から)	56



第1図 柳川市の位置

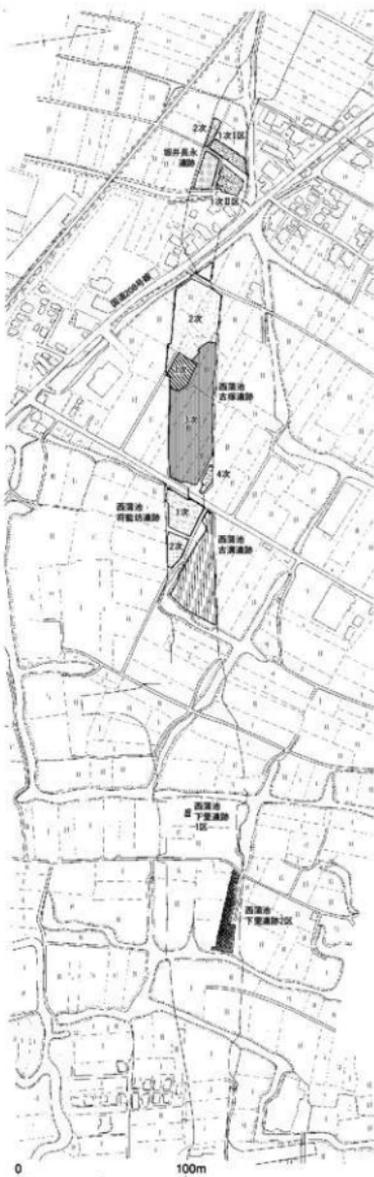
第1章 はじめに

1 調査に至る経緯と経過

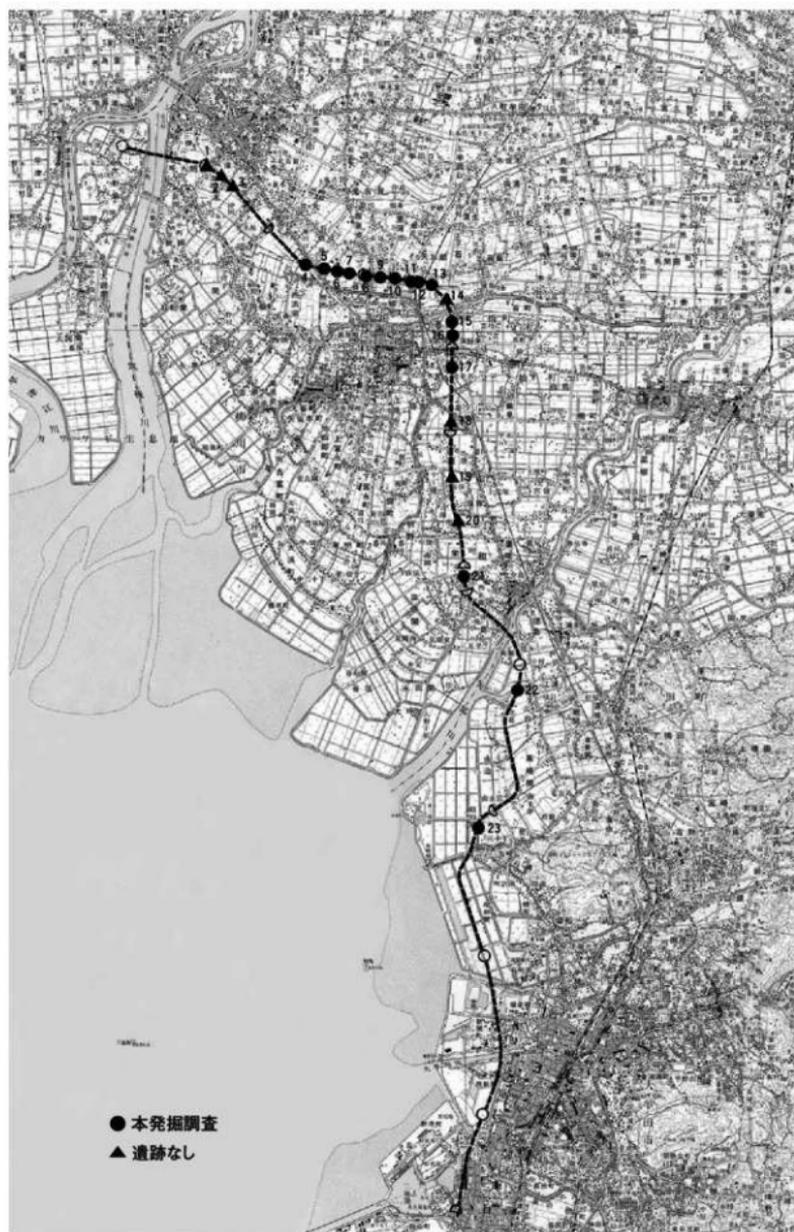
坂井長永遺跡、西蒲池古塚遺跡1～4次調査、西蒲池将監坊遺跡1・2次調査、西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡は有明海沿岸道路建設に伴い発掘調査された遺跡である。

坂井長永遺跡、西蒲池古塚・将監坊・古溝・下里遺跡の位置する有明海沿岸道路は、大牟田市三池港、佐賀空港などの広域交通拠点及び福岡県大牟田市、柳川市、大川市、佐賀県佐賀市、鹿島市など有明海沿岸の都市群を連携することで、地域間連携、交流促進を図るとともに一般国道208号等の渋滞緩和と交通安全確保を目的として計画された延長約55kmの地域高規格道路である。このうち、福岡県内は大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの3事業延長約29kmを推進している。現在、ほぼ全線において工事を実施しており、大牟田IC～大川西IC間の平成20(2008)年春の暫定供用を目指している。

有明海沿岸道路建設に先立って、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所(以下「福岡国道事務所」という。)から平成12(2000)年11月16日付け「一般国道208号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財について」で文化財の有無についての照会があった。これに対し、福岡県教育庁文化財保護課では平成13(2001)年2月に17地点において文化財が所在し、それ以外の地点についても試掘確認調査等別途協議が必要である旨を回答した。そこで、福岡国道事務所及び有明海沿岸道路出張所と文化財保護課で随時協議を行い、用地を取得できた地点から試掘確認調査を実施した。その結果、新たな埋蔵文化財包蔵地が確



第2図 坂井長永遺跡(1・2次)・西蒲池古塚遺跡(1～4次)・西蒲池将監坊遺跡(1・2次)・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡調査範囲図(1/3,000)



第3図 有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)

国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要

地点	市町名	大字名(区画)	遺跡名	H15.4.1現在 別表面積 (㎡)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要	特記事項
					試掘年度	本試掘面積 (㎡)	調査年度	面積(㎡)	作成年度	面積(㎡)		
1	大川市	津島 津島 津島		12,900	H18	0						試掘済み、遺跡無し
2	大川市	津島 津島 津島		25,700	H14-15-18	0						試掘済み、遺跡無し
3	大川市	橋保		15,400	H15-18	0						試掘済み、遺跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17-18	0	H17 H18	1,820 1,200	H19	3,020	鎌倉時代	・泉室の区画溝
5	福川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16 H17 H18	4,390 9,460 350	H19	14,200	平安時代	・泉室の区画溝 ・豊喜土器
6	福川市	西蒲池	西蒲池将監坊	4,400	H16	0	H17 H18	3,400 1,000	H19	4,400	古墳時代	・泉室の区画溝
7	福川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・泉室の区画溝と堀状跡
8	福川市	西蒲池	西蒲池下室	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・泉室の区画溝
9	福川市	東蒲池	東蒲池桜町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代	・中世の集落遺跡
												古墳時代
												平安時代
												鎌倉時代
10	福川市	東蒲池	東蒲池大内御	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代	・中世の集落遺跡
												平安時代
												鎌倉時代
11	福川市	矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15-16	0	H16 H17 H18 H19	2,040 430 1,820 210	H17 H18	水流 840 3,660	江戸時代	・江戸時代の町屋敷
												・水田後の鉄入り土器
												・鉄湯釜の鉄型とろっば
												・田道御溝らしい大溝
12	福川市	矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H16	4,000	(H20)	4,000	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
												江戸時代
13	福川市	矢加部	矢加部南屋敷	10,470	H16	0	H17 H18	6,000 1,500	(H20)	7,500	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
												江戸時代
14	福川市	三橋町	柳河	4,700	H18	0						試掘済み、遺跡無し
15	福川市	三橋町	蒲船津	9,700	H16	0	H17 H18 H19	4,700 3,300 1,700	H18 H19	水流・復元 8,700	弥生時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
												・弥生時代後期の
												・水溝・復元
												・古墳時代
												・礎石(竪立柱建物の柱の基礎)多数
16	福川市	三橋町	蒲船津水町	4,500	H17	0	H19	1,800	(H22)	1,800	弥生時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
												・鎌倉時代
17	福川市	三橋町	蒲船津西ノ内	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
18	福川市	大和町	徳益	4,500	H17-18	0						試掘済み、遺跡無し
19	福川市	大和町	豊原	25,000	H17-18	0						試掘済み、遺跡無し
20	福川市	大和町	塩塚	22,740	H17～19	0						江戸時代
												試掘済み、遺跡無し
21	福川市	大和町	栗	64,500	H16～19	(500)			(H20)		江戸時代	・福川市指定史跡栗長本土原跡 一部試掘済み、遺跡無し
22	高田町	東崎町	新開村日籠記碑	—	—	0	H14 H19	—	(H20)	—	江戸時代	・豊船岡工法(溝など植物を敷く工法) ・福岡県指定文化財
23	高田町	東崎町	黒崎坊	300	—	0	H16	160	(H20)	160	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳河千石遺跡

表1 国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要

認められる一方で、従来埋蔵文化財包蔵地とされていた範囲でも、客土に遺物が混入するのみで遺構が確認できないことが明らかになり、結果として本調査を要する15遺跡を確認した。(表1)

本書に掲載した遺跡は、工事を優先する箇所から本調査を実施した。試掘確認調査と本調査の期間は以下のとおりである。

坂井長永遺跡

- 試掘調査：平成17(2005)年8月9日～8月15日
1次調査：平成17(2005)年9月12日～9月22日(Ⅰ区北半部)
平成17(2005)年11月2日～12月6日(Ⅱ区)
平成18(2006)年1月16日～1月26日(Ⅰ区南半部)
2次調査：平成18(2006)年7月18日～9月19日

西蒲池古塚遺跡

- 試掘調査：平成16(2004)年6月7日～11日
1次調査：平成16(2004)年10月4日～10月29日
2次調査：平成16(2004)年12月8日～平成17(2005)年3月28日
3次調査：平成17(2005)年9月13日～11月18日(南半部)
平成17(2005)年12月8日～3月30日(北半部)
4次調査：平成18(2006)年5月9日～6月20日

西蒲池将監坊遺跡

- 試掘調査：平成16(2004)年9月2日～9月3日
1次調査：平成17(2005)年4月22日～6月29日
2次調査：平成18(2006)年7月18日～9月19日

西蒲池古溝遺跡

- 試掘調査：平成17(2005)年3月2日～4日
本調査：平成17(2005)年4月27日～10月7日

西蒲池下里遺跡

- 試掘調査：平成16(2004)年6月7日～6月11日
本調査：平成18(2006)年7月18日～平成19年(2007)3月31日

2 調査の組織

平成17(2005)年度から19(2007)年度の調査・報告に関わる関係者は右記のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
所長	増田 博行	増田 博行(～H17.8.1) 小口 浩(H17.8.2～)	小口 浩	小口 浩
副所長	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木 秀明	春田 義信	春田 義信 佐々木 秀明(～H19.6) 桑原 正純(H19.7～)
建設監督官	松尾 淳一郎	松尾 淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 柳林 保彦	今村 隆浩 柳林 保彦
調査第二課長	小堀尾 優	鈴木 昭人	鈴木 昭人	鈴木 昭人
調査課長			鈴木 厚廣(～H18.9) 川原 一哲(H18.10～)	川原 一哲
調査係長	長友 浩信	松本 厚廣		
専門員	相島 伸行	相島 伸行	伊東 良二	伊東 良二
国土交通技官	柳瀬 純矢	柳瀬 純矢	谷川 勝	谷川 勝
工務課長	田中 秀之進	堀 康雄	堀 康雄	堀 康雄(～H19.6) 清時 義雄(～H19.7)

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 主輔	清水 主輔	清水 主輔	鍋崎 洋二郎
総務部長	中原 一憲	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛
文化財保護課長	井上 裕弘	久芳 昭文	磯村 幸男	磯村 幸男
同課長補佐	川述 昭人	川述 昭人	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦
同参事兼課長技術補佐	川述 昭人 木下 修	木下 修	小池 史哲	小池 史哲
同課長補佐	安川 正郷	安川 正郷	安川 正郷	中瀬 宏
同参事補佐(調査第二係長)	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
庶務				
文化財保護課管理係長	稲尾 茂	稲尾 茂	井手 優二	井手 優二
同事務主査	宮崎 志行	石橋 信二	野中 剛	
同主任主事	石橋 信二 木竹 元	木竹 元	河上 大輔	河上 大輔
主事				柏村 正央 野田 雅
調査・報告書作成				
技術主査				秦 憲二
主任技師	秦 憲二	秦 憲二 今井 涼子 坂本 真一	秦 憲二	今井 涼子 坂本 真一 一瀬 智
技師			一瀬 智	
整理担当				
参事補佐				濱田 信也(調査第二係)
主任技師	坂元 雄紀	大庭 孝夫(調査第二係) 岡寺 未樹(調査第一係)	大庭 孝夫(調査第二係)	

なお、発掘調査及び報告書作成に当たっては、地元の方々をはじめ、発掘調査に参加された方々と福岡国道事務所、有明海沿岸道路出張所、柳川市教育委員会の関係者の皆様に感謝いたします。

第2章 位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年3月21日に三橋町・大和町と合併し、現在の柳川市となった。北は大川市・三潞郡大木町及び筑後市、東はみやま市、西は佐賀県と境を接し、南は有明海に面する。

柳川市域は有明海沿岸部の海退地形に筑後川と矢部川の支流である沖端川・塩塚川による大量の土砂の堆積によって形成された有明粘土を基盤とする沖積地であり、標高10m以下の極めて低平な平地である。それぞれの河口には干潟が発達する。

本遺跡の所在する西蒲池・坂井地区は柳川市の北東端と大川市南東端の標高4m前後の低平な水田地帯に位置している。

歴史的環境

本地域に集落が進出したのは弥生時代に入ってからで、大川市下林西田遺跡⁷¹で前期の遺構が確認されている。柳川市では前期段階の遺跡は見つかっていないが、弥生中期の遺跡は旧河川間の微高地に確認されている。

柳川市北部に位置する蒲池地区の三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群⁷²は市北部の拠点的な集落と見られ、広域に散布地や貝塚が確認されている。西蒲池地区の屑ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石と喪棺群の存在が確認されている。また、三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の一つといわれている。西蒲池地区のクリークに掛かる橋のたもとにも巨石を見ることができたが、有明海沿岸道路の路線内に入る範囲では遺構を確認できなかった。前述したとおり、柳川市域は有明粘土が広がる地域で、石が産出しないばかりか河原石も見られない。したがって、巨石は遠方から搬入したものであり、すでに階層分化が進んでいたことが伺われる。

市北西部では磯島フケ遺跡⁷³、江鶴遺跡⁷⁴が挙げられる。弥生後期には蒲船津江頭遺跡⁷⁵・一本松遺跡⁷⁶・正行西の頭遺跡⁷⁷・松の木塚遺跡⁷⁸・日渡遺跡⁷⁹など遺跡が増加する。

蒲船津江頭遺跡では弥生後期の整地により居住域を広げており、有明粘土を基盤とする本地域での居住地の拡大方法を窺える。また、掘立柱建物跡には礎板が見られ、柱の沈み込みを防いでおり低湿地での工夫をみることができる。

古墳時代後期になるとさらにヘータカサン遺跡⁸⁰や地藏堂遺跡⁸¹などの集落遺跡が増加する。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加が原因であろう。

奈良時代のもは未確認だが、平安時代から中世にかけて、低平地を利用した条里地割が大規模に敷設されており、その北側に大川市三丸東田口遺跡⁸²・三丸中小路遺跡⁸³・宮ノ前遺跡⁸⁴・園田遺跡⁸⁵など平安時代の散布地が広がっている。東蒲池榎町遺跡⁸⁶でも10世紀の遺構が多く見られており、こうした耕地の開発に伴って集落が拡大したことを窺わせている。この時期、筑後川以南の西部には三潞庄⁸⁷という大荘園が存在していたとされており、なんらかの関わりがあったようである。

中世では中世前期の東蒲池大内曲り遺跡²¹³と中世後期の矢加部南屋敷遺跡²¹⁶が確認されており、後者からは中国製陶磁器が多く見られることから、本地域を支配していた有力豪族の蒲池氏に関係する集落であった可能性がある。

戦国時代末期に蒲池氏は滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三藩・下妻・山門の三郡を支配した。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易され、田中吉政が筑後国主となり、慶長6（1601）年に入国した。

田中吉政は慶長本土居の建設、堀割の掘削や街道整備など多くの土木事業を行った。慶長本土居は現在道路として使用されており、堀割は「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が藩主となった。



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 坂井長永遺跡 | 14 櫻津城跡 | 27 宮ノ前遺跡 | 40 厩ノ内遺跡 | 53 蒲船津城跡 |
| 2 西蒲池古塚遺跡 | 15 栗木町遺跡 | 28 国田遺跡 | 41 玉命命神社遺跡 | 54 浮島天神遺跡 |
| 3 西蒲池荷監坊遺跡 | 16 小保遺跡 | 29 蒲池遺跡群 | 42 南矢ヶ部遺跡Ⅰ | 55 徳証八ヶ部遺跡 |
| 4 西蒲池古渠遺跡 | 17 津村貝塚 | 30 東蒲池門前遺跡 | 43 南矢ヶ部遺跡Ⅱ | 56 今古賀城跡 |
| 5 西蒲池下妻遺跡 | 18 津村城跡 | 31 東蒲池蒲池遺跡 | 44 阿部邸跡遺跡 | 57 辻井手遺跡 |
| 6 東蒲池大内曲り遺跡 | 19 浦田遺跡 | 32 前田遺跡 | 45 東小路遺跡 | 58 内新開遺跡 |
| 7 東蒲池樓可遺跡 | 20 北島ノ一遺跡 | 33 鬼古賀遺跡Ⅱ | 46 磯崎フケ遺跡 | 59 西馬場遺跡 |
| 8 矢加部町屋敷遺跡 | 21 宮ノ後貝塚 | 34 下木佐木遺跡Ⅰ | 47 松ノ木三十六遺跡 | 60 江崎城跡 |
| 9 矢加部五石田遺跡 | 22 観音遺跡 | 35 天神寺遺跡 | 48 赤大部遺跡 | 61 龜見古墳 |
| 10 矢加部南屋敷遺跡 | 23 北古賀遺跡 | 36 下木佐木遺跡Ⅱ | 49 一本松遺跡 | 62 龜見遺跡 |
| 11 蒲船津江原遺跡 | 24 西田口村城跡 | 37 馬場遺跡 | 50 日渡遺跡 | |
| 12 蒲船津水町遺跡 | 25 三丸中小路遺跡 | 38 鬼古賀遺跡Ⅰ | 51 ヘータカサン遺跡 | |
| 13 蒲船津西ノ内遺跡 | 26 三丸東田口遺跡 | 39 中村遺跡 | 52 地蔵堂遺跡 | |

第4図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

註

- 1 福岡県教育委員会1998「下林西田遺跡」福岡県文化財調査報告書第132集
- 2 鏡山猛1956「九州考古学論叢」吉川弘文館
- 3 柳川市教育委員会2006「磯島フケ遺跡」柳川市文化財調査報告書第1集
- 4 筑後考古学研究会1997「筑後考古」第9巻
- 5 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
- 6-11 前掲註4
- 12 福岡県教育委員会1979「福岡県遺跡等分布地図」(大川市・筑後市・三潁郡編)
- 13 福岡県教育委員会2005「東蒲池榎町遺跡」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
- 14 文献上の初現は平治元(1159)年の「宝莊院領荘園注文案」であり、宝莊院領荘園のなかでも最大規模の荘園として記載されている。
- 15 福岡県教育委員会2007「有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集東蒲池大内曲り遺跡」
- 16 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中

参考文献

- 福岡県教育委員会 1978「福岡県遺跡等分布地図」(大牟田市・柳川市・山門郡・三潁郡編)
福岡県教育委員会 1979「福岡県遺跡等分布地図」(大川市・筑後市・三潁郡編)
柳川市 2002「新柳川明証国会」柳川市史特別編

坂井長永遺跡1次調査

第3章 坂井長永遺跡1次調査

遺跡の所在する大川市坂井地区は、柳川市との市境に位置し、柳川市域同様に低平な地形であり、南と西側に広大な水田地帯が広がっている。北側クリークに架かる国道209号の橋は「御境橋」と呼ばれ、ここが江戸時代の柳川藩と久留米藩の藩境となっている。また、国道209号を挟んで北東は西蒲池古塚遺跡に隣接している。

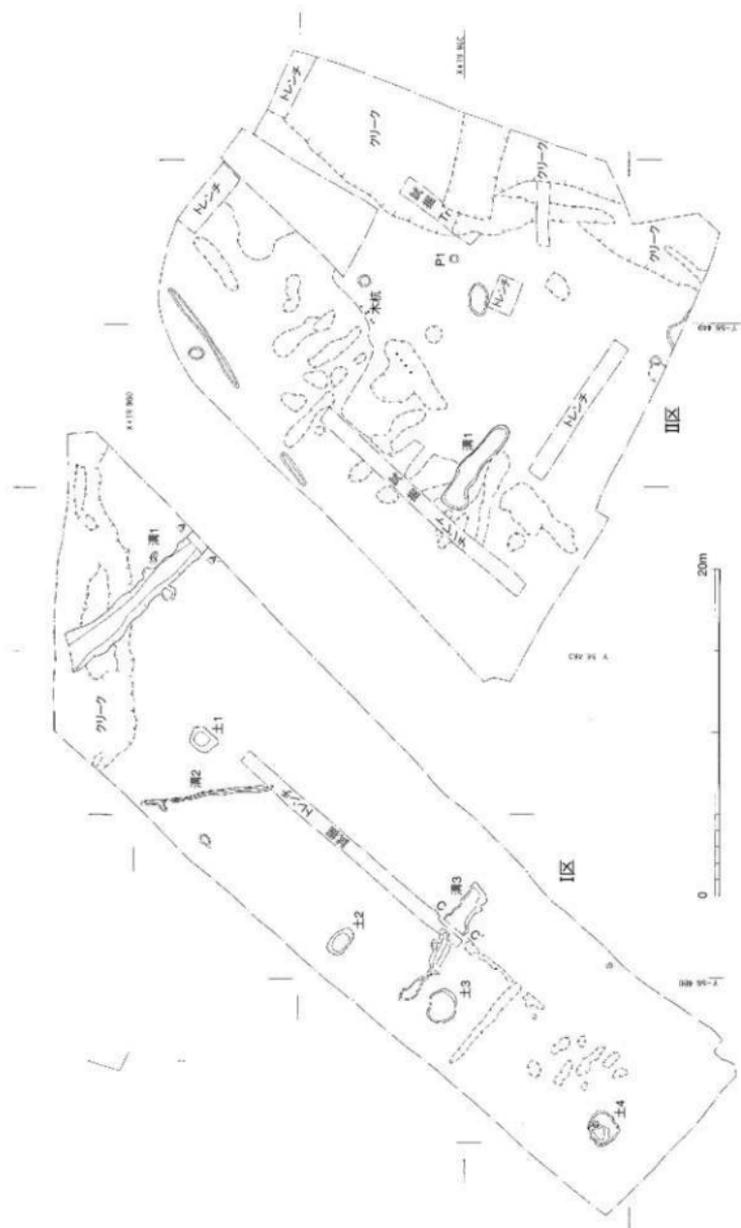
調査地点は大川市大字坂井847-1・848-1・849-2・848-3番地で、調査面積は1,820㎡である。

1 調査の経過

坂井長永遺跡は「長永遺跡^甲」として周知されている埋蔵文化財包蔵地の東に位置しており、平成17(2005)年8月9日～15日の試掘調査の結果、国道208号以南の市道に挟まれた地点にも埋蔵文化財の広がり確認できた。また、「長永遺跡」として周知されている702～721-1番地については遺構が確認できなかったため、西側は大字坂井847-1番地、842-1番地の一部までを調査対象範囲とした。また、東側はクリーク以東の886・887番地等を平成18(2006)年5月18日に試掘調査を実施した結果遺構が確認できなかったため、調査範囲を東側クリークまでとした。この範囲の小字名は「東得丸」であったが、隣接地が「長永遺跡」として周知されていることから遺跡名を「坂井長永遺跡」とした。

クリークの縮め切り工事を行うことから、用地が取得できていた大字坂井847-1番地を先行することになったが、北側に作物があったことから、南半を先に調査することになった。これをⅠ区とし、調査区内を南北に反転させることにした。平成17(2005)年9月12日に重機を入れ、表土剥ぎを行い、そののちに作業員を入れ、遺構検出を始めた。遺構が少なかったため9月22日にローリングタワーで全体写真を撮り、28日には埋め戻しを終えて撤収した。848-1番地は用地取得が遅れていたためここを中心とした区画をⅡ区とした。平成17(2005)年11月9日にバックホーを入れて、西側半分の表土剥ぎを行った。同月10日には発掘作業員を入れて調査を開始した。Ⅰ区で検出した溝などはここでは確認できなかったが、遺構検出時に遺物が数点出土した。同月18日～21日にかけてバックホーを入れ、残り東側部分の調査をした。東側でクリークのラインを確認したが、遺構は検出できなかった。12月7日に埋め戻し、調査を終了した。

最後に、大字坂井847-1番地の作物収穫後、1月16日にⅠ区北半の調査に着手した。1月26日に高所作業車で全体写真を撮影し、1月27日に埋め戻して撤収した。

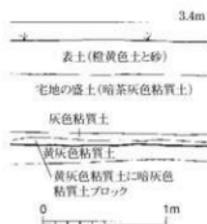


第5図 坂井長水通跡1次調査遺構配置図 (1/300)

2 遺構と遺物

本調査区ではⅠ区から土坑4基と溝状遺構3条が検出されたが、Ⅱ区では落ち込みのみで、明らかな遺構は確認できなかった。

本調査区の基本土層は第6図のとおりである。調査に入る直前まで個人住宅があったので、第1層の表土と第2層の盛土が約80cm堆積していた。それらを除去して、第3層の灰色粘質土の下の第4層の黄灰色粘質土に暗灰色質粘土が混ざる層を確認した。この第4層の上面の標高2.4m前後を遺構面として調査した。遺構は検出できなかったが、少量の遺物が出土した。



第6図 坂井長永遺跡1次調査Ⅱ区土層実測図(1/40)

1) 土坑

1号土坑(図版3、第7図)

調査区北部に位置する。平面略方形で東側に張り出し部があり、壁にテラスを持つ。長軸160cm、短軸130cmで、深さは52cmを測る。主軸方向はN-38°-Eである。埋土は自然堆積でなく、基盤層ブロックを含むので人為的に埋め戻されている。

2号土坑(図版3、第7図)

調査区中央部に位置する。平面略方形で東側に張り出し部があり、壁は緩やかに立ちあがる。長軸175cm、短軸109cmで、深さは43cmを測る。主軸方向はN-53°-Wである。

3号土坑(図版3、第7図)

調査区中央部に位置する。平面略方形で東側に張り出し部があり、壁にテラスを持つ。長軸171cm、短軸134cmで、深さは12cm程度しか残っていない。主軸方向はN-79°-Wである。埋土は自然堆積でなく、基盤層ブロックを含むので人為的に埋め戻されている。

4号土坑(図版3、第7図)

調査区南端に位置する。平面略方形で南側に張り出し部があるものと思われるが、削平が著しく上位の形状は不明である。長軸159cm、短軸151cmで、深さは17cm程度しか残っていない。主軸方向はN-52°-Eである。

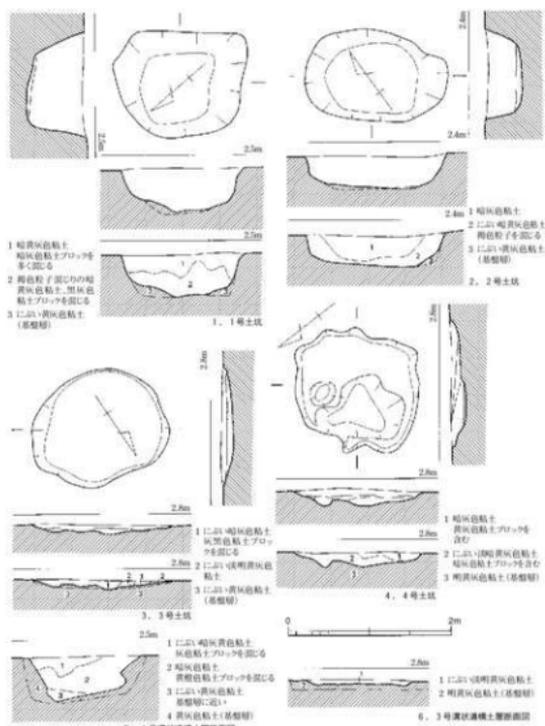
2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版1、第5図)

調査区北端に位置し、N-53°-W方向に走る。クリークに西半を切られているが、クリークの浅い部分で遺構が残っており、幅230cm前後、最深部で60cm前後を測る。幅は東にいくほど狭くなっており削平を受けている。水は西に流れており、現在のクリークの水流と同一方向である。

出土遺物 (図版3、第8図)

1は能泉窯系青磁碗I-5・b類の胴片で、灰黄緑色の釉で、胎は灰白色。13世紀後半。



第7図 坂井長水遺跡1次調査1区遺構実測図 (1/60)

2号溝状遺構 (図版1、第5図)

調査区北部に位置し、N-8°-W方向に走る。試掘トレンチに東端を切られており、それ以东は検出されていない。西端も途切れている。幅38cm前後、最深部で5cm程度しかなく、削平を受けているものと思われる。床面にほとんど勾配がないが、水は西に流れている。

3号溝状遺構 (図版1、第5図)

調査区中央部に位置し、N-56°-W方向に走る。試掘トレンチに中央部を切られており、非常に浅く、最深部でも15cm程度しか残っておらず、東西端はいずれも検出されていない。平面形は不整形で、最大幅は167cm前後を測る。大きく削平を受けているものと思われる、本来は西蒲池古塚遺跡に見られるような浅く広い溝で、湾曲するタイプであろう。床面にほとんど勾配がないが、水は西に流れている。

出土遺物（第8図2～4）

2・3は土師器小皿で、2は復元底径5.0cmで、外面は回転ヘラケズリで、内外黄橙色を呈する。胎土は軟質、精良。3は復元底径6.6cmで、内外ナデで、外面は黄色のスリップがかかっている。そのため外面は黄色、内面黄橙色を呈する。胎土は軟質、精良。4は瓦器椀で内外黒灰色のため黒色土器のようにも見えるが、ミガキがなく、高台の形状から、12世紀後半から13世紀前半の瓦器椀と判断した。

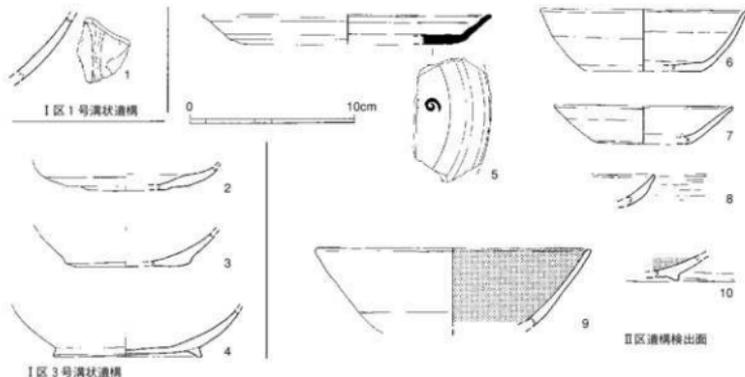
3) II区遺構検出時出土土器（図版3、第8図）

5は須恵器皿片の墨書土器である。外面底部に2字書かれ、1字は僅かに何か書かれていることは解るだけであるがもう一つは平仮名「の」状に書かれていた。復元口径17.4cm、器高1.8cm、復元底径12.4cmを測る。口縁部は外側に開き、内外面ともナデ調整で、外面底部のみヘラ切りである。6～8は土師器である。6は杯片で復元口径12.6cm、器高3.7cm、復元底径7.0cmを測る。外面底部はヘラ切りで、他はナデ調整である。7は復元口径10.8cm、器高2.25cm、復元底径6.0cmを測る。8は杯片か。僅かにミガキ状の痕跡が残る。9は黒色土器椀片で、復元口径16.6cmを測る。内面は黒色を呈する。10は瓦器椀の高台片か。高台の断面は三角形状を呈する。

3 小結

坂井長永遺跡1次調査では、土坑4基と溝状遺構3条が検出された。1・3号溝状遺構は方向が表層条里の東西方向と一致しており、略方形の土坑が直線的に並ぶなど北東に隣接する西蒲池古塚遺跡と同じような在り方なので、本遺跡も条里型地割に伴う遺構と考えられる。

調査地点の小字は「丁永」であり、「長い一町」という意味であろうか。条里型地割に起因す



第8図 坂井長永遺跡1次調査出土遺物実測図（1/3）

る地名であろう。1号溝状遺構は西蒲池古塚遺跡の溝と比較すると規模が大きく、表層条里区画の北端に位置し、現行のクレークに掘り直されていることから北端の坪境溝であった可能性が高い。

土坑は南にいくほど残りが悪いので旧地形は南のほうが高かったようだ。本来西蒲池古塚遺跡のように、北側の坪境溝に水を流すための小型の直線的な溝があったと思われるが、削平を受けて失われている可能性が高い。3号溝状遺構は削平されているが、幅が広く浅いことから地形に沿って湾曲する溝と思われる。2号溝状遺構については方向が異なり、時期がわからないので同時併存でないのかもしれない。

I区の遺構は、遺物はわずかだが、12世紀後半から13世紀後半の土器・陶磁器が出土しているので、この頃のものとして差し支えないだろう。

II区には遺構がなく、東側の886・887番地の試掘調査でも遺構が確認できなかったことから、II区東端のクレークが条里の東端であり、II区は区画の残地であったことが想定できる。

以上のことから、本遺跡は田脇地区の条里型地割に併行する条里型地割の北東角にあたと考えられる。「長永遺跡」として周知されている範囲からは試掘調査で遺構が確認されなかったが、条里地割の中に含まれるので、一連の遺跡とするべきであろう。本調査区は遺跡名を坂井長永遺跡としているが、調査の結果条里型地割以外の遺構がなかったことから、将来的には「長永遺跡」とともに「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里⁷²」の一部とするべきである。

註

- 1 「長永遺跡」は福岡県文化財地図に掲載された遺跡名で平安時代の散布地となっている。
- 2 福岡県文化財地図では「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里」となっている。

1. 坂井長永遺跡1次調査
全景（上空から）



2. 同上I区北半全景
（南東から）



3. 同上I区南半全景
（北西から）





1. 坂井長永遺跡1次調査
Ⅱ区東半全景
(上空から)



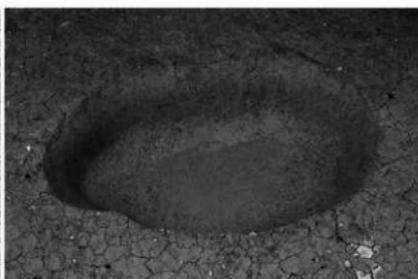
2. 同上西半全景
(上空から)



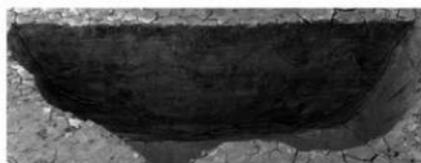
3. トレンチ内土層断面
(南から)



1. 1号土坑（北西から）



3. 2号土坑（北東から）



2. 1号土坑土層断面（北西から）



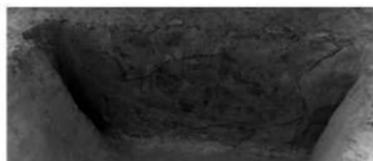
4. 2号土坑土層断面（南西から）



5. 3号土坑（北東から）



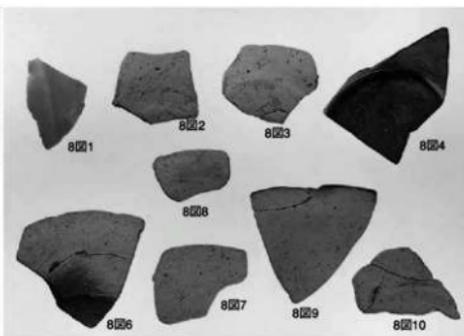
6. 4号土坑（北西から）



7. 1号溝状遺構土層断面（南東から）



825



8. I・II区出土遺物

9. II区出土墨書土器

坂井長永遺跡 2 次調査

第4章 坂井長永遺跡2次調査

坂井長永遺跡2次調査は、1次調査地の南側1,300㎡を対象地とする。対象地は市道によって東西の2区画に分けられるため、西側を1区、東側を2区として調査区を設定した。

1区は1次調査のⅠ区南側に隣接し、東西38m、南北は東側で5m、西側で11mの細長い区画である。遺構面は耕作土直下の黄灰色粘土で、現地表から15～45cmの深さで検出した。調査の結果、3基の土坑と2条の溝状遺構を確認できた。なお、整理・報告作業の過程で調査時に付した遺構番号に欠番が生じたが、作業上の混乱を避けるため本報告では欠番のままとしている。



第9図 坂井長永遺跡2次調査1区遺構配置図 (1/300)

2区は1次調査のⅡ区南側に隣接し、東西約45m、南北約20mの区画である。地表下10～20cmで1区と同じく黄灰色粘土の地山を検出したが、遺構は確認できなかった。遺物は小片9点を採取したが、図化に耐えるのは1点である。

1 調査の経過

調査の経過は以下のとおりである。

平成18(2006)年

- 8月2日 重機による1区の表土剥ぎ開始
- 8月3日 人力による1区の掘削開始
- 8月9日 ラジコンヘリによる1区の空中写真撮影
- 8月10日 1区の調査終了
- 8月28日 2区の表土剥ぎ開始
- 9月7日 人力による2区の掘削開始
- 9月14日 現場撤収

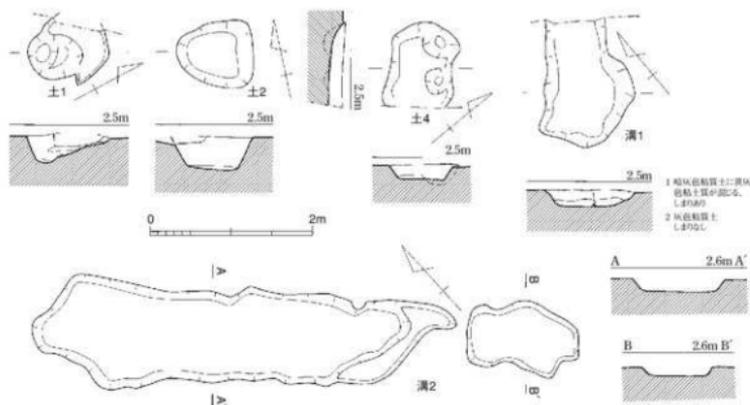


2 遺構と遺物

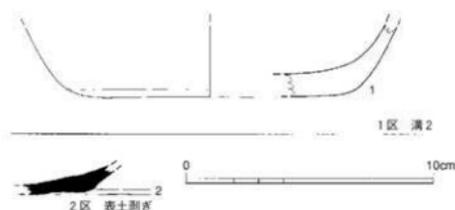
写真1 2区作業風景と全景(西から)

1号土坑(図版4、第10図)

1区の西端、調査区域の中央に位置する。西側の一部が調査区外へ伸びており、現状で長軸1.0m、短軸0.9mの不整形な土坑である。床面は南に向かって緩やかに下がり、2段のテラスを形成する。南端部の最も深いところで深さ36cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。



第10図 坂井長永遺跡2次調査遺構実測図(1/60)



第11図 坂井長永遺跡2次調査出土遺物実測図(1/2)

2号土坑(図版4、第10図)

1号土坑の南3mで検出した。西半部が浅い擾乱に切られる。三角形に近い平面プランで、長軸は94cm、短軸は東側に寄って85cmを測る。床面は東にやや下がるがほぼ平坦で、深さは40~45cm。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

4号土坑(図版5、第10図)

1区の東端、調査区境に接して検出した。長軸は調査区外へと伸びるため、現状で107cm、短軸は85cmを測り、平面形はいびつな楕円形状を呈する。床面は平坦だが、北と東側の2ヶ所にピット状の窪みがある。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

1号溝状遺構(図版5、第10図)

1区北壁の中央に位置し、調査区外へと伸びる。検出できた長さは1.6m。幅は最も広い南側で1.1m、調査区北壁に当たる所で72cmとなる。深さは概ね20cmと浅い。出土遺物は確認できなかった。

2号溝状遺構(図版5、第10図)

1区東側、4号土坑の北西4mに位置する。上部が削平を受けたようで、2つに分かれた状態で検出したが、平面形状・深さ・埋土の状況から同一の遺構と判断した。現状の長さは6.7m、幅は最も広い所で68cmを測る。検出面からの深さは南東側で約10cm、一段下がる北東側でも14cm前後と浅い。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。遺物は土師器片数点が出土している。

出土土器(第11図)

1は埋土から出土した土師器の底部破片。椀又は鉢であろうか。1/6ほど残存し、底径は9.6cmに復元できる。全体的に摩滅が激しく、調整は不明である。

その他の出土土器(第11図)

2は2区の表土剥ぎ時に出土した須恵器の杯身もしくは皿の破片である。底部の小片であるため全体の形状は復元し得ないが体部は浅く、口縁部は直線的に伸びる。高台は持たない。体部内外面回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面は回転ヘラ切り後ナデで調えられる。

3 小結

2次調査では、1区から3基の土坑と2条の溝状遺構を検出した。いずれも埋土を同じくすることから同時期の遺構と考えられるが、出土した遺物は2号溝の土師器片を含め風化が激しく、器種や時期の特定が難しい。2区では遺構は検出されなかったが、遺物9点を採取した。多くは1区と同様摩滅した小片だが、図化した須恵器1点は8世紀後葉に属する。

1. 坂井長永遺跡
2次調査1区
全景
(上が北東)



2. 1号土坑
(東から)



3. 2号土坑
(南から)





1. 4号土坑
(東から)



2. 1号溝状遺構
(南から)



3. 2号溝状遺構
(西から)

西蒲池古塚遺跡 1 次調査

第5章 西蒲池古塚遺跡1次調査

遺跡の所在する柳川市西蒲池地区は、大川市との市境に位置する低平で広大な水田地帯である。集落域は北東部にあり、水田地帯と明確に分かれている。調査地点は柳川市大字西蒲池237番地の一部で、調査面積は1,170㎡である。

1 調査の経過

西蒲池古塚遺跡は試掘調査の結果、国道209号に沿うクレークから北東の路線内全面に渡って遺構が存在することが判明し、用地が取得できた範囲から調査することになった。そこで今後の調査で作業ヤードが必要になるため、用地が取得できた大字西蒲池237番地を先に調査することになった。

平成16(2004)年10月4日に重機を入れて表土剥ぎを開始した。遺構面が浅く、水田床土直下から検出され、鉄分が吸着しているところが多く、断ち割りトレンチで確認しながら検出を進めた。10月29日にローリングタワーで全体写真を撮影したのち、調査を完了し、撤収した。

2 遺構と遺物

本調査区では土坑2基と溝状遺構3条が検出され、このうち2号土坑はローリングを受けた土器や陶磁器が出土し、埋土からも近世のものと同断されたので報告から外した。2号溝状遺構は浅く、近世以降の溝状遺構と考えられたので、写真のみ掲載した。

1) 土坑

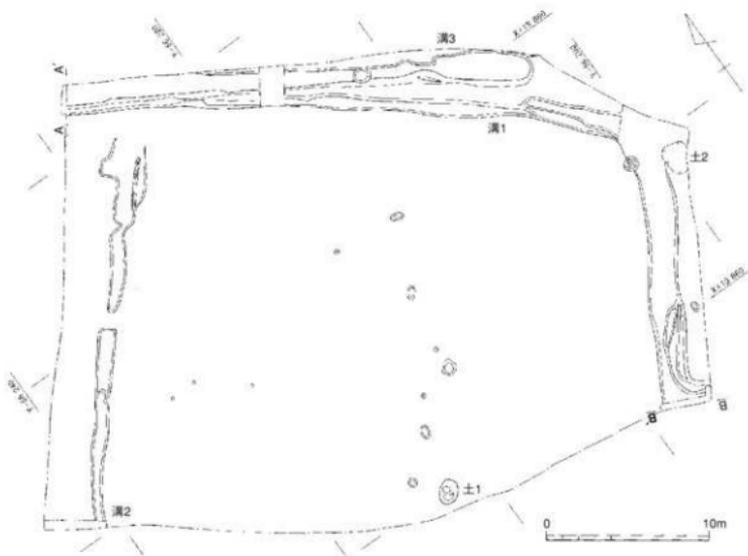
1号土坑(図版6、第13図)

調査区南端中央に位置する。平面楕円形で、長軸117cm、短軸88cmで、深さは30cmを測る。主軸方向はN-39°-Wである。埋土は、上層が暗黄灰色粘土で、下層はにぶい暗黄灰色粘土。遺物は土器の小片のみなので、近世の可能性もある。

2) 溝状遺構

1号溝状遺構(図版6・7、第12・13図)

調査区北端から東端にあり、東西方向と直角に折れ曲がって南北方向に走る溝で、2方向に切り合いがないことから1つの溝とした。東西方向は3号溝状遺構と併走している。



第12図 西蒲池古塚遺跡1次調査遺構配置図 (1/300)

東西方向は $N-53^{\circ}-W$ 、南北方向は $N-31^{\circ}-E$ である。東西方向の東端は調査区外に伸びている。南北方向の南端部はさらに東に曲って伸びるようで、東壁が斜めに広がっていた。

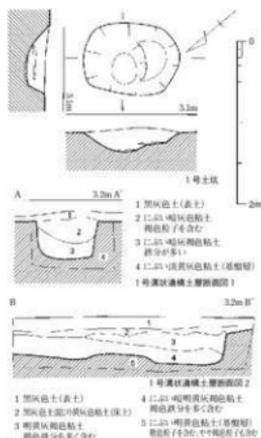
ちょうど東西軸と南北軸が交わるところで近世の2号土坑に切られている。中位にテラスをもつ部分があることと土層から、掘り直しがあった。同一直線上に3次調査の9・11号溝状遺構があり、ここでは明瞭に2つの溝であった。1号溝状遺構の東端が幅広くなっていたのは、この2つの溝が1つに重なって検出されたためである。最大幅206cm、最深部で51cmを測る。

3号溝状遺構 (図版6、第12図)

調査区北端にあり、調査区北壁に多くがかかる。N-53° - W方向に1号溝状遺構と併走しており、最深部で深さ11cmと非常に浅かったために3次調査区では検出できなかった。南北方向はN-31° - Eである。東西方向の東端は調査区外に延びている。最大幅92cmを測る。

3 小結

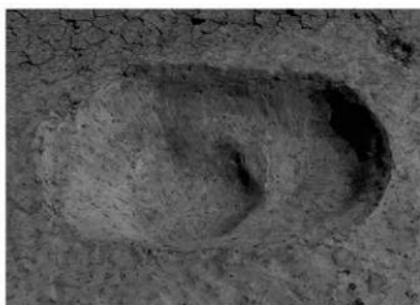
本調査区では調査区の壁に沿うように溝状遺構2条が検出され、調査区自体が条里型地割に区画されていたことが分かった。区画内は水田地帯であるがゆえに遺構はほとんどなく、1号土坑から北にやや大きいピットが南北に散在している程度である。1号溝状遺構の東西方向に走る部分の中央に大型のピットがあったが、これは淡灰色粘土を埋土としていたので明瞭に新しい遺構であった。3次調査の6号溝状遺構は浅かったためか、本調査区内では検出できていない。本調査区は面積が狭く、遺構も少ない上に2・3次調査に挟まれているので、詳細についてはまとめて記述する。



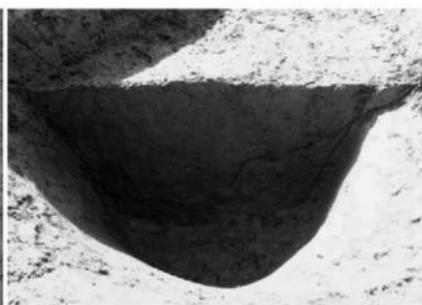
第13図 西蒲池古塚遺跡1次調査遺構実測図 (1/60)



1. 西蒲池古塚遺跡1次調査全景（北東から）



2. 1号土坑（北西から）



4. 2号土坑土層断面（北から）



3. 2号土坑（東から）



5. 1・3号溝状遺構（北西から）



1. 1号溝状遺構西部土層断面（南東から）



2. 1号溝状遺構南部土層断面（北から）



3. 1号溝状遺構北東部（北東から）



5. 2号溝状遺構南部土層断面（北から）



4. 2号溝状遺構（南西から）

西蒲池古塚遺跡 2 次調査

第6章 西蒲池古塚遺跡 2次調査

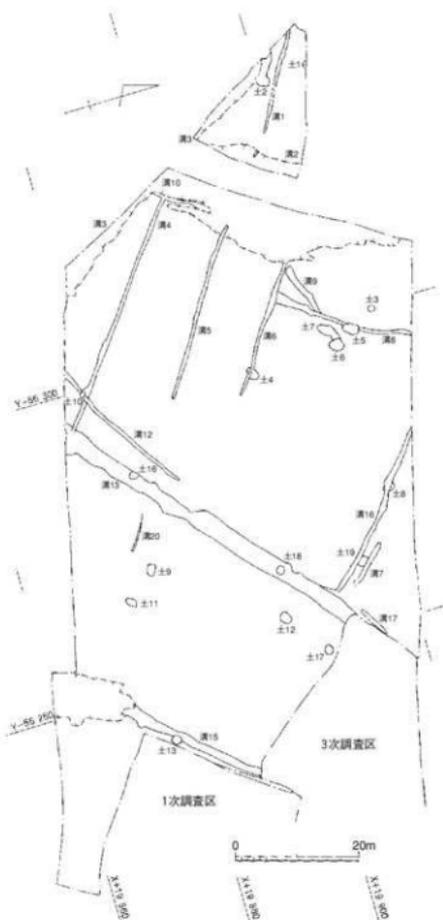
遺跡の所在する柳川市西蒲池地区は、大川市との市境に位置する低平で広大な水田地帯である。集落域は北東部にあり、水田地帯と明確に分かれている。東側は1次調査区、北東側は3次調査区と接する。調査地点は大字西蒲池239番地、236・240・241・242・246・244-1番地の一部を対象とし、調査面積は3,220㎡である。

1 調査の経過

西蒲池古塚遺跡は試掘調査の結果、国道209号に沿うクリークから北東の路線内全面に渡って遺構が存在することが判明し、用地が取得できた範囲から調査することになった。2次調査は、有明海沿岸道路出張所の橋台建設を優先させる意向から、用地の西端から調査することになった。

用地は南西に国道208号沿いのクリークがあり、これと交差する市道で、西端部が小さい三角形に分断されているが、地区を分けていない。東側は1次調査区、北東側は3次調査区と接するが、調査上の混乱を避けるため、遺構番号は連続させず、2次調査単独で付けている。

平成16(2004)年12月8日に、調査終了した1次調査区にバックホーを入れて進入路・駐車場作成し、12月10日に表土剥ぎを開始した。12月13日、矢加部町屋敷遺跡2次調査の機材を搬送し、作業員を投入、遺構検出を開始した。平成17(2005)年3月7日に空中写真を撮影し、3月29日に埋め戻しを完了して撤収した。



第14図 西蒲池古塚遺跡 2次調査遺構配置図 (1/800)

2 遺構と遺物

本調査区では土坑22基、溝状遺構19条が検出され、このうち14・15・20～22号土坑は近世の土坑である。2・3・11・14・18号溝状遺構は近世のクレークであった。本書では基本的には近世の遺構は報告せず、中世以前の遺物を選抜して掲載して報告する。

1) 土坑

1号土坑 (図版9、第15図)

調査区西端に位置し、調査区北壁に半分かかって検出された。平面円形で、径120cm、深さは48cmで、半分のみを検出なので主軸方向は不明である。出土遺物がないため時期は不明。

2号土坑 (図版9、第15図)

調査区北西部に位置する平面形が不整形だが、南西隅のクレークである3号溝状遺構に上面を削平されたため、本来は長方形の土坑であったと思われる。南側の下場が広いがやや掘りすぎている。他の土坑より深いこともある。長軸は554cm残存し、短軸226cm、深さは64cmで、N-32° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

3号土坑 (図版9、第15図)

調査区西部に位置する平面円形の土坑で、壁の立ち上がりは北側が緩やかである。径104cm、深さは24cmを測る。上面の削平が予想されるが、平面形の違いからほかの土坑とは性格を異にするものだろう。遺物が出土していないので時期は分からないが、埋土は暗灰色粘土と同様なので、時期差はあまりないのではないだろうか。

4号土坑 (第15図)

調査区西部に位置し、6号溝状遺構に切られている。南東部に小さく張り出し、そこが他より緩やかに立ち上がる。長軸220cm、短軸160cmで、深さ41cm。主軸方向はN-62° -W。遺物がなかったため、時期は不明だが、埋土が暗灰色粘土であったので黒色粘土の6号溝状遺構との切り合いは明らかだった。

5号土坑 (図版9、第15図)

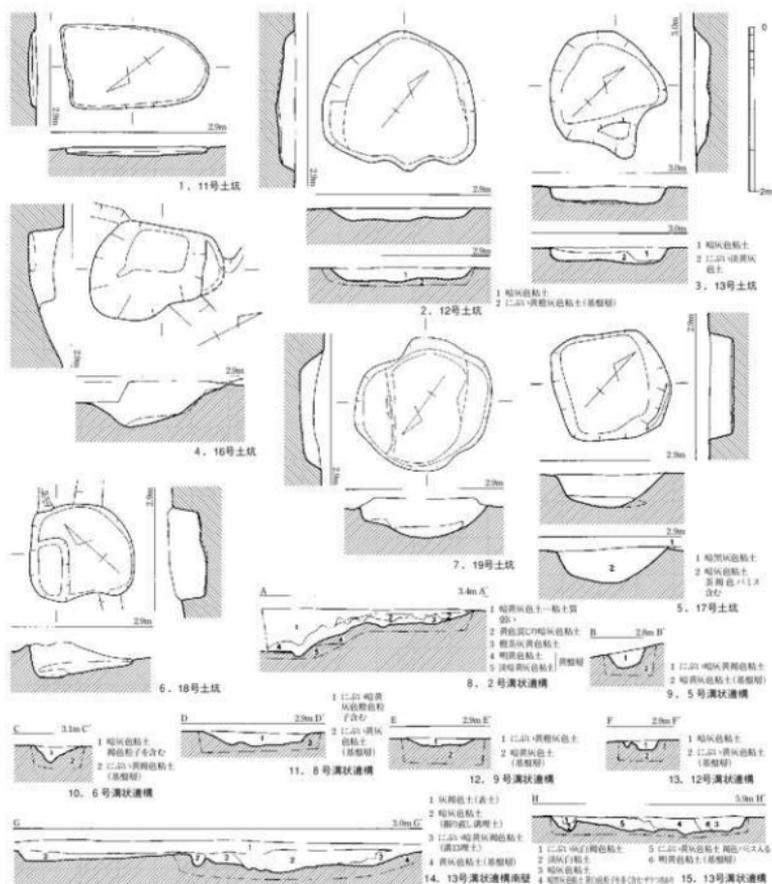
調査区北西部に位置し、8号溝状遺構と切り合っているが、先後関係は分からなかった。削平が著しく、深さ14cm程しか残っていない。現存で長軸273cm、短軸160cmある。張り出し部があったとしても削平のために失われたであろう。主軸方向はN-64° -Wである。出土遺物がないため時期は不明。

6号土坑 (図版9、第15図)

調査区北西部に位置する平面略方形の土坑で西側に張り出し部を持つ。7号土坑に切られている。長軸239cm、短軸202cm、深さは31cmを測る。主軸方向はN46°-Wとする。出土遺物がないため時期は不明。

7号土坑 (図版9、第15図)

調査区北西部に位置する平面不整形の土坑で、6号土坑を切っていた。長軸418cm、短軸



第16図 西蒲池古塚遺跡2次調査11・13・16～19号土坑、2・5・6・8・9・12・13号溝状遺構土層断面実測図(1/60)

155cmと大型だが、深さは31cmしかなく、壁の立ち上がりも緩やかで、落ち込み状である。主軸方向はN-43° -Wである。出土遺物がないため時期は不明。

8号土坑 (図版10、第15図)

調査区北中央部に位置する方形の小型の土坑で、16号溝状遺構と交差するが、切り合い関係は不明であった。床面はほぼ平坦だが南側がやや高い。長軸180cm、短軸88cm、深さは18cm。主軸方向はN-5° -Eで、出土遺物がないため時期は不明。

9号土坑 (図版10、第15図)

調査区南東に位置する。略方形を呈し、南西部にテラスがあり、張り出しが付く可能性あり。長軸184cm、短軸134cm、深さ27cmを測る。主軸方向はN-59° -Eとする。出土遺物がないため時期は不明。

10号土坑 (図版10、第15図)

調査区南中央部に位置する楕円形の小型の土坑で、12号溝状遺構を切っているが、4号溝状遺構との切り合い関係は不明であった。床面は東側が深い。長軸147cm、短軸102cm、深さは38cm。主軸方向はN-38° -Eとする。出土遺物がないため時期は不明。

11号土坑 (第16図)

調査区南東に位置する。略方形を呈し、南端部に張り出し部が付く可能性あり。削平のため8cm程しか残っていない。そのため土層も単層では暗灰色粘土である。床面はほぼ均一な深さで、中央部がやや窪む。長軸175cm、短軸102cmを図り、N-38° -W方向を主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

12号土坑 (図版10、第16図)

調査区中央北部に位置する。略半円形を呈し、南東辺中央に突出部を持つ。これは13号土坑と同じ形状である。削平のため17cm程しか残っていない。土層は暗灰色粘土で、床面はやや凹凸がある。長軸184cm、短軸170cm、深さは17cmで、N-40° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

13号土坑 (図版10、第16図)

調査区東端に位置し、15号溝状遺構を切る。略半円形を呈し、南東辺中央に突出部を持つ。これは12号土坑と同じ形状であり、本遺構ではこの突出部側の壁の立ち上がりが急になっている。深さは削平のため20cm程しか残っていない。床面はやや凹凸がある。長軸142cm、短軸162cmでN-47° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

16号土坑（図版10、第16図）

調査区中央南部に位置し、13号溝状遺構を掘り進めていくと床面で検出されたもので、先後関係は分からなかった。平面は不整形だが溝に掘り崩されたため、本来は方形であったものと思われる。また、南側が深くなっており、北側の壁の立ち上がりが緩やかであることから、北側に張り出し部があった可能性がある。長軸158cm、短軸119cm、深さは54cmで、N-62° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

17号土坑（図版11、第16図）

調査区北東に位置し、方形で北辺に張り出し部があり緩やかに立ち上がる。長軸138cm、短軸132cm、深さは39cmで、N-44° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

18号土坑（図版11、第16図）

調査区中央部に位置し、13号溝状遺構を掘り進めていくと床面で検出されたもので、先後関係は不明。西側が深くなっており、東側に張り出し部があった可能性があるが、13号溝状遺構の内部から検出されたため、上位の形態は不明である。長軸128cm、短軸120cm、深さは44cmで、N-49° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

19号土坑（図版11、第16図）

調査区中央北部に位置し、7号溝状遺構に切られ、16号溝状遺構を切っている。切り合い関係は明確であった。方形で北辺に張り出し部がありテラスを持つ。長軸170cm、短軸163cm、深さは48cmで、N-35° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

2) 溝状遺構

3号溝状遺構はクリークで、現行の国道209号沿いのクリークが護岸改修される前の北壁が出ている。11・14・18号溝状遺構は埋土から近世以降の溝の可能性が高いので、報告しないものとする。

1号溝状遺構（図版8、付図1）

調査区西端に位置し、N-61° -W方向に走る。幅50cm前後、深さ25cm前後の小さな溝で、規模が4・5・6号溝状遺構に酷似する。途中が攪乱に切られ途切れているが、本来は1つのもので、近世のクリークである2号溝状遺構に向かって下がっており、クリークの浅いところからも検出された。このことはクリーク以前に南北方向の溝があったことを示している。

遺物はないが、黒色土を埋土としているので、明らかに近世のものではない。同一直線状に5号溝状遺構があるものの、間にクリークに切られた溝があったとすれば、同じ溝ではなく、同一直線上に掘られたものとなる。

2号溝状遺構 (図版8、第16図、付図1)

調査区西端に位置し、N-32°-E方向に湾曲して走る。近世のクレークであるが、本来は13・15号溝状遺構と同方向のやや湾曲した溝があったのではなからうか。上面から大正・昭和初期の磁器が出ているので、最終的な埋没はこの時期であろう。

出土遺物 (図版12、第17図)

1は弥生中期前葉の甕の口縁部片で、2は中期後葉の大型甕の胴部片で、断面方形の2条突帯が貼りつけられている。3は須恵器の杯蓋で、内外ヨコナデ。色調は内外明灰色で、胎土精良。TK10併行期。

4は龍泉窯系青磁碗I-5・b類の口縁部片で、灰黄緑色の釉で、胎は灰白色。13世紀後半。5は龍泉窯系青磁碗I-1類で、底部の周囲を打ち欠いて円盤形製品に再利用している。透明感のある暗緑灰色の釉が掛かる。胎は明灰色。6は龍泉窯系青磁小皿で、口唇部を面取りした稜花皿で淡緑灰色の釉がかかる。胎は灰色。15世紀中葉～後半代のもの。7はペコカン徳利で、布袋像が貼りつけられているので「布袋徳利」とも呼ばれる。東峰村小石原中野窯にほぼ同じモチーフのものがあるので、この窯の製品であろう。内外薄い鉄釉掛けで、胎土は硬質で、黒灰色に白色粒子を多く含む。17世紀後半～18世紀前半のもの。8は側面に抉りの入る打製石鐵の完形品でサスカイト製。長さ3.1cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重量1.6gを測る。9は黄白色の頁岩製の砥石で、仕上げ砥。上端に端面が一部残っている。下端の欠損後、欠損面を平坦になるように加工しており、欠損後も使用したことが窺える。使用面は3面で、長さ6.8cm、幅6.1cm、厚さ1.9cm、重量89.6gを測る。

4号溝状遺構 (図版8、付図1)

調査区南西端に位置し、N-53°-W方向に走る。東部で10号土坑、12号溝状遺構と交差している。10号土坑との切り合いは不明だったが、12号溝状遺構には切られていた。13号溝状遺構とは東端で接しており、切り合いが不明瞭で、それ以东には延びていないので、同時併存していたであろう。幅55cm前後、深さ15～20cmと小規模で、1・5・6号溝状遺構に酷似する。出土遺物がないため時期は不明。

5号溝状遺構 (図版8・11、第16図、付図1)

調査区南西部に位置し、N-55°-W方向に走る。幅50～60cm前後、深さ5～30cmと小規模で、1・4・6号溝状遺構に酷似する。同一直線状に1号溝状遺構があるが、クレークである2号溝状遺構に切られた当該時期の溝があったとすれば、同じ溝ではなく、同一直線上に掘られたものとなる。東端は削平されたのではなく途切れていたが、12号溝状遺構と13号溝状遺構の間に同一直線上に走る短い溝があり、これと一連の溝であっただろう。13号溝状遺構との切り合いがわからないが、同時併存の可能性が高い。

6号溝状遺構 (図版8・11、第16図、付図1)

調査区南西端に位置し、N-57°-W方向に走る。4号土坑との切り合いは明らかに切っていた。幅55cm前後、深さ10cm前後と小規模で、1・4・6号溝状遺構に酷似する。西側の2号溝状遺構に向かって下がっており、これに切られている。東端は削平されたのではなく途切れていた。出土遺物がないため時期は不明。

7号溝状遺構 (図版8・12、付図1)

調査区中央北部に位置し、N-41°-W方向に走る。東端が幅広くなっているのは15号土坑上面埋土の広がりのためであろう。13号溝状遺構と交差しているが、切り合い関係は不明で、13号溝状遺構より東に延びないことから共存していた可能性が高い。最大幅85cm前後、最も深い所で15cm前後を測る。19号土坑は明らかに切っていた。8号土坑と交差しているが、切り合い関係は不明である。東に向かって水が流れるようになっている。図化できる出土遺物がなく、時期不明。

8号溝状遺構 (図版8・12、第16図、付図1)

調査区西部に位置し、N-37°-E方向に走る。9号溝状遺構と交差しているが、両者とも浅い遺構である上に、攪乱が激しく切り合いは分からなかった。5号土坑との切り合いは明確でない。最大幅185cm前後、深さ36cmと浅く広くなっており、南端は6号溝状遺構と交差し、それから南は途切れていた。6号溝状遺構の南は水田区画で1段下がっており、この地下げのために削平されたものと思われる。北端は狭くなって途切れており、これも本来の地形が北に向かって高くなっていたものが削られたためである。出土遺物がないため時期は不明。

9号溝状遺構 (図版8、第16図、付図1)

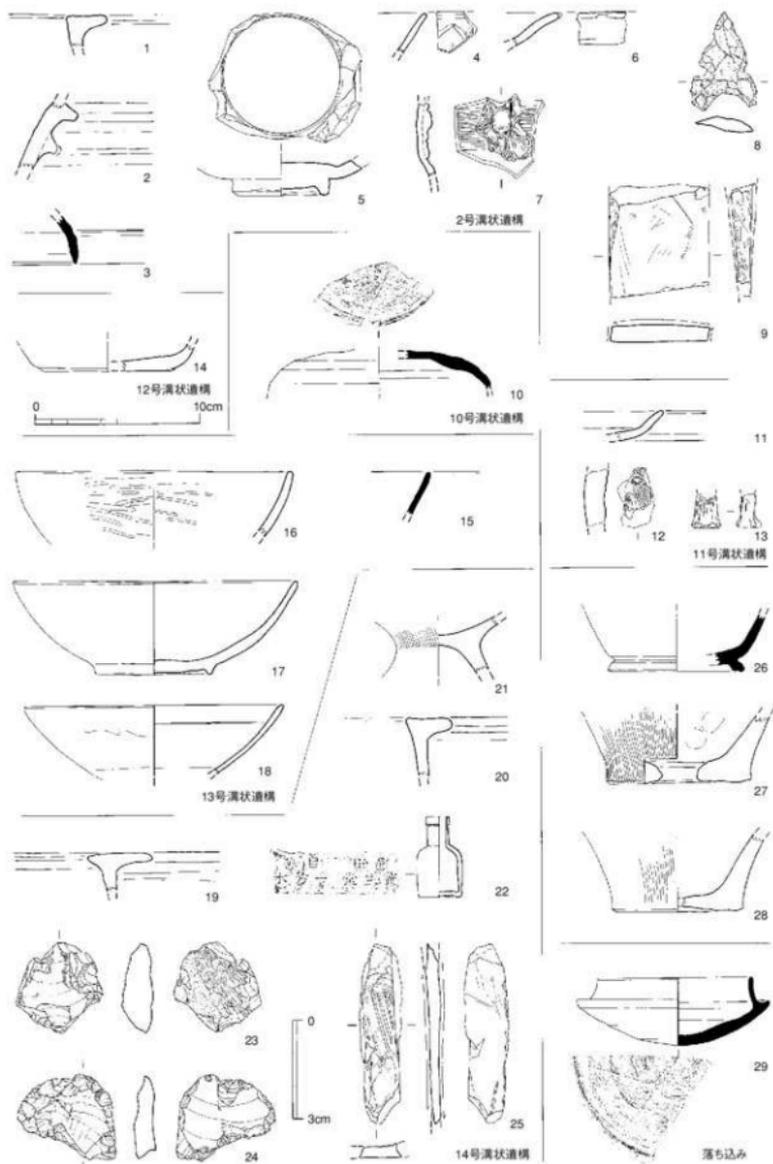
調査区西部に位置し、N-68°-E方向に走る。最大幅140cm前後、最も深い所で40cm前後と、広く浅い溝で、8号溝状遺構と交差し、それから北には検出されなかった。次に浅くなっていたことから、削平されて途切れたものであろう。出土遺物がないため時期は不明。

10号溝状遺構 (図版8、付図1)

調査区南西端に位置し、N-27°-E方向に走る溝で、クリークである2号溝状遺構と、4号溝状遺構と交差している。クリークの浅い部分から検出されたので4号溝状遺構との切り合い関係は分からなかった。最大幅45cm前後、最も深い所で25cm前後を測る。須恵器の破片が出ているが、2号溝状遺構に近接しているので混入したものであろう。

出土遺物 (図版12、第17図10)

須恵器の杯蓋で、内外ヨコナデ。天井部に×字状の痕跡があるが、線刻が浅いのでヘラ切りの際についた工具痕と思われるが、ヘラ記号の可能性もある。色調は内外明灰色で、胎土精良。TK10併行期。



第17図 西蒲池古塚遺跡2次調査出土遺物実測図 (8・23・24は2/3、他は1/3)

12号溝状遺構（図版8、第16図、付図1）

調査区中央部に位置し、N-66°-E方向に走る。最大幅80cm前後、最も深い所で10cm前後で、北に行くほど浅くなり、北端は途切れている。4号溝状遺構を切っており、交差する部分で10号土坑に切られている。5号溝状遺構を延長させて交差する部分が深くなっている。前述の10号土坑のように溝の交差するところに土坑が掘られたのかもしれないが、削平のためかはっきりしない。

出土遺物（第17図14）

土師器皿で底部はヘラ切り。器面は内外摩滅しており、調整は不明。色調は内外灰黄色。胎土は精良で軟質。時期は特定できない。

13号溝状遺構（図版8・12、第16図、付図1）

調査区東部に位置し、N-50°-E方向に走る。最大幅140cm前後、最も深い所で40cm前後と、広く浅い溝で、16号溝状遺構と交差しているが切り合い関係は不明である。16・18号土坑は溝を掘り下げた床面から検出されており、上面での切り合い関係は分からなかった。北側は調査区外に延びており、3次調査区では21号溝状遺構であるが、3次調査区では近世以降の埋土のみが検出されたため、攪乱と判断している。壁の立ち上がりは西側が緩やかで長い。中央部の東壁側に小溝で本遺構とつながるピットがある。須恵器は混入だが、瓦器碗や白磁碗から12世紀代である。

出土遺物（第17図）

15は須恵器の杯身で、内外ヨコナデ。色調は外面青灰色、内面明灰色で、胎土精良。7世紀以降のものだが、時期を特定できない。16・17は瓦器碗で、16は内外横方向のミガキが残っているが、17は器面摩滅のため調整不明。16は口唇部に平坦面を持ち、色調は外面口縁部灰黒色、それ以下と内面は灰青色を呈する。胎土は精良、軟質。17の色調の外面は灰黒色の範囲が偏っており、重ね焼き時に傾いていたことがわかる。それ以外は灰青色だが、見込みのみにぶい暗灰色を呈し、焼成不良である。胎土は精良、軟質。18は白磁碗Ⅱ-3類で、復元口径15.6cm、釉は灰白色で、気泡穴あり。胎は黒色粒子含む灰白色。

15号溝状遺構（図版8、付図1）

調査区東端に位置し、N-54°-E方向に走る。近世のクレークである14号溝状遺構に南端を切られる。近世の掘り直しがあるため、床面には2～3本の溝が入っており、南端部は幅が広がっている。クレークにつながる溝であったものだろう。13号土坑との切り合いは明瞭で、切られていた。北端は調査区外に延び、3次調査の21号溝状遺構となる。3次調査では近世遺構の掘り直しのみと判断され、同一遺構ではあるが、攪乱としている。

出土遺物（図版12、第17図）

26は須恵器の壺の底部で、復元高台径8.2cm。外面暗青灰色、内面明白灰色を呈する。胎土は精良。27・28は弥生中期中葉～後葉の甕底部片で、外面はタテハケが底部まで達する。27はタテ方向のナデが入り、焼成後穿孔と思われる欠損がある。胎土は白色粒子と金雲母を多く含む。色

調は内外淡黄橙色で、底部の外面に黒斑があるので、正置して焼成したものだろう。28は器面が摩滅している。色調はにぶい黄橙褐色で、埋土の影響を受けて変色している可能性あり。混入物は少ない。

16号溝状遺構（図版8、付図1）

調査区中央北部に位置し、N-55°-W方向に16号溝状遺構と併走している。近世の21・22号土坑と19号土坑に切られている。東端が幅広くになっているのは近世の15号土坑上面の埋土が広がるためであろう。最大幅68cm前後、最も深い所で15cm前後を測る。東に向かって水が流れるようになっている。出土遺物がなく、時期不明。

17号溝状遺構（図版8、付図1）

調査区中央北部に位置し、N-59°-E方向に走る。南北端が途切れていること、13号溝状遺構の方向に近く、深さが7cm前後ほどしかないことから、13号溝状遺構の一部で削平を免れた部分の可能性もある。最大幅55cm前後を測る。図化できる出土遺物がなく時期不明。

19号溝状遺構（図版8、付図1）

調査段階では、小溝としていたが、4～6号溝状遺構に近い溝が削平された可能性が高い。湾曲しながらN-60°-E方向に走り。最大幅18cm前後、深さは1cm前後で、両端部は失われている。ほとんど勾配が変わらないが、西に向かって水が流れるようになっている。図化できる出土遺物がなく、時期不明。

3) その他の出土遺物

その他の出土遺物（図版12、第17図）

11～13は11号溝状遺構から出土したもので、11は小片なので器種の特定が難しいが、土師器の皿だろう。内外器面摩滅のため、調整方法が分からない。色調は内外橙灰色で、胎土精良。時期は特定できない。12は器種不明の土製品。土師質で、器壁が厚いことから、火鉢の外面のスタンブ文様と想定したが、類例が無いため、特定できない。13は土人形の下半身で、立像で袴が表現されている。軟質の施釉陶器で、緑色の灰釉がかかる。胎は黄灰白色で、精良。

19～25は14号溝状遺構出土である。19・20は弥生中期中葉の甕口縁部片で、19は正確に復元できないが、口径30cm前後である。器面は摩滅しており、調整不明。外面は灰橙茶色、内面はにぶい灰黄色を呈する。20は器面が摩滅しているが、内外ナデ。21は弥生時代の台か脚付き器種だが、特定できない。外面はくびれ部からハケメが入る。内面・高台内はナデ。22は目薬瓶で、横断面は正円形で、一面に製造元である「邑田 資生堂」、裏面に「目薬 一方木」と右から左の読み順で横書きで陽刻されている。紺色のガラス製で、気泡がなく、型合わせの接合部が見えな

いほど丁寧な仕上がりなので、戦前でも新しい時期のものだろう。23・24は不純物の入らない伊万里産黒曜石製である。23は使用の痕跡のない剥片で、裏面に自然面を残しており、周囲を粗く落として成形しかけている。打製石鎌を作ろうとしていたものか。重量は6.9g。主要薄利面は風化が進んでいる。24は右側縁を刃部とするスクレイパーで、下部は粗く、左側縁は丁寧な調整剥離で刃潰している。刃部は丁寧に作られておらず、裏面側にやや湾曲している。表面側の刃縁に刃こぼれが見られる。重量は4.2gを測る。25は灰色の頁岩製砥石で、側面はすべて欠損している。仕上げ砥で、表裏2面使用しており、表面側がよく使用されており、線状の使用痕が4本ある。重量は32.7gを測る。

29は黄青灰色の埋土をもつ落ち込み内から出土した。須恵器杯身で、底面にヘラ記号を持つ。復元口径9.3cm、器高4.1cm。胎土は精良で、内外明灰色。TK10併行期。

3 小結

本調査区からは中世以前のものと思われる土坑が17基、溝状遺構が10条検出された。1・16・19号溝状遺構は東方向、4・5・6号溝状遺構は西方向に向かって水を流すようになっている。つまり、地形に沿って位置方向に流したのではなく、大きな溝に近いほうに排水していたということになる。これに対してほぼ垂直に湾曲しながら南北に走るのが8・10・13・15号溝状遺構で、南に向かって水を流している。

4・5・6号溝状遺構については10m前後の間隔があるが、ほぼ併走している。一方、9号溝状遺構は12号溝状遺構と同様に湾曲しており、8号溝状遺構は13号溝状遺構に併走している。つまり、それぞれ掘り直された溝であろう。これらは間隔や方向が不均一であるが、長方形区画を形成しており、短冊形条里区画といえる。

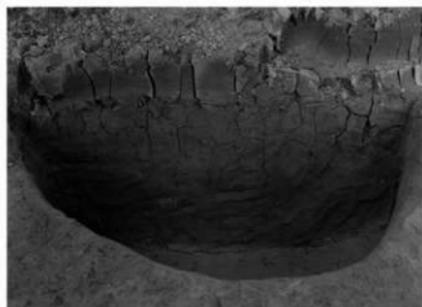
土坑については、まとめて詳述する。



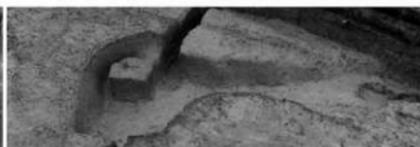
1. 西蒲池古塚遺跡 2次調査遠景 (北東上空から)



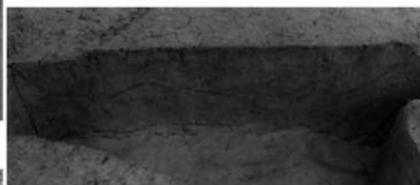
2. 同上全景 (上空から)



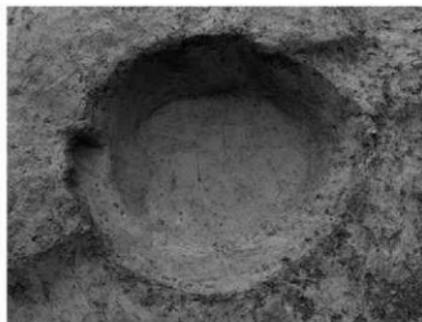
1. 1号土坑 (南から)



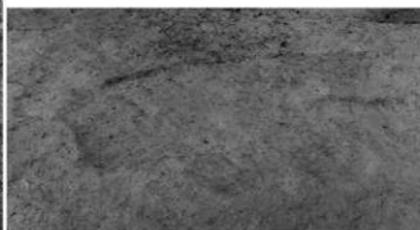
2. 2号土坑 (北東から)



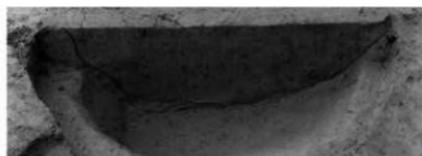
3. 2号土坑土層断面 (北西から)



4. 3号土坑 (北から)



6. 5号土坑 (南東から)



5. 3号土坑土層断面 (北から)



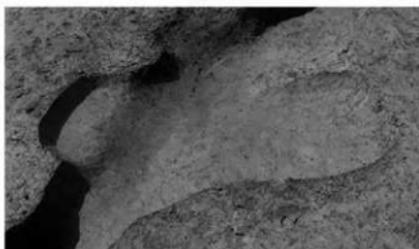
8. 7号土坑 (北西から)



7. 6号土坑 (北西から)



9. 7号土坑土層断面 (北東から)



1. 8号土坑（南西から）



2. 9号土坑（南西から）



3. 10号土坑（北東から）



4. 12号土坑（南東から）



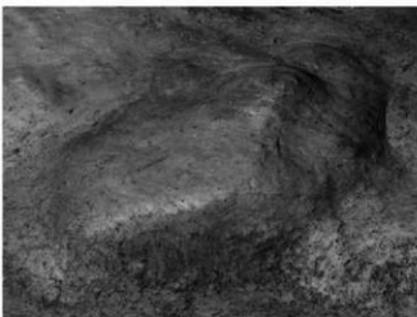
6. 13号土坑（南東から）



5. 12号土坑土層断面（南東から）



7. 13号土坑土層断面（南東から）



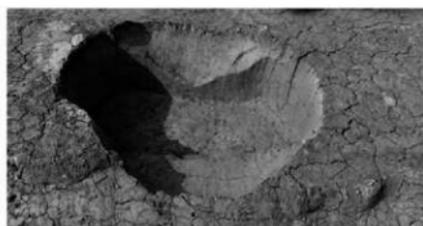
8. 16号土坑（南東から）



1. 17号土坑 (南東から)



2. 18号土坑 (南東から)



3. 19号土坑 (北東から)



4. 19号土坑土層断面 (北東から)



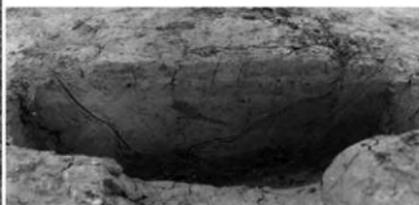
5. 5号溝状遺構 (北西から)



7. 6号溝状遺構 (北西から)



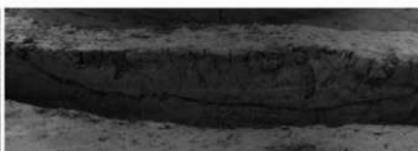
6. 5号溝状遺構土層断面 (北西から)



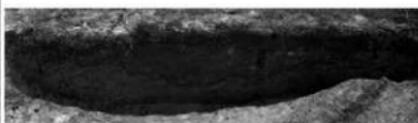
8. 6号溝状遺構土層断面 (北西から)



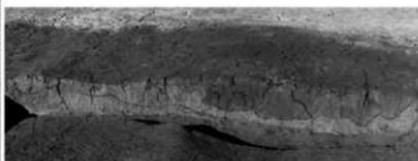
1. 7号溝状遺構（北西から）



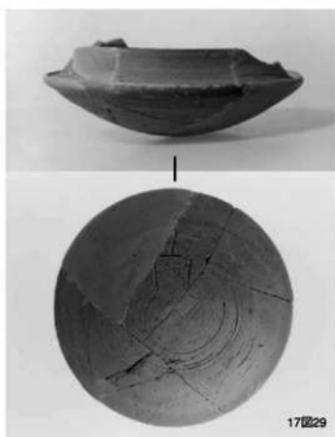
2. 8号溝状遺構土層断面（北東から）



3. 13号溝状遺構土層断面（北西から）



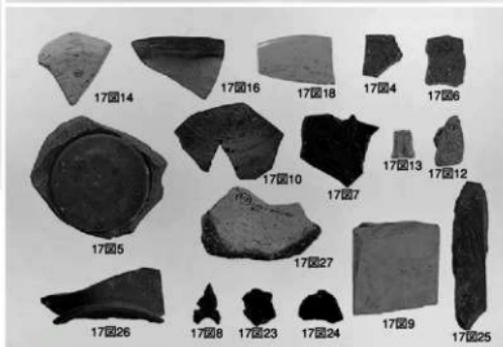
4. 13号溝状遺構土層断面（南西から）



5. 西蒲池古塚遺跡2次調査出土遺物



17図22



西蒲池古塚遺跡 3 次調査

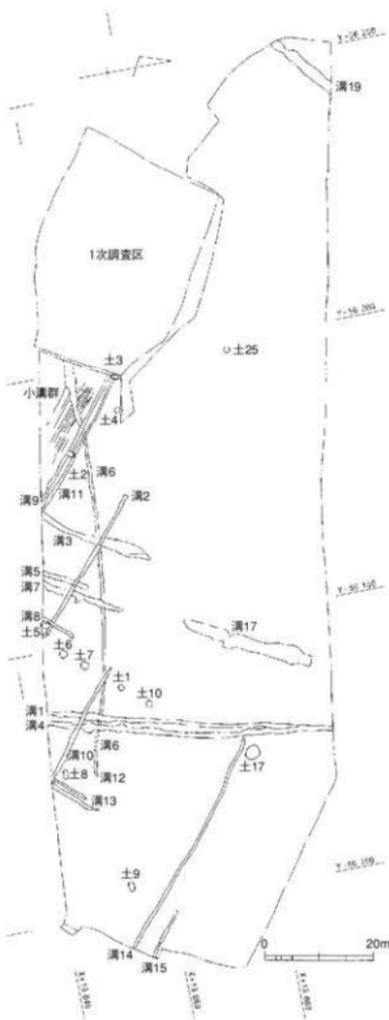
第7章 西蒲池古塚遺跡3次調査

遺跡の所在する柳川市西蒲池地区は、大川市との市境に位置する低平で広大な水田地帯である。集落域は北東部にあり、水田地帯と明確に分かれている。東側は1・2次調査区、北東側は4次調査区と接する。調査地点は大字西蒲池242番地、236・251-1・251-2・281-4・282-1・283-1・283-6・288-1・287-1・286-1・285-1・284-1番地の一部で、調査面積は9,460㎡である。

1 調査の経過

西蒲池古塚遺跡は試掘調査の結果、国道209号に沿うクレークから北東の路線内全面に渡って遺構が存在することが判明し、用地が取得できた範囲から調査することになった。3次調査の対象範囲のうち、工場敷地の北半部はコンクリート基礎の撤去終了後に着手することになり、工事の工程上、南側に工事用道路を敷設したい意向があったことから、南半を先行して調査することになった。北半・南半で同じ遺構が検出されることが予測されたので、遺構番号は連続して付けた。

平成17(2005)年9月13日に南半にバックホーを入れて表土剥ぎを開始した。9月20日、作業員を投入、遺構検出を開始し、10月31日に空中写真を撮影し、11月8日に埋め戻しを完了して、11月18日に機材を撤収した。北半に着手したのは12月8日になってからで、バックホー及び発掘作業員を入れて発掘調査を再開した。排土処理の関



第18図 西蒲池古塚遺跡3次調査遺構略配置図 (1/900)

係からまず東側2/3を調査した。調査区東側では、建物の基礎が多く残存していたが土坑・溝・柱穴を検出した。東側の調査終了後、残り西側1/3の調査は平成18（2006）年2月28日から開始し、ここでも土坑・溝を検出した。3月30日に埋め戻して調査を終了した。

2 遺構と遺物

遺跡では標高2.9m前後の黄灰色粘質土層の上面から遺構を検出した。土坑25基、溝21条、少数のビットを確認し、このうち11～24号土坑、10・14～16・18・20・21号溝は埋土と出土したローリングを受けた土器・陶磁器の小片から近世以降の溝と判断し、ここでは報告しないが、出土遺物は攪乱出土として報告する。

1) 土坑

1号土坑（図版14、第19図）

調査区西端に位置する。略方形を呈し、北東部に突出部があるが他の土坑に見られる張り出し部とは異なる。長軸117cm、短軸111cm、深さ35cmを測る。N-77° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

2号土坑（図版14、第19図）

調査区西部に位置し、9・11号溝状遺構を切っている。略方形を呈し、北辺の壁の立ち上がりが緩やか。長軸142cm、短軸44cm、深さ54cmを測る。N-50° -Eを主軸方向とする。土層は柱穴のように見える。出土遺物がないため時期は不明。

3号土坑（図版14、第19図）

調査区西部に位置する。略方形を呈し、長軸129cm、短軸71cm、深さ56cmを測る。N-8° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

4号土坑（図版14、第19図）

調査区西部に位置する。略方形を呈し、南西部にテラスがあり、張り出しが付く可能性がある。長軸105cm、短軸95cm、深さ36cmを測る。N-52° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

5号土坑（図版14、第19図）

調査区中央部南端に位置する。2・8号溝状遺構を切っている。平面不整形で、長軸150cm、短軸107cm、深さ36cmを測る。N-18° -Eを主軸方向とする。

出土遺物 (図版14、第21図)

1は陶器の壺で、11世紀後半～12世紀前半の白磁四耳壺模倣の国産陶器で、産地は不明。復元口径12.6cm。器面は内外赤褐色で内外に自然釉がかかる。胎土は灰色で硬質。

6号土坑 (図版14、第19図)

調査区南中央部に位置する。略方形を呈し、南東部に張り出しが付く。長軸139cm、短軸128cm、深さ44cmを測る。N-31°-Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

7号土坑 (図版15、第19図)

調査区南中央部に位置する。略方形を呈し、南東部に張り出しが付く。長軸149cm、短軸130cm、深さ47cmを測る。N-38°-Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

8号土坑 (図版15、第19図)

調査区南東部に位置する。長方形を呈し、長軸171cm、短軸72cm、深さ21cmを測る。N-83°-Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

9号土坑 (図版15、第19図)

調査区南東部に位置する。平面不整形で、東西辺にテラスがある。長軸175cm、短軸107cm、深さ27cmを測る。N-87°-Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

10号土坑 (図版15、第19図)

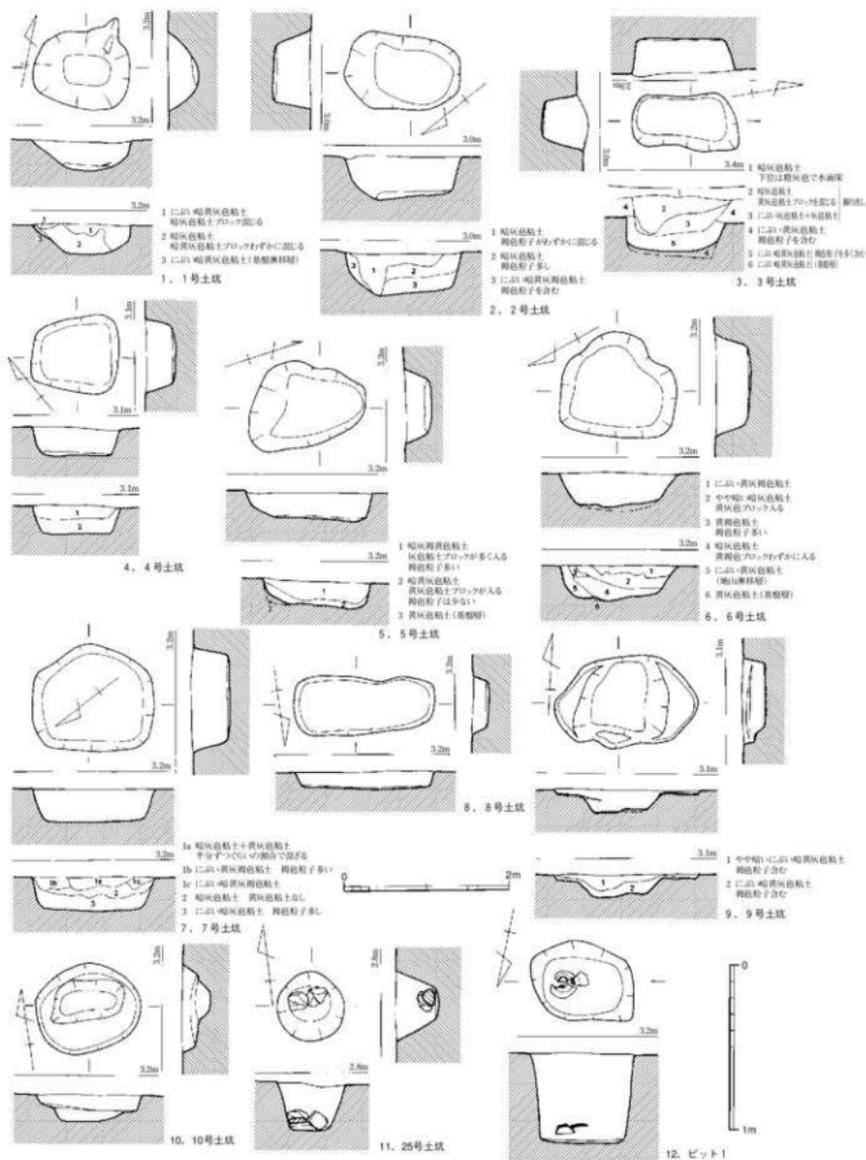
調査区北側中央の1号溝西側に位置し、長軸130cm、短軸110cm、深さ35cmを測る。埋土は暗灰色粘質土ブロックと黄灰色粘質土が混ざり、出土遺物はなかった。南側からほぼ等間隔で検出される一連の土坑群と考えられ、同時期の遺構ではないかと思われる。

25号土坑 (図版15、第19図)

調査区西側に位置し、径約80cmを測る円形の土坑である。埋土は暗灰色粘質土と黄灰色粘質土が混ざり、深さ60cmを測る。他の土坑では検出しなかったが、底面から約20cmの礫石が2つ検出した。また、土坑内からは須恵器片が1点出土した。

出土土器 (図版18、第21図)

2は須恵器甕の肩部片である。外面には縦方向の叩き、内面には同心円の叩き当て具痕を施す。



第19図 西蒲池古塚遺跡3次調査土坑・ビット実測図 (12は1/30、他は1/60)

2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、N-16° -E方向に走る。北半部の調査で4号溝状遺構に切られることがわかった。また、6号溝状遺構を切り、10号溝状遺構にも切られている。最大幅133cm前後、最も深い所で25cmほどあり、床面の勾配は南に水が流れるようになっている。

南側では4号溝状遺構と併走しているが、上面が掘り直されているため検出面では1つの遺構に見えた。北側では溝の幅は狭まっていき、途中4号溝と合流して一つの溝になっている。1号及び4号溝の前後関係は不明だが、埋土は暗灰褐色粘質土と黄灰色粘質土ブロックが混ざるなど同じであり、土層からほぼ同時期頃には埋没している。遺構の時期は、出土した瓦器や小皿から13世紀前半か。

出土遺物 (図版18、第21図)

3は土師器小皿片で復元口径8.4cm、器高1.1cm、復元底径6.8cmを測る。外面底部は糸切りである。4・5は瓦器碗で、4は胴部片で、下位は器壁が薄くなっているのはオサエのためである。上位は灰黒色、下位は灰色。胴部片のため時期は不明。5は高台復元径7.0cm、内外器面摩滅で調整不明。内外暗灰色。時期は13世紀前半か。

2号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区南東部に位置し、N-47° -W方向に走る。3・5・7号溝状遺構を切り、5号土坑・8号溝状遺構に切られている。最大幅70cm前後、最も深い所で6cm前後ほどしかない。埋土は他の溝状遺構と異なり、鉄分を多く含んでいた。床面の勾配は西に水が流れるようになっており、東端は削平のため途切れていた。

同一直線上の北西側に位置する18号溝状遺構との間には空間があり、連続していない以上、用水目であれば同じ溝とはいえない。また、切り合い関係上、近世以降のものといえないので、18号溝状遺構とは別の遺構として掲載した。出土遺物がないため時期は不明。

3号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、N-44° -E方向に走る。北半部では深い部分しか検出されず、北端も途切れている。2・6・11号溝状遺構に切られている。最大幅212cm前後、最も深い所で18cm前後ほどしかない。床面の勾配は南に水が流れるようになっている。南側は幅が狭く浅くなっていることから削平されたものと思われる。北半部では遺構検出時に遺構面を下げすぎたため検出されなかった。東側の立ち上がりが急で、西側は非常に緩やかである。出土遺物がないため時期は不明。

4号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、やや湾曲しながらN-16°-E方向に走る。北半部の調査で1号溝状遺構を切ることが分かった。また、6号溝状遺構を切り、10号溝状遺構にも切られている。最大幅175cm前後、最も深い所で33cmほどあり、床面の勾配は南に水が流れるようになっている。1号溝状遺構と併走しているが、上面が掘り直されているため南側の検出面では1つの遺構に見えた。北側では1号溝と合流している。埋土は1号溝と同じで暗灰褐色粘質土と黄灰色粘質土ブロックが混ざり、土師器片が出土した。

出土遺物 (図版18、第21図)

6は土師器小皿で、復元口径10.3cm、器高1.4cm、底径6.4cm。器面摩滅のため調整不明、底部はヘラ切り。内外橙色で、胎土は軟質精良で褐色粒子を含む。10世紀後葉。7は土師器の高台付きの器種だが、具体的には特定できない。摩滅が激しく、器面調整不明。胎土は軟質、精良。内外灰黄色を呈する。

5号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、7号溝状遺構に併走してN-29°-Eに走る。2号溝状遺構に切られている。最大幅80cm前後、最も深い所で32cmあり、床面の勾配はわずかだが南に水が流れるようになっている。北端はビットとの切り合いではなく、ビット状に深くなっており、本遺構はそれ以北には延びない。出土遺物がないため時期は不明。

6号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区南東部に位置し、やや湾曲してN-87°-W方向に走る。1・3・4・7・10・11号溝状遺構に切れ、3号溝状遺構を切っている。西端は9号溝状遺構との交差地点以西が検出されていないが、削平されたのではなく、途切れていた。埋土は他の溝状遺構のものとは異なり、方向も一致するものがないので、時期が異なる可能性がある。最大幅70cm前後、最も深い所で6cm前後ほどしかない。床面の勾配は東に水が流れるようになっている。11号溝状遺構から西には延びていないが、削平されたわけではないようだ。出土遺物がないため時期は不明。

7号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、5号溝状遺構に併走してN-29°-E方向に走る。2号溝状遺構に切れ、6号溝状遺構を切っている。最大幅110cm前後、最も深い所で15cmあり、床面の勾配は南に水が流れるようになっている。北端は細く浅くなっており、削平されたものと思われる。断面皿状で緩やかな立ち上がりの浅い溝状遺構。

出土遺物 (図版18、第21図)

8は須恵器の杯蓋で、復元口径12.8cm。口径部の外端面を面取りしている。径に対して器高が高いので、壺の蓋の可能性が高い。時期はTK10併行期か。

8号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区中央南部に位置し、5・7号溝状遺構に併走してN-44°-E方向に走る。5号土坑に切られ、2号溝状遺構を切る。最大幅53cm前後、最も深い所で13cm前後ほどしかない。北端部はピット状に深くなって途切れており、この状況は5号溝状遺構に類似する。床面の勾配は南に水が流れるようになっている。出土遺物がないため時期は不明。

9号溝状遺構 (図版13・16、第20図、付図2)

調査区西部に位置し、11号溝状遺構と併走してN-48°-W方向に走る。2号土坑に切られ、6号溝状遺構を切っている。最大幅72cm前後、最も深い所で35cm前後あり、床面の勾配から西に水が流れるようになっている。1次調査の1号溝状遺構と同一直線上にあり、同一遺構と考えられるが、1号溝状遺構では9・11号溝状遺構が1つになっており、切り合いが分からなかった。出土遺物がないため時期は不明。

11号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区西部に位置し、9号溝状遺構と併走してN-48°-W方向に走る。2号土坑に切られ、3・6号溝状遺構を切っている。最大幅85cm前後、最も深い所で40cm前後あり、西に水が流れるようになっている。1次調査の1号溝状遺構と同一直線上にあり、同一遺構と考えられるが、1号溝状遺構では9・11号溝状遺構が1つになっており、切り合いが分からなかった。出土遺物がないため時期は不明。

12号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区南東部に位置し、N-51°-E方向に走る。最大幅57cm前後、最も深い所で13cm前後あり、南に水が流れるようになっている。13号溝状遺構と併走しており、10号溝状遺構に切られている。北端は次第に細く狭くなるので、削平された可能性が高い。出土遺物がないため時期は不明。

13号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区南東部に位置し、N-51°-E方向に走る。最大幅86cm前後、最も深い所で26cm前後あり、南に水が流れるようになっている。12号溝状遺構と併走しており、10号溝状遺構に切られている。北端は次第に細く狭くなるので、削平された可能性が高い。出土遺物がないため時期は不明。

14号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区東端でN-49°-W方向に走る溝で、15号溝状遺構と併走している。北半部の同一直線上に攪乱溝があるが、これは埋土から近世以降のものであるとわかる。土層断面の1・2層の掘り直しが近世の溝に当たり、3層は15号溝状遺構の埋土と同じであったので、中世以前のものとした。最大幅63cm、最深部で15cmほどを測り、東に水が流れるようになっている。出土遺物がないため時期は不明。

15号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区東端でN-49°-W方向に走る溝で、14号溝状遺構と併走している。北半部の同一直線上に攪乱溝があるが、これは埋土から近世以降のものとなる。土層断面の3層の掘り直しがこの近世の溝に当たり、4層は14号溝状遺構の埋土と同じであったので、当該期の遺構と判断した。最大幅68cm、最深部で7cmほどを測り、東に水が流れるようになっている。

出土遺物 (図版18、第21図)

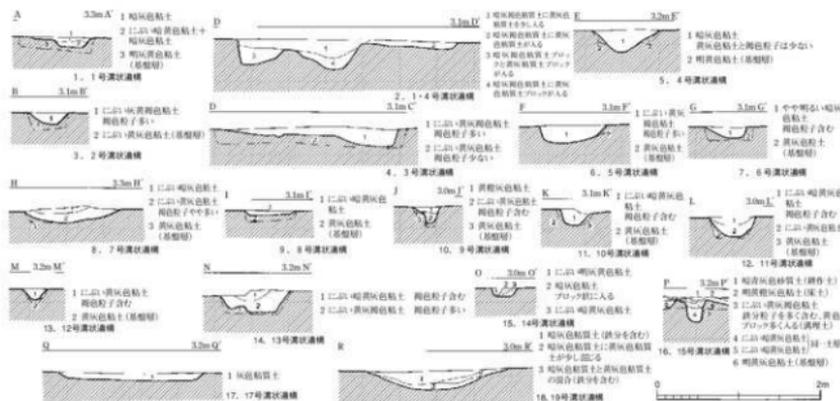
9は瓦器碗で、高台復元径7.4cm。外面は摩滅しているが、内面にはミガキが残っている。外面は青灰色、内面は灰白色。時期は13世紀前半か。

17号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

1号溝から少し離れた西側に位置し、北東方向へ延びる溝である。灰色粘質土が薄く堆積していた部分を掘り下げ、溝とした。長さ約25m、幅2~3m、深さ約10cmを測り、断面は台形状を呈する。

19号溝状遺構 (図版13・17、第20図、付図2)

調査区北西側隅に位置し、北東方向へ延びる溝で、長さ10.7m、幅1.8~2m、深さ30cmを測る。断面はレンズ状を呈し、埋土は鉄分を含む暗灰色粘質土と黄灰色粘質土が混じる。出土遺物はなし。時期は不明だが、近世以降の20号溝状遺構に切られており、それ以前の溝と考えられる。



第20図 西蒲池古塚遺跡3次調査溝状遺構土層断面実測図 (1/60)

3) その他の遺構

小溝群 (図版13・17、付図2)

調査区西南部に位置し、主に9・11号溝状遺構の南側に併走しているため、これらと同時期のものと思われる。小溝は幅2～3cm、深さ3～4cmと非常に小さいもので、間隔は全体的には不均一ながら50～70cm間隔が多く見られる。

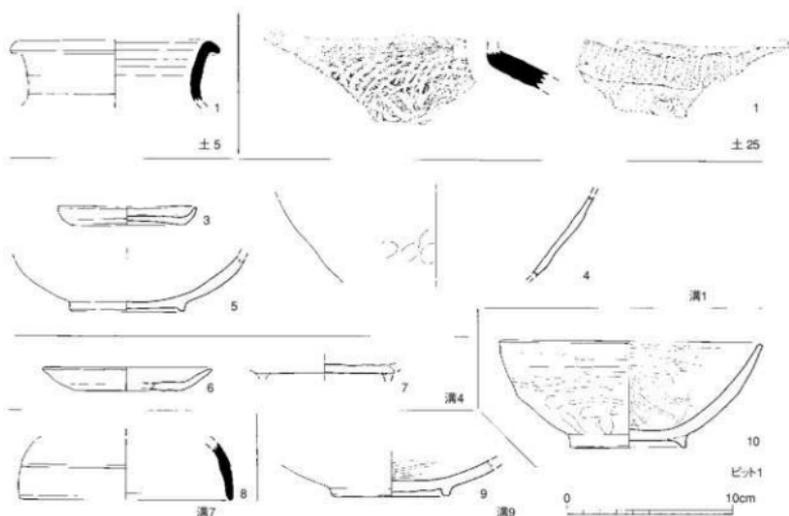
出土遺物はないが、埋土から近世以降でないことはまちがいない。

ピット1 (図版15、第19図)

調査区中央部に位置する。略方形を呈し、長軸62cm、短軸50cm、深さ56cmを測る。底面からやや浮いた状態で瓦器碗が出土している。本来完形であったものが、土圧で二つに割れたように見える。

出土遺物 (第21図)

10はほぼ完全の瓦器碗で、器面がよく残っており、口縁部は内外ヨコミガキ、内面は縦方向のミガキ。時期は12世紀後半～13世紀前半か。



第21図 西蒲池古塚遺跡3次調査出土遺物実測図1 (1/3)

4) その他の出土遺物

遺構検出面出土遺物 (図版18、第22図)

1～5は須恵器である。1～3は杯で、内外面ともナデ調整で、外面底部はヘラ切りである。1は復元口径13.2cm、器高4.1cm、復元高台径10.0cmを測り、口縁に向かって外側に開く、また高台は台形状を呈す。2も高台が外側に開く形状になる。3のみ高台の端部が突き出る形状になる。4は甕又は壺などの口縁部か。復元口径18.2cmを測り、口縁付近で外側に大きく開く。5は甕の体部片か。破片なので傾きは不明であるが、外面には平行タタキ、内面に同心円のタタキ当て具痕を残す。6は東播系の須恵器鉢片で、外面口縁付近に自然軸を付着する。

7～11は土師器である。7と8は杯片である。7は復元口径10.2cmを測り、内外面ともナデ調整か。9は杯片で復元口径13.6cm、器高2.7cm、復元底径10.2cmを測る。10は小皿片で復元口径8.4cm、器高1.3cm、復元底径6.6cmを測る。11も小皿片で、復元口径8.8cm、器高1.5cm、復元底径6.0cmを測る。ナデの痕跡が明瞭に残る。12は黑色土器の碗片で、内面は黑色を呈する。

13は能泉窯系青磁碗片で外面には蓮弁が付く。14は砥石片で、穿孔を1箇所施している。表面は剥落していたが、側面は綺麗に面取りされている。石材は片岩か。

攪乱出土遺物 (図版18、第22図)

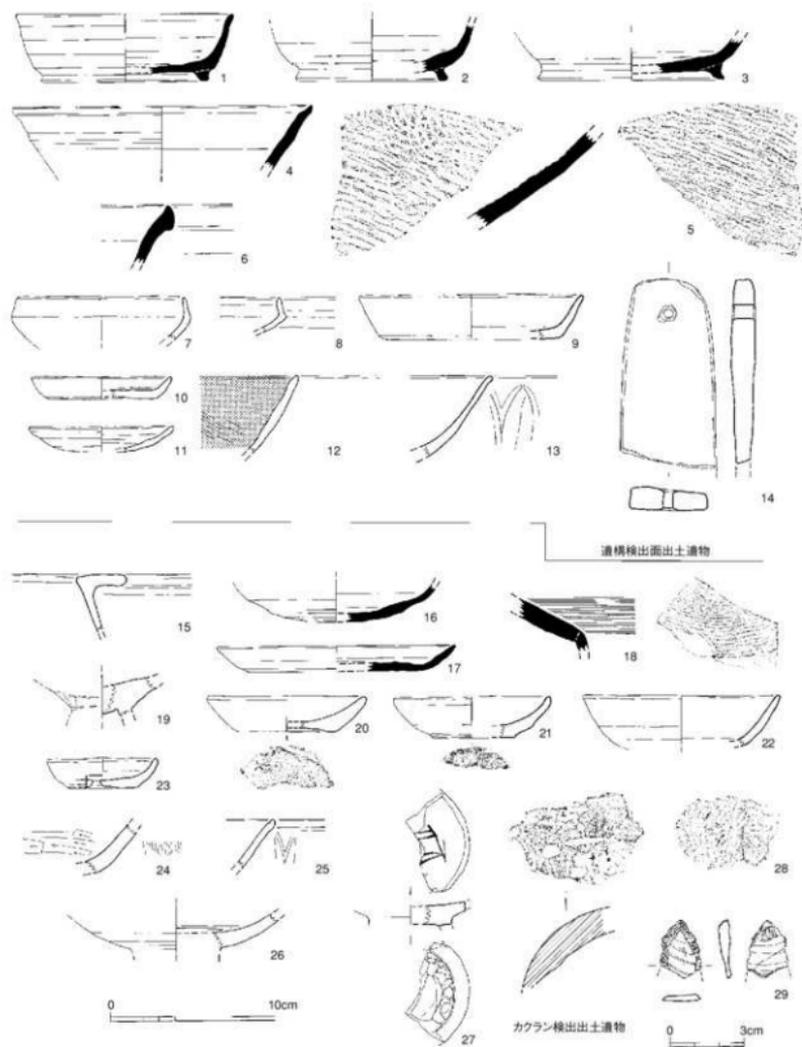
15は弥生土器甕の口縁部片で、10号(旧16号)溝状遺構出土である。

16～18は須恵器片である。16は杯の底部片で内面はナデ、外面はヘラケズリ調整を施す。10号(旧16号)溝状遺構出土。17は皿片で、復元口径14.5cm、器高1.6cm、復元底径10.0cmを測る。内外面はナデで、外面底部はヘラケズリを施す。2号(旧18号)溝状遺構出土。18は壺の肩部片である。色調は黄橙色であったが、焼成は堅固であったので須恵器とした。外面にはカキ目を施す。

19～23は土師器である。19は高坏片で、13号土坑出土である。20・21は攪乱土坑1から出土した。攪乱土坑1は6号溝状遺構を切る近世の土坑であり、共存する陶磁器はないが、埋土が18世紀代に掘削されたと見られるクリークの埋土と同様の特徴をもっていることや、同じ埋土を持つ攪乱土坑2からは17世紀後半～18世紀代のものと思われる肥前系陶器が出土しているので、これとほぼ同じ時期の所産と考えられる。20・21は近世の土師器皿である。胎土が精良、軟質で、明黄白色であることから、蒲池焼の可能性ある。器高は2.1cmと2.5cmと異なるが、復元口径は9.6cmと一致している。底部糸切り。22は土師器杯で復元口径12.0cmを測り、内外面ともナデ調整である。23は土師器小皿片で、底部には穿孔が1箇所ある。内外面ともナデ調整で、外面底部は糸切りである。胎土・色調から蒲池焼の可能性ある。17号土坑出土である。

24は瓦質土器鉢片か。外面には刷目、内面にはケズリの痕跡が僅かに残る。10号(旧16号)溝状遺構出土である。

25～27は能泉窯系青磁碗片で、25は口縁部片で、外面には僅かに蓮弁らしき痕跡が残る。10号(旧16号)溝状遺構出土である。26は体部片で内面底部付近に沈線が1条走る。13号土坑出土である。27も底部片か。外面は高台部分を打ち欠く、また内面はあまり残りが良くないが何か紋様



第22図 西蒲池古塚遺跡3次調査出土遺物実測図2 (29は1/2、他は1/3)

を描かれている。

28は丸瓦片である。内面に布目を施す。12号土坑出土である。29は黒曜石の石鏃片か。端部は欠損しているが、周縁には微細な剝離が施されている。2号溝状遺構出土である。

3 小結

本調査区では中世以前のもつと見られる土坑11基と溝状遺構16条が検出された。1・2次調査区で見られたように、東西方向に直線的に走る細い溝と、南北方向に湾曲しながら走る浅く広い溝がある。2・9～11・14・15号溝状遺構が前者で、1・3～5・7・8・12・13・16号溝状遺構が後者である。

これらは条里区画に伴う溝と考えられるが、2次調査区同様、東西軸の溝の勾配は2方向あることである。本調査区では東西方向に走る溝のうち、西側にある2・9・11は西に向かって水が流れ、東側にある6・10・14・15は東に向かっている。つまり、地形に沿って位置方向に流したのではなく、大きな溝に近い方に排水していたということになる。したがって条里区画内の水路は、地形の勾配に沿って、距離の近い坪境溝に排水するようにしており、そのために1本の溝でつながっていないのだと言える。

近い位置に併走するように2本の溝が走っているように見えるが、9・11号溝状遺構は1次調査区で合流する掘り直された溝であり、同時併存ではない。1・4号溝状遺構、14・15号溝状遺構では溝間に畦畔の痕跡がなく、畦畔の両側に掘られた溝でもないようだ。つまり、これらは掘り直しの可能性が高い。

土坑群は1・5・6・7号土坑が5・6号溝状遺構と同方向に並んでおり、並びに近い場所にピット1がある。また、溝状遺構の水の流れる方向から見ると、この位置が東西方向の溝の勾配が東西に分かれる分岐点にあたる。土坑の並びについてはまとめて後述するが、ピット1が地鎖めの埋納遺構であったとすると、こうした埋納ピットは畦畔に作られることが多く、ここに畦畔があった可能性がある。この位置に畦畔があるとすれば、西側は西に溝が流れるように、東側は東に水が流れるように設定された水田区画が想定される。

小溝群は西蒲池古塚遺跡・将監坊遺跡でも検出されているので、まとめて詳述したい。

出土物は小片が多く、11世紀～13世紀のもので特に注目されるものはないが、丸瓦片については注意を要する。攪乱出土のため本来どこから持ち込まれたかは分からないが、まだ知られていない布目瓦を葺く寺院等の施設が存在する可能性を示唆している。

1. 西蒲池古塚遺跡3次調査
南半部全景（上空から）



2. 同上北半部東側全景
（上空から）



3. 同上北半部西側全景
（上空から）

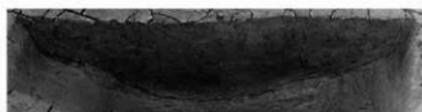




1. 1号土坑 (北から)



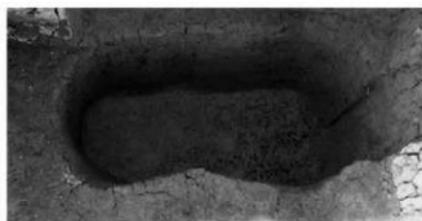
3. 2号土坑 (北西から)



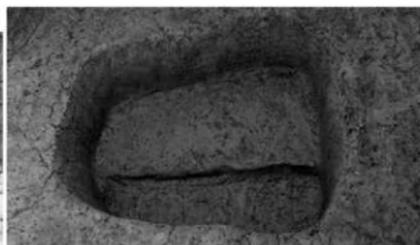
2. 1号土坑土層断面 (南から)



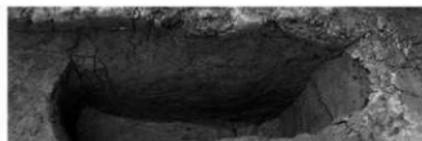
4. 2号土坑土層断面 (北西から)



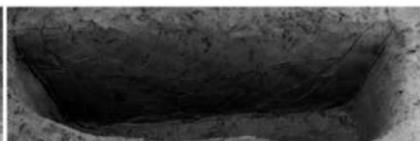
5. 3号土坑 (東から)



7. 4号土坑 (南西から)



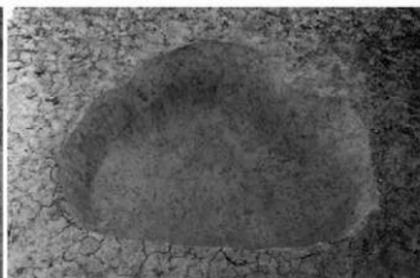
6. 3号土坑土層断面 (東から)



8. 4号土坑土層断面 (南西から)



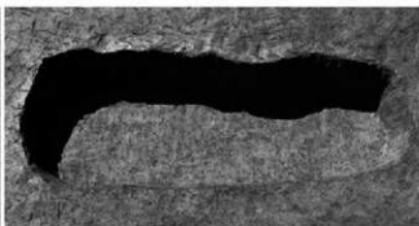
9. 5号土坑 (西から)



10. 6号土坑 (北西から)



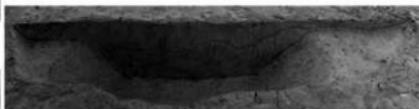
1. 7号土坑（北西から）



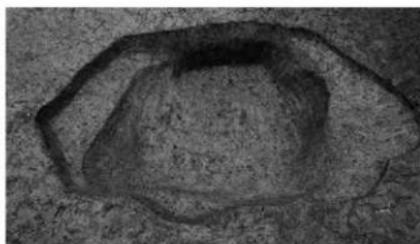
3. 8号土坑（北から）



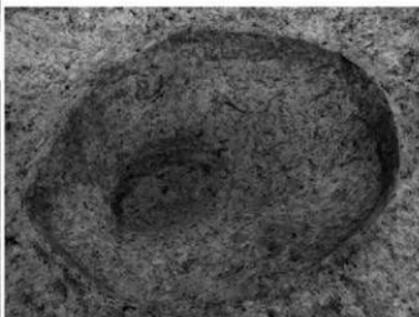
2. 7号土坑土層断面（北西から）



4. 8号土坑土層断面（北から）



5. 9号土坑（南から）



6. 10号土坑（南から）



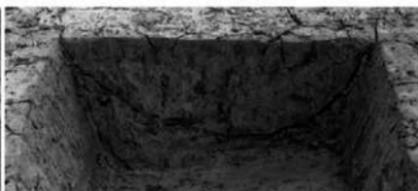
7. 25号土坑（南から）



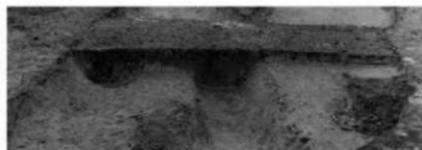
8. ビット1 遺物出土状態



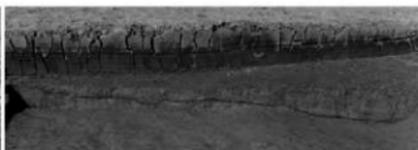
1. 1号溝状遺構土層断面 (北から)



3. 2号溝状遺構土層断面 (北から)



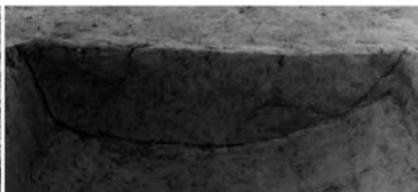
2. 1・4号溝状遺構土層断面 (南から)



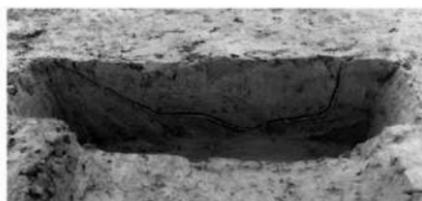
4. 3号溝状遺構土層断面 (南西から)



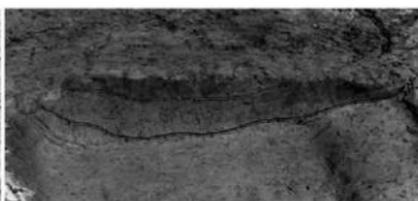
5. 4号溝状遺構土層断面 (北から)



6. 5号溝状遺構土層断面 (南西から)



7. 6号溝状遺構土層断面 (東から)



8. 7号溝状遺構土層断面 (北東から)



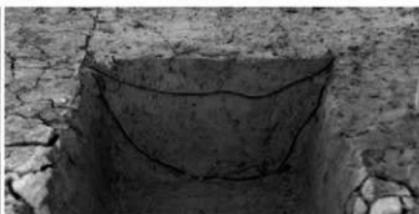
9. 8号溝状遺構土層断面 (北東から)



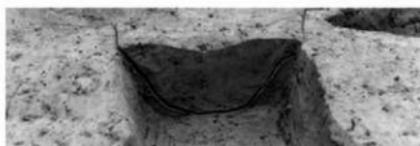
10. 9号溝状遺構土層断面 (北西から)



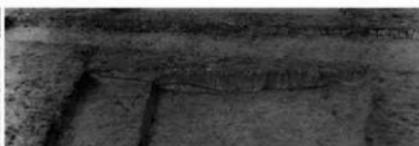
1. 10号溝状遺構土層断面 (北西から)



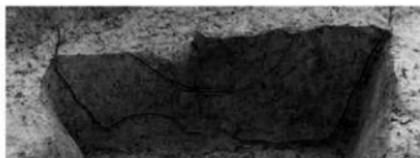
2. 11号溝状遺構土層断面 (北西から)



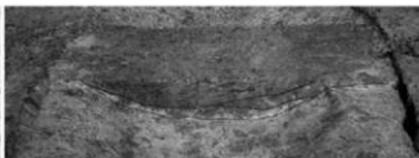
3. 12号溝状遺構土層断面 (北東から)



7. 19号溝状遺構土層断面 (南から)



4. 13号溝状遺構土層断面 (北東から)



8. 19号溝状遺構土層断面 (南西から)



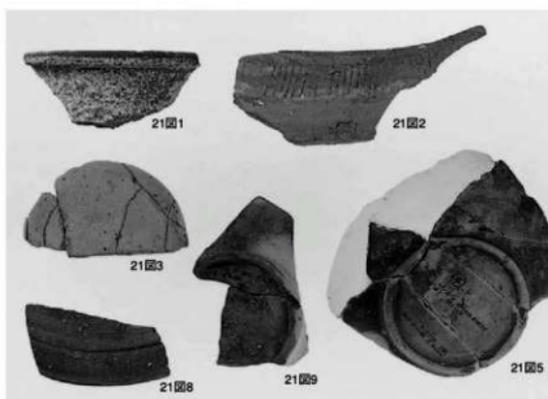
5. 14号溝状遺構土層断面 (北西から)



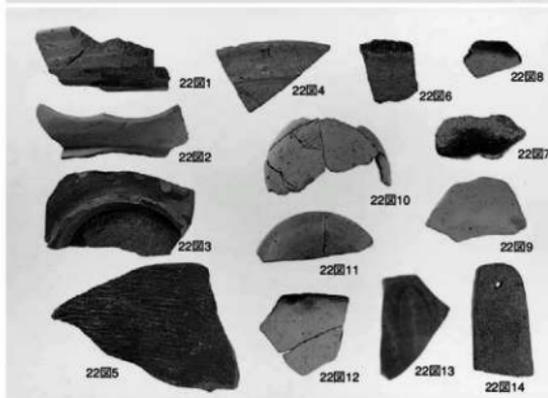
6. 15号溝状遺構土層断面 (北西から)



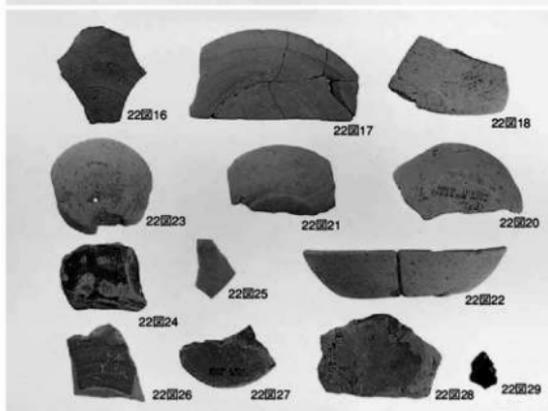
9. 調査区西南部小溝群 (上空から)



1. 土坑出土遺物



2. 溝状遺構出土遺物



3. その他の出土遺物

西蒲池古塚遺跡 4 次調査

第8章 西蒲池古塚遺跡4次調査

西蒲池古塚遺跡4次調査は、3次調査地の北東側820㎡を対象地とする。ここは調査前まで工場用地として利用されており、対象地の南端には浄化槽が地下深くまで設置されていた。そのため調査地は対角線上に東西35m、南北14.5mの平行四辺形のような形となる。また調査地全体に1mほどの盛り土がなされており、盛り土を除去すると暗褐色の旧耕作土、さらにその下に遺構面となる黄灰色粘土が現れた。検出した遺構は土坑2基。いずれも遺物を伴わないが、1～3次調査で検出した遺構と埋土が似ていることから遺構として報告している。なお、整理・報告作業の過程で調査時に付した遺構番号に欠番が生じたが、作業上の混乱を避けるため欠番のままとしている。遺物は摩滅した小片3点が採取できたのみで、図化できなかった。



第23図 西蒲池古塚遺跡4次調査遺構配置図 (1/300)

1 調査の経過

調査の経過は以下のとおりである。

平成18 (2006) 年

- 5月23日 重機による表土剥ぎ開始
- 5月29日 人力による掘削開始
- 6月7日 全体写真撮影
- 6月15日 現場撤収



写真2 重機による表土剥ぎ作業 (東から)



写真3 作業風景（北西から）

2 遺構と遺物

2号土坑（図版19、第24図）

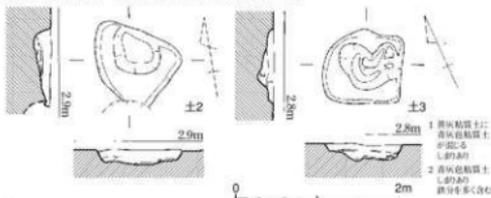
調査区のほぼ中央で検出した。南側の一部が攪乱に切られており、現状で長軸110cm×短軸85cmとなる。平面プランは三角形に近い。床面は北に緩やかに下って浅い段を形成し、最も深いところで深さ20cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

3号土坑（図版19、第24図）

調査区の東隅に位置する。隅丸の方形に近いプランで、長軸は96cm、短軸は93cmを測る。床面は凸凹が激しく、最も深いところは深さ20cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

3 小結

4次調査地では、検出した遺構は土坑2基と密度が低い。また遺物を伴わないため遺構の時期は判断できない。遺物は表土剥ぎ時や遺構検出時に出土した小片3点である。いずれも土師器と思われるが摩滅が激しく器種・部位などは不明である。



第24図 西蒲池古塚遺跡4次調査遺構実測図（1/60）

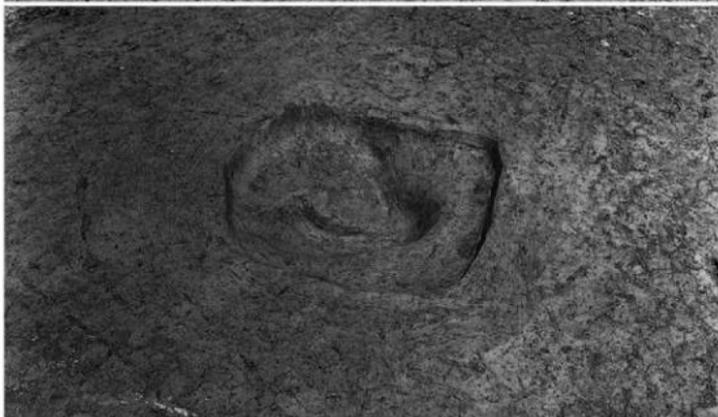
1. 西蒲池古塚遺跡
4次調査地全景
(西から)



2. 2号土坑
(左・西から)



3. 3号土坑
(西から)



西蒲池将監坊遺跡 1 次調査

第9章 西蒲池将監坊遺跡1次調査

遺跡の所在する柳川市西蒲池地区は、大川市との市境に位置する低平で広大な水田地帯である。集落域は北東部で、水田地帯と明確に分かれている。西側は西蒲池古塚遺跡、北側は西蒲池古溝遺跡、東側は西蒲池将監坊遺跡2次調査区と接している。調査地点は大字西蒲池289-1・290-1・291-1番地の一部で、調査面積は1,960㎡である。

1 調査の経過

用地が取得できた本調査区と西蒲池古溝遺跡を先行して調査することになったが、南に隣接する水田の耕作前に進入路を作る必要があったため、西蒲池将監坊遺跡南西部を先に調査し、水田までの進入路部分を埋め戻してから残りを調査した。

平成17(2005)年4月22日にバックホーで表土剥ぎを開始した。4月25日に作業員を入れ、遺構検出を開始した。6月21日にラジコンヘリによる空中写真を撮影して、作業員は隣接して併行して稼動していた西蒲池古溝遺跡に移動させる。6月29日に埋め戻して完了して撤収した。

2 遺構と遺物

土坑は12基、溝状遺構は1条、2方向の小溝群が検出されたが、このうち10～12号土坑は埋土と、ローリングを受けた弥生土器片や近世の陶磁器片が出土したことから、近世以降の擾乱と判断され、報告から外した。

1) 土坑

1号土坑(図版21、第26図)

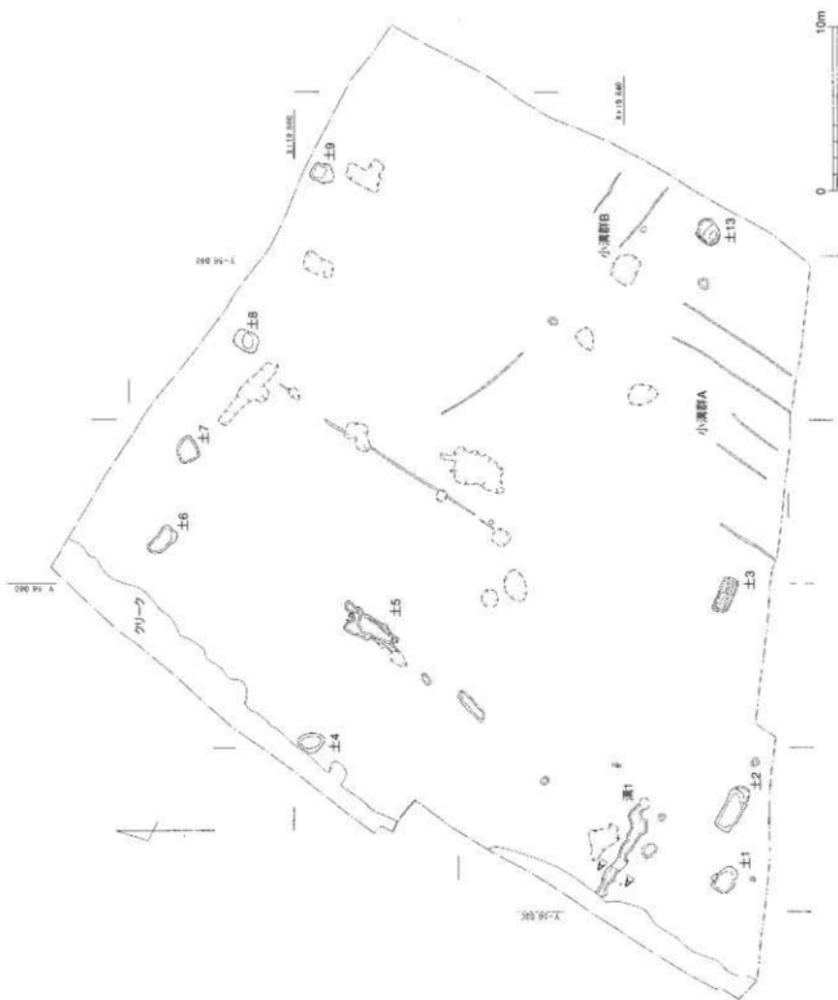
調査区南西端部に位置する。略方形を呈し、張り出しはない。長軸160cm、短軸135cm、深さ32cmを測る。N-45°-Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

2号土坑(図版21、第26図)

調査区南西部に位置する。長方形を呈し、張り出しはないが、西壁の立ち上がりが緩やか。長軸291cm、短軸120cm、深さ47cmを測る。N-60°-Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

3号土坑 (図版21、第26図)

調査区中央南端部に位置する。長方形を呈し、張り出しはなく、床面中央部が窪む。長軸210cm、短軸83cm、深さ33cmを測る。N-66°-Eを主軸方向とする。図化に耐えないが土師器小片が出土した。



第25図 西蒲池埴輪跡1次調査遺構配置図 (1/300)

4号土坑 (図版22、第26図)

調査区西端部に位置する。平面卵形を呈し、張り出しはないが、床面は東側が深い。長軸160cm、短軸117cm、深さ59cmを測る。N-3° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

5号土坑 (図版22、第26図)

調査区中央西部に位置する。平面不整形で、深さ10cmと浅いことから落ち込みとも見られる。方形を呈し、張り出しはない。長軸424cm、短軸150cmを測る。N-41° -Wを主軸方向とする。図化に耐えないが土師器小片が出土した。

6号土坑 (図版22、第26図)

調査区北西部に位置する。略長方形を呈し、張り出しはない。長軸190cm、短軸99cm、深さ21cmを測る。N-49° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明である。

7号土坑 (図版22、第26図)

調査区中央北部に位置する。平面不整形だが、東部に張り出しを持つため、本来は方形である。長軸157cm、短軸129cm、深さ21cmを測る。N-87° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

8号土坑 (図版22、第26図)

調査区中央北部に位置する。方形を呈し、張り出しはない。長軸148cm、短軸110cm、深さ41cmを測る。N-32° -Wを主軸方向とする。図化に耐えないが土師器か弥生土器の小片が出土した。

9号土坑 (図版22、第26図)

調査区北東端部に位置する。平面不整形だが、東部に張り出しを持つため、本来は方形である。長軸143cm、短軸117cm、深さ44cmを測る。N-25° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

13号土坑 (図版22、第26図)

調査区東端部に位置する。略方形を呈し、東側に張り出しを持つ。長軸150cm、短軸126cmを測る。深さは23cmほどしかなく、調査区の東側が本来高かったため削平を強く受けたものと思われる。N-68° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明である。

2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版20・23、第25・26図)

調査区西端部に位置し、N-58°-W方向に走る。クリークに西端を切られており、東端は削平のため失われている。最大幅95cm前後で、最も深い所で9cmほどしかない。床面の勾配は西に水が流れるようになっている。

小溝群A (図版20、第25図)

調査区中央から南部に位置し、N-34°-E方向に走るものが6条ある。幅8cm、深さ3cmほどの小さい溝で、北端は削平のためか失われている。約180cmの規則的な間隔があるように見えるが、間隔の広いところは間的小溝が削平を受けて失われたのかもしれない。

小溝群B (図版20、第25図)

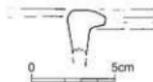
調査区中央東部に位置し、N-51°-W方向に走るものが3条ある。幅10cm、深さ3cmほどの小さい溝で、北西端は削平のためか失われている。約270cmの規則的な間隔があるように見える。

3) その他の遺物

11号土坑から丸瓦片が出ているが摩滅が著しく、軟質で、燻されていない。古塚遺跡3次調査で布目瓦が出ていることから、同様なものかもしれないが、筑後地域では土師質の瓦も存在しており、摩滅が著しいため判断ができなかった、後者とみて掲載していない。

クリーク出土遺物 (第27図)

クリーク内出土の弥生中期初頭の甕口縁部片で、ローリングを受けているため調整不明。内外黄橙白色で、胎土は混入物やや多く雲母片を含む。



第27図 西蒲池将監坊遺跡1次調査出土遺物実測図 (1/3)

3 小結

本調査区では中世以前のものと思われる土坑9基と溝状遺構1条が検出された。小溝群の方位は北に隣接する西蒲池古溝遺跡のそれとは異なっており、一連の遺跡ではない。また、古溝遺跡よりも土坑が多く、配置も異なっている。古溝遺跡の1号溝状遺構が坪境溝と考えられるので、別の区画であったといえる。

小溝群は西蒲池古溝遺跡と将監坊遺跡でも検出されているので、まとめて詳述したい。

本遺跡の所在する「将監坊」という小字は、人名に由来する地名と考えられる。「将監」とは官位であり、「坊」は区画を意味する言葉か僧侶の名であり、僧侶の名前を冠する地名は考えに

くいことから、前者である「将監」の官位をもつ人物に由来する区画ということになる。人物に由来する小字名は大川市田脇地区を例にすると、「喜四郎」「小五郎」「六郎町」「弥次郎町」などがあり、官位がつくことは珍しい。

柳川市域で「将監」を冠する名を持つ人物としては、蒲池左近将監久氏という人物が挙げられる。「蒲池物語」¹⁾によれば久氏は渡辺（松浦）氏系蒲池²⁾6代目当主で具体的な記録が残っていないが、父の蒲池行房は承久の乱（1221年）に参加しており、その子の7代諸久は元寇（1281年）の際に松浦党として出陣したとあるので、13世紀前半の人物とわかる。

蒲池氏はその名のとおり、蒲池地区を拠点とする武士であったことから、西蒲池地区の開墾に関与していたことは十分に考えられる。もともと江戸時代に書かれた史料なので、蒲池氏の系譜やルーツについては不明な点が多く、この人物の存在についても確実とはいえない。ただし、「将監」の官位をもてる人物がほかにいるとしても、有力な武士であることには変わりないだろう。

注

- 1 蒲池氏について書かれた数少ない文献の1つで、江戸時代中期の享保7（1722）年に蒲池豊庵が記したもの。
- 2 蒲池氏は5代目蒲池行房が承久の乱の際に後鳥羽上皇方について敗れたことで、渡辺（松浦）氏から養子をもって家門を再興している。
- 3 蒲池氏の祖である源久直は肥前国神崎郡にいたが、壇ノ浦の戦いで源氏方に与した功績で、鎌倉幕府の鎮西御家人となり、建久元（1190）年に筑後国三浦郡の地頭職に任じられた。久直は蒲池邑の領主だった大宰府府官の筑後橘氏の娘婿となって土着し、蒲池久直と名乗ったという。



1. 西蒲池将監坊遺跡1次調査遠景（東上空から）



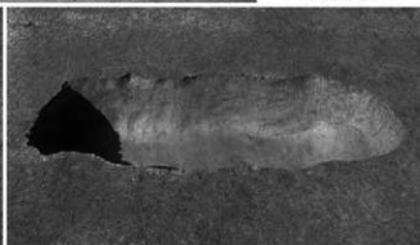
2. 同上北東部全景（上空から）



1. 西蒲池将監坊遺跡
1次調査南西部全景
(東から)



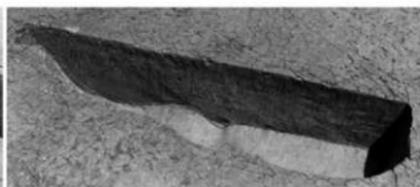
2. 1号土坑 (北東から)



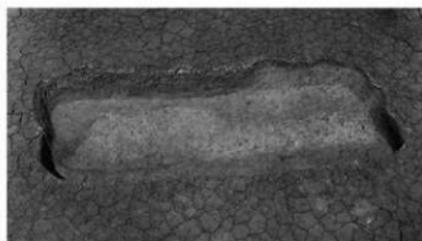
3. 1号土坑土層断面 (北東から)



4. 2号土坑 (南西から)



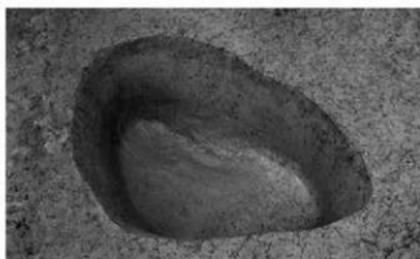
5. 2号土坑土層断面 (南から)



6. 3号土坑 (南から)



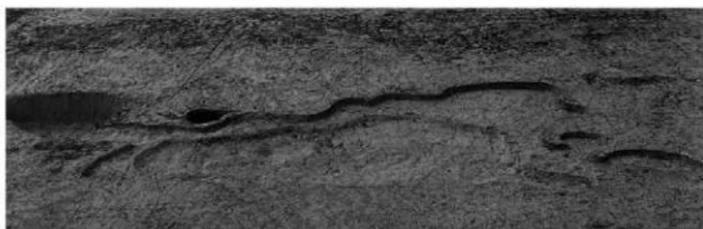
7. 3号土坑土層断面 (南から)



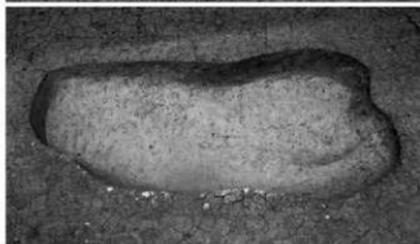
1. 4号土坑（北東から）



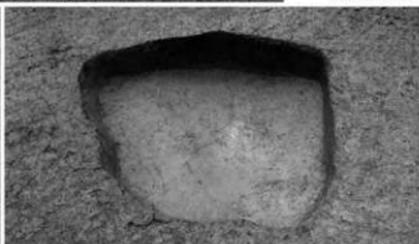
2. 4号土坑土層断面（北東から）



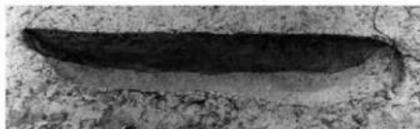
3. 5号土坑
（南東から）



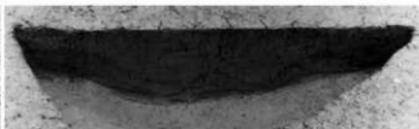
4. 6号土坑（南西から）



6. 7号土坑（北西から）



5. 6号土坑土層断面（南西から）



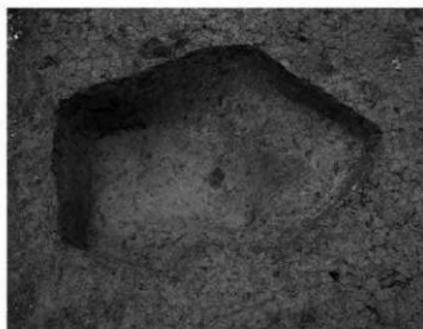
7. 7号土坑土層断面（北西から）



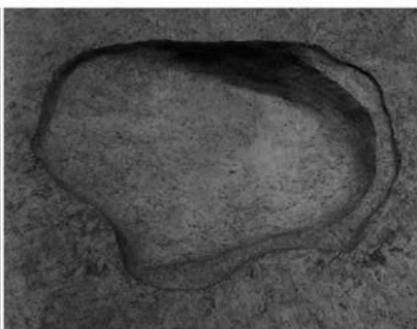
8. 8号土坑（南東から）



9. 8号土坑土層断面（南東から）



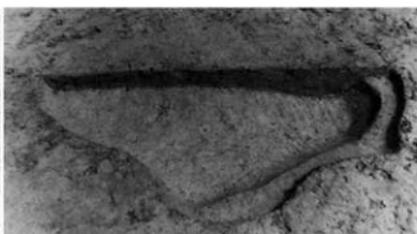
1. 9号土坑 (西から)



3. 13号土坑 (北から)



2. 9号土坑土層断面 (西から)



4. 13号土坑土層断面 (北から)



5. 1号溝状遺構 (北西から)



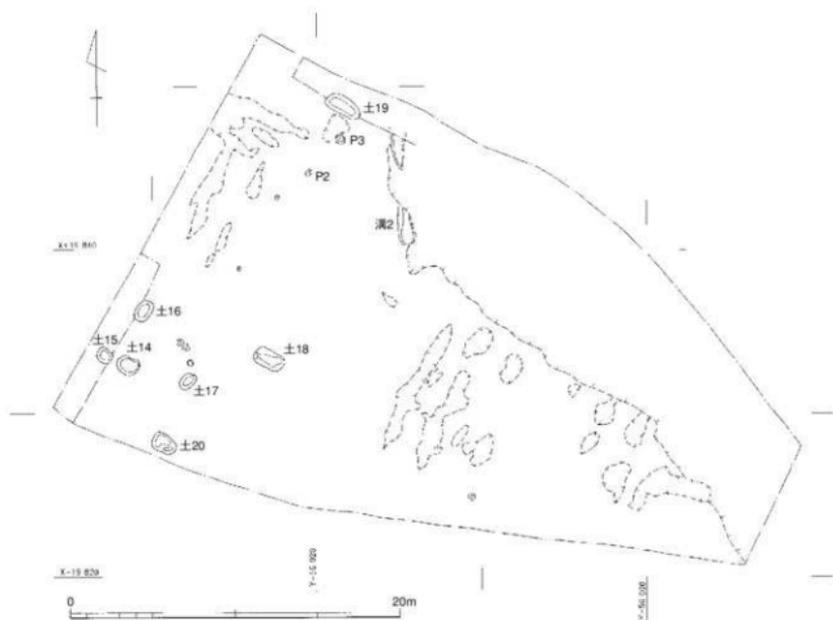
6. 1号溝状遺構土層断面 (南東から)

西蒲池将監坊遺跡 2 次調査

第10章 西蒲池将監坊遺跡2次調査

西蒲池将監坊遺跡2次調査は、1次調査地の東側を対象地とする。調査地は長軸40m、短軸25.5mで、東側が先細い三角形のような形となる。調査面積は約1,000㎡。遺構面は耕作土直下の黄灰色粘土で、現地表から10cm弱の深さで検出した。遺構面までの深さが浅いこともあり、調査地内には近世・近代の耕作に伴う攪乱が散在していた。特に調査区東半部は、遺構面が削平を受けて西半部よりも約10cm低く検出されたうえ、上記の攪乱の密度が高い。さらに調査区の北壁沿いでは、近世・近代のクレークにより、遺構面が大きく失われていた。また調査区の西壁沿いと北壁沿いの一部では、重機による表土剥ぎ時に水田用暗渠からの漏水が激しく、作業に支障を来した。このため排水溝を設けたところ、一部の遺構を欠損する結果となってしまった。

調査の結果、土坑7基・溝1条の遺構を検出した。遺構番号は1次調査から継続した番号を付した。



第28図 西蒲池将監坊遺跡2次調査遺構配置図 (1/300)

1 調査の経過

調査の経過は以下のとおりである。

平成18(2006)年

2月27日 重機による表土剥ぎ開始

3月2日 人力による掘削開始

3月15日 ラジコンヘリによる空中写真撮影

3月27日 現場撤収



写真4 調査地東上空から大川市方向を望む

2 遺構と遺物

1) 土坑

14号土坑(図版24、第29図)

調査区の南西部に位置する。平面プランは長軸1.4m×短軸1.1mの不整楕円形。床面は平坦で深さは概ね20cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。遺物は須恵器の坏身破片が出土している。

出土土器(第30図)

1は埋土から出土した須恵器坏身の底部破片。残存は1/8ほどで、底径9.6cmに復元できる。体・底部境は明瞭に屈曲し、その外面内側に低く扁平な高台が付く。底部は平らである。底部外面に板圧痕が残る。時期は8世紀中葉と考える。



写真5 作業風景(西から)

15号土坑(図版24、第29図)

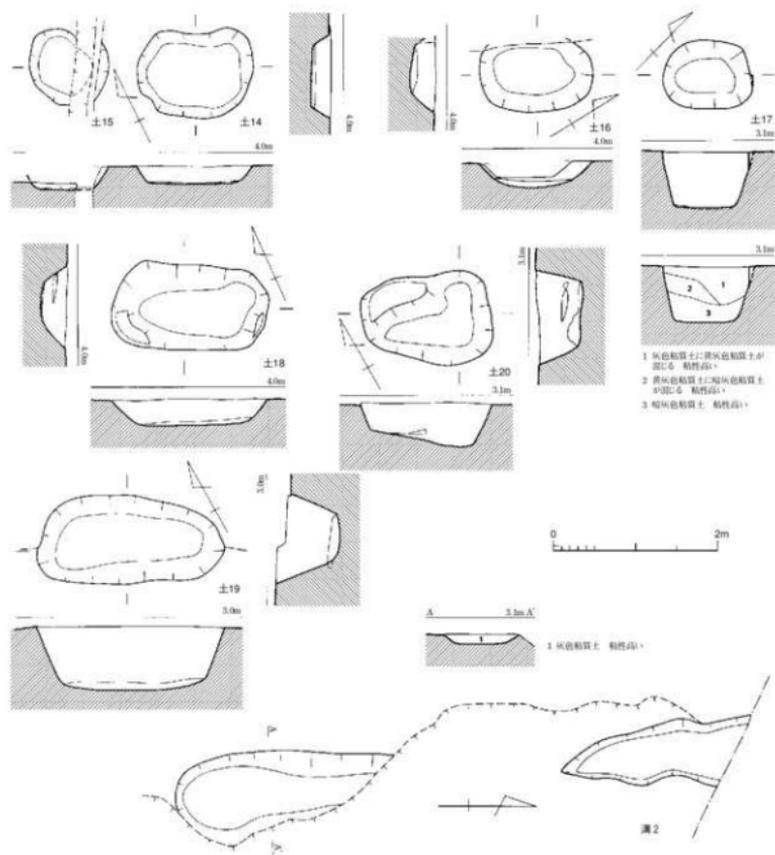
14号土坑の西0.3mで検出した。表土剥ぎ時の排水溝のため、東側の一部を残して、上部の大半を損なってしまった。平面プランは長軸1.0m×短軸0.9mの円形に復元できる。床面は平坦で、深さは上端の残りが良いところから測ると約28cmとなる。埋土は14号土坑と同じく灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

16号土坑(図版24、第29図)

調査区の西端部、14号土坑の北3mに位置する。西端の一部が排水溝で失われる。平面形は長軸1.4m×短軸1.0m前後の楕円形に復元できる。床面は中央部が最も低くなるすり鉢状で、最深部の深さは30cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。土師器の坏身片が出土している。

出土土器(第30図)

2は埋土から出土した土師器坏身の口縁部破片。残存は1/8で口径11.2cm、残存高2.6cmに復元できる。口縁部は直線的に外上方に伸びる。全体的に摩滅が激しく、調整は不明である。



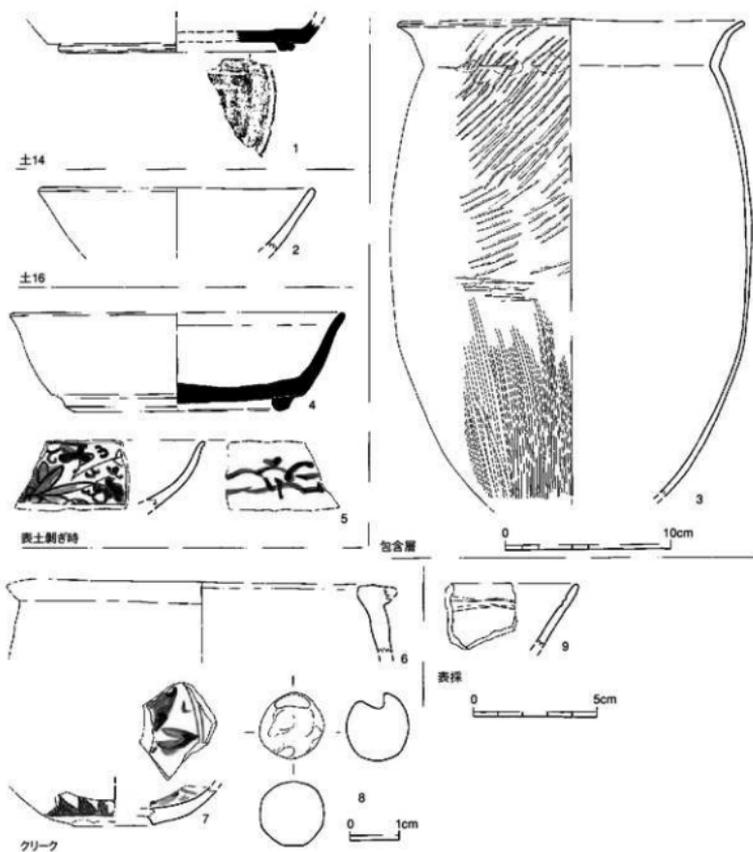
第29図 西蒲池将監坊遺跡2次調査遺構実測図 (1/60)

17号土坑 (図版25、第29図)

調査区の西部、14号土坑の東1.5mで検出した。平面形は長軸1.05m×短軸0.8mの楕円形を呈する。床面は平坦で、深さは約65cmを測る。出土遺物は確認できなかった。

18号土坑 (図版26、第29図)

調査区西半部の中央やや南、17号土坑の東4mに位置する。長軸1.7m×短軸1.05mの細長い隅丸形状の平面プランとなる。床面は西に向かって緩やかに下り、最も深いところで32cmを測



第30図 西蒲池将監坊遺跡2次調査出土遺物実測図(8は1/1、9は1/2、他は2/3)

る。東側の高い位置に狭いテラスが付く。西側のテラスは掘削時の掘りすぎによるものである。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

19号土坑(図版25、第29図)

調査区の北端部に位置する。北半分の上部が排水溝で失われるが、平面形は長軸2.3m×短軸1.1mの長い楕円形になる。床面は中央に向かって緩やかに凹む。最も深いところで78cmを測る。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

20号土坑 (図版26、第29図)

調査区南壁沿いの西部、14号土坑の南4mで検出した。平面形は長軸1.6m×短軸1.15mのやや不整形な隅丸方形プランとなる。南側に一段のテラスを持ち、床面は北に向かって緩やかに下る。最も深いところで50cmとなる。埋土は灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。出土遺物は確認できなかった。

2) 溝状遺構

2号溝状遺構 (図版26、第29図)

調査区の北部、19号土坑の東3mで検出した。調査区中央付近から北に向けて伸び、北壁から調査区外へと伸びる。大半がクレークと排水溝で失われるが、長さ6.8m、幅は最も広いところで1.05m確認できた。深さは概ね10cmと浅い。出土遺物は確認できなかった。

3) その他の出土土器 (図版26、第30図)

3は調査区中央部の包含層から出土した土師器の甕。口径21.2cm、体部の最大径22.2cm、残存高は29.7cmを測る。長胴の甕で体部はややふくらむ。頸部は内面に稜を作って屈曲し、外上方に直線的に伸びる。口縁部はさらに外方に伸び、端部は丸く終わる。器壁は全体的に薄く、頸部でも一定の薄さを保っている。体部外面下半はタテハケ、同上半～頸部外面に平行タタキ痕を残す。また頸部外面はタタキ後に指圧痕とヨコナデで仕上がる。口縁部内外はヨコナデ、内面は体部～頸部ナデで整えられる。

4・5は重機による表土剥ぎ時に採取した。4は須恵器坏身である。口径は13.6cm、底径は9.2cmに復元され、器高は4cmを測る。体部は浅く、口縁部はわずかに外反して外上方に伸びる。体・底部の境は明瞭に屈曲し、その外面やや内側に低い高台が付く。底部は平らである。5は肥前系の磁器。染付皿の口縁部破片である。内面に牡丹唐草文、外面に唐草文を施す。18世紀中葉のもの。

6～9はクレークから出土した。6は陶器の鉢口縁部。復元口径15.8cm。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は内外に突出する。全面に鉄軸が施される。唐津焼。17世紀頃か。7は中国産磁器の青花皿底部。底径3.2cmに復元される。いわゆる碁笥底と呼ばれる底部を持つもので、口縁部がやや内湾して収まるタイプである。体部外面に波濤文帯、見込みにも文様を施す。8は鉛玉。直径1.2cm、重さは11.08g。一部凹みがある。火縄銃の弾丸であろうか。9は中国産青磁の口縁部破片。碗か。

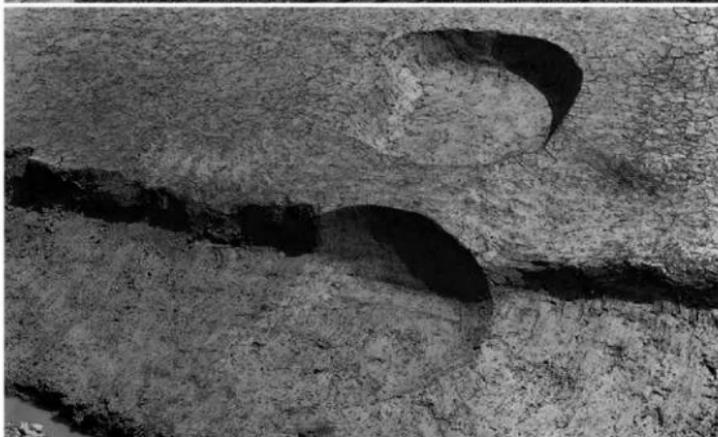
3 小結

2次調査では土坑7基と溝状遺構1条を検出した。このうち6基の土坑は調査区南西部に集中して確認された。他の遺構も含めて、時期は出土遺物や埋土から8世紀中葉に属すると考えられる。

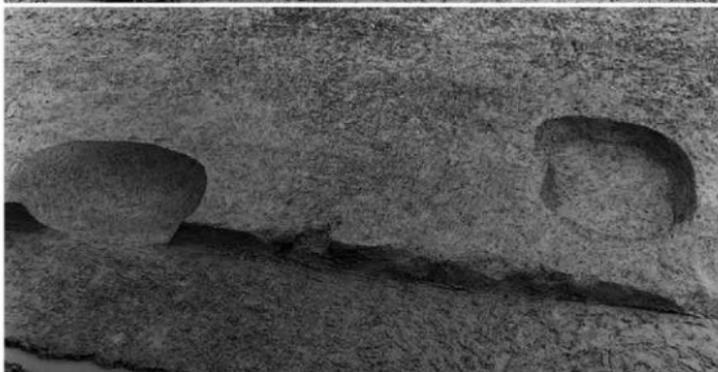
1. 西蒲池将監坊遺跡
2次調査地全景
(上が北)



2. 14・15号土坑
(西から)

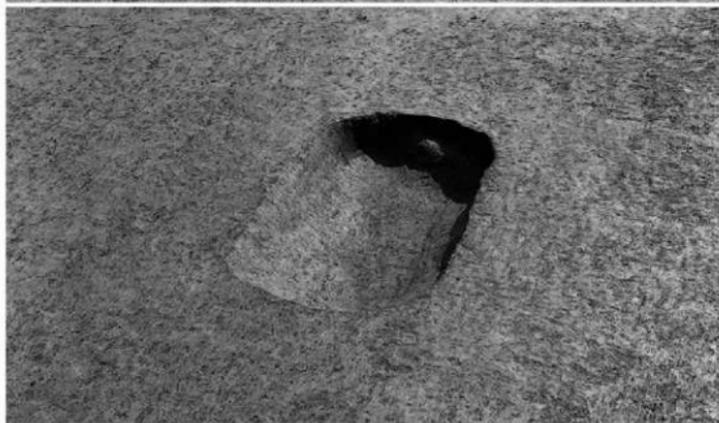


3. 14・16号土坑
(西から)





1. 17号土坑
(南から)



2. 18号土坑
(西から)



3. 19号土坑
(北から)



1. 20号土坑 (北から)



2. 2号溝状遺構
(南から)



3. 包含層出土土器

30023

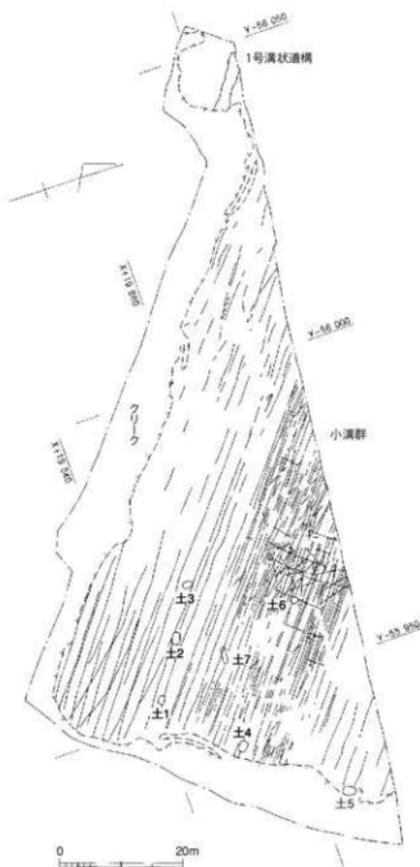
西蒲池古溝遺跡

第11章 西蒲池古溝遺跡

遺跡の所在する柳川市西蒲池地区は、大川市との市境に位置する低平で広大な水田地帯である。集落域は北東部にあり、水田地帯と明確に分かれている。調査地点は農道を挟んで西蒲池将監坊遺跡と隣接する、大字西蒲池432・443-4・443-5番地、425・428-1・430-1・433-1・434-1番地の一部で、調査面積は3,820㎡である。遺跡の東側のクリークと西側の市道、南北の農道で方形の表層区画を成しており、その南西端部に当たる。クリークを挟んで東側は試掘調査の結果遺構が確認されなかった。

1 調査の経過

平成17(2005)年4月27日にバックホーを入れて表土剥ぎした。5月11日から作業員を入れて遺構検出、掘り下げを始めた。遺構面が浅く、水田床土直下から検出されたため、耕作時の攪乱を全面に受けていた。基盤層は明瞭に検出されたが、強粘土で水分を多く含むと軟弱地盤になるため、バックホーが沈み込んだことがあった。隣接地の将監坊遺跡と一部併行しながら調査を進めた。台風や大雨で水没するたびに小溝群が埋没したため、掘り直しに時間がかかる。9月23日にラジコンヘリで全体写真を撮り、10月7日に埋め戻しを完了して撤収した。



第31図 西蒲池古溝遺跡遺構略配置図 (1/800)

2 遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は土坑7基、溝状遺構1条と、溝状遺構と同じ方向の多数の小溝群がある。土坑はこの小溝群の中に切り合って検出されている。

1) 土坑

1号土坑 (図版28、第32図)

調査区東部に位置する。方形を呈し、張り出しはない。床面はほぼ平坦で、長軸136cm、短軸103cm、深さ43cmを測る。N-51° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

2号土坑 (図版28、第32図)

調査区南西部に位置し、略方形を呈し、西辺に壁の立ち上がりが緩やかなところがあるが、明瞭な張り出し部ではない。床面はほぼ平坦で、長軸194cm、短軸121cm、深さ33cmを測り、N-60° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

3号土坑 (図版28、第32図)

調査区南東部に位置し、略円形を呈す。長軸146 cm、短軸137cm、深さ33cmを測る。N-18° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

4号土坑 (図版28、第32図)

調査区東端部に位置する。略方形を呈し、南辺にテラスがあり、小さな張り出しがつく。床面はほぼ平坦で、長軸143cm、短軸130cm、深さ22cmを測る。N-46° -Eを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

5号土坑 (図版28、第32図)

調査区東部に位置する。クレークに切られていたが、クレークの浅い部分でプランが全面検出された。平面略方形で北側にテラスを持つがテラスの幅が他の土坑の張り出し部と異っており、同列には扱えない。床面はほぼ平坦で、長軸197cm、短軸159cm、深さ31cmを測る。N-31° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明である。

6号土坑 (図版28、第32図)

調査区中央北側に位置する。楕円形を呈し、半分の床面を掘り過ぎている。長軸116cm、短軸113cm、深さ24cmを測る。N-78° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

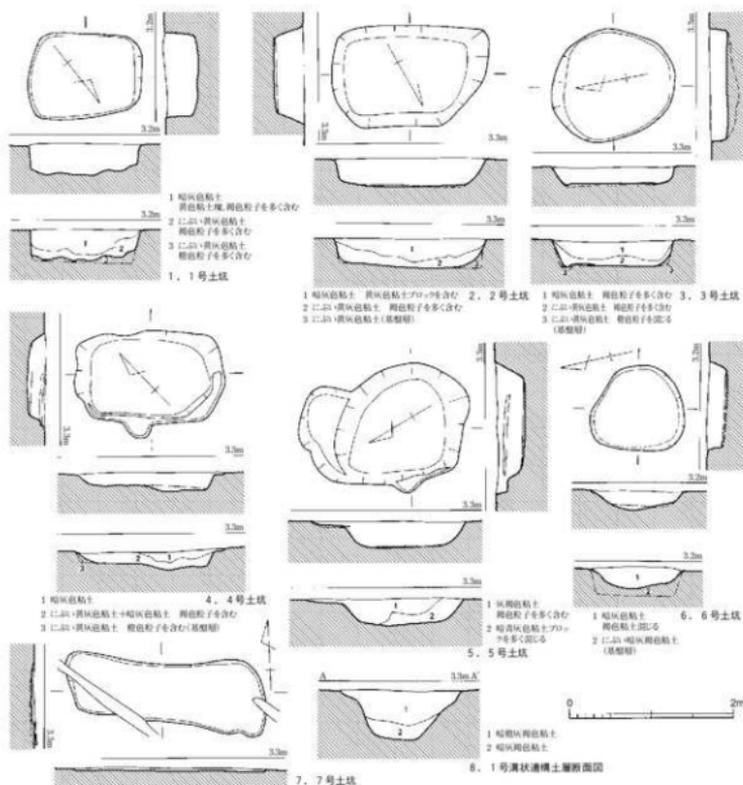
7号土坑 (第32図)

調査区中央北側に位置する。長方形を呈し、一部の床面を掘り過ぎている。長軸249cm、短軸90cm、深さ15cmを測る。N-87° -Wを主軸方向とする。出土遺物がないため時期は不明。

2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版29、第32図、付図3)

調査区西端部に位置し、N-51° -W方向に走る。クリークに大部分を切られている。最大幅188cm前後、最も深い所で66cmほどあり、床面の勾配は西に水が流れるようになっている。時期は不確定だが、中世か。



第32図 西蒲池古溝遺跡土坑・溝状遺構実測図 (1/60)

出土遺物 (図版29、第34図)

2は土師器小皿で、底部糸切り。復元底径は6.0cmを測る。器面は内外摩滅で、内面の底部と体部の接合部はナデのため、窪んでいる。内外明黄橙白色。4は土師器碗片で、器面は摩滅しているが、内外ヨコナデと思われる。胎土は精良、軟質。内外暗黄灰白色を呈す。時期は中世だろうか。

小溝群 (図版27・29、第33図、付図3)

耕作痕跡と見られる小溝群が無数にあった。現代の耕作痕が多く見られたが、その埋土には表土や水田床土の鉄分が入っており、小溝群の埋土とは異なるものであったため、近世・近代のものではない。小溝群は重複が著しく単位がわからないが、一定の間隔があったものと思われる。N-51°-W方向のものが多数を占めるが、これと垂直方向の小溝が一定間隔に見られる。

小溝の粗密があるが、調査区南側はクリークに向かって基盤層が下がっているの、残ってい



第33図 西蒲池古溝遺跡小溝群部分断面図 (1/40)

ないと考えられる。北側は逆に高かったため削平を受けて失われたものと思われる。約150cm間隔のものが多いが、約180cmと約270cm間隔のものも確認できる。

出土遺物 (図版29、第34図)

3は小溝群の基盤層に踏み込まれていた土師器碗で、復元高台径7.0cmで、外底はへら切りの後、高台貼り付け。内外暗黄褐色で、胎土は精良で褐色パミスを含む。10世紀前半代か。8は小溝群の基盤層上面から出土した不明鉄製品で、端部はやや幅広く、小口部は丸みをもっている。中空なので、柄のような木を挿入するものだろうか。

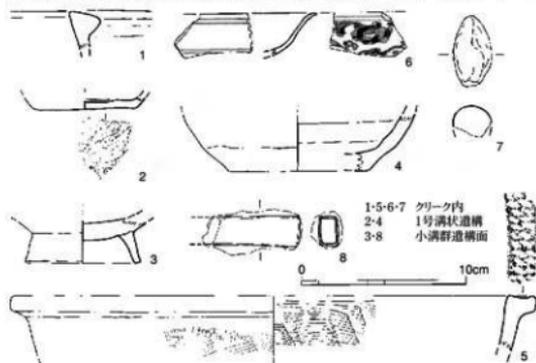
3) その他の出土遺物

その他の出土遺物 (図版29、第34図)

1はクリーク上面出土の弥生中期初頭の甕口縁部片で、ローリングを受けているため調整不明。内外黄橙白色で、胎土は白色粒子・褐色粒子など多く含む。5はクリーク出土の瓦質土鍋で、口唇部を肥厚して上面に2列の刺突文を施す。外面はタテハケ、内面はヨコハケ。色調はにぶい灰黄褐色。内面に黒ずんだ部分があるが、使用によるものかはわからない。胎土は金雲母・白色粒子を多く含むやや粗い。6はクリーク上面出土の明の青花端反皿と思われる。外面は口縁下に2条界線、その下に草花文。内面は口縁下に染付、見込みは2条界線内に何か文様が入るがモチーフは不明。胎は白色で、軸は青味がかった透明軸。7はクリーク上面出土の土弾で、手捏ねで、混入物なく精良。一部に黒斑あり。2/3ほど遺存し、重量は13g。

3 小結

本調査区では中世以前のものと見られる土坑7基と溝状遺構1条が検出された。南側クリークは1号溝状遺構と同方向に走っていることから、その掘り直しではないだろうか。その1号溝状遺構は、西蒲池古塚遺跡の溝状遺構とは異なり幅・深さともに上回ることから、坪境溝と考えられる。おそらく、南側の市道と東側のクリークも坪境溝があったが、道路として埋め立て、クリークとして掘り広げたのではな



第34図 西蒲池古溝遺跡出土遺物実測図 (1/3)

かろうか。本来坪境溝で囲まれた正方形の区画だったのだろう。

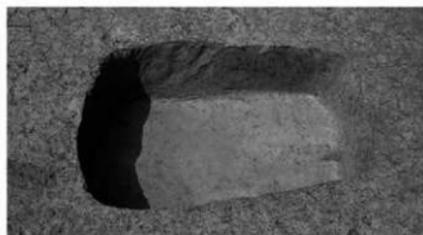
小溝群は西蒲池古塚遺跡と将監坊遺跡でも検出されているので、まとめて詳述したい。



1. 西蒲池古溝遺跡全景
(東上空から)



2. 同上 (上空から)



1. 1号土坑（北東から）



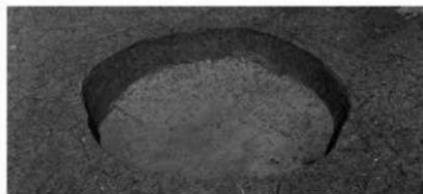
3. 2号土坑（北東から）



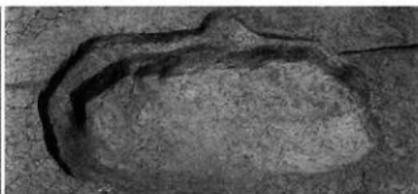
2. 1号土坑土層断面（北東から）



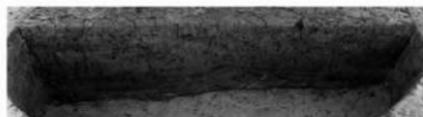
4. 2号土坑土層断面（北東から）



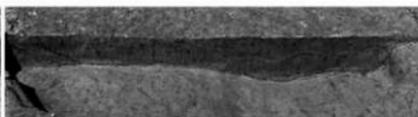
5. 3号土坑（西から）



7. 4号土坑（南西から）



6. 3号土坑土層断面（西から）



8. 4号土坑土層断面（南西から）



9. 5号土坑（北西から）



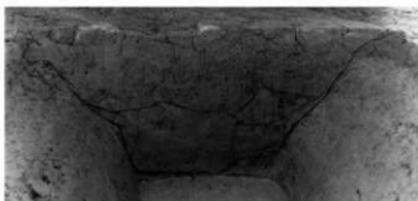
11. 6号土坑（西から）



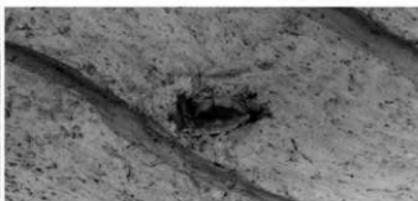
10. 5号土坑土層断面（北西から）



12. 6号土坑土層断面（西から）



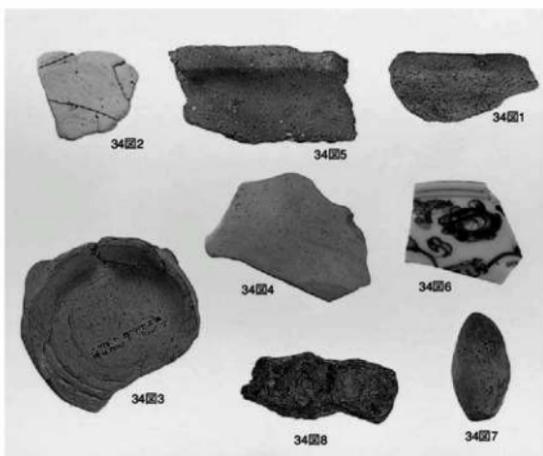
1. 1号溝状遺構（北西から）



2. 小溝群内土器出土状態（南から）



3. 小溝群部分土層断面B-B'（南東から）



4. 西蒲池古溝遺跡出土遺物

西蒲池下里遺跡

第12章 西蒲池下里遺跡

1 調査の経過

西蒲池下里遺跡は柳川市大字西蒲池字下里82、83-1ほかに所在し、三島神社を中心とする土器の散布が集中する地域の南に位置する。

平成18(2006)年2月13日に重機による表土剥ぎを開始、2月21日に作業員による発掘作業に着手した。遺構検出は比較的容易だが、脆弱な粘質土は扱いづらく正確に遺構を掘削するのは骨が折れる作業であった。3月18日に空中写真を撮影し、3月21日に作業員による作業を終了、3月31日に全ての作業を完了した。

2 遺構と遺物

本調査区は2ヶ所に分け、西から順に1区、2区としている。1区は西側にクリークがあり、2区は北側が水路と市道、西側が市道、東側がクリークに面している。遺構面の標高は約2.5mで、2区中央付近が最も高く、東西に緩やかに傾斜している。2区の東西と北壁中央付近で旧クリークの落ち際を検出しており、現在の市道はクリークを埋め立てて敷設されたと思われる。

基盤層は非常に脆弱な淡黄灰色粘質土で、キャタピラ痕と思われるごく浅い溝が多く認められた。この基盤層に、灰色粘土、暗褐色粘土を埋土とする遺構が切り込んでいる。

検出した遺構は土坑1基、溝5条、溜り状遺構、クリークである。

1) 土坑

1号土坑(第36図)

1区に位置する楕円形の土坑。他の遺構との切り合い関係はない。長径1.9m、短径1.36m、深さは最深部で0.54mを測る。埋土はやや明るい灰褐色粘質土である。埋土の状況から、奈良時代の遺構と思われる。ごく小片の土師器が出土している。

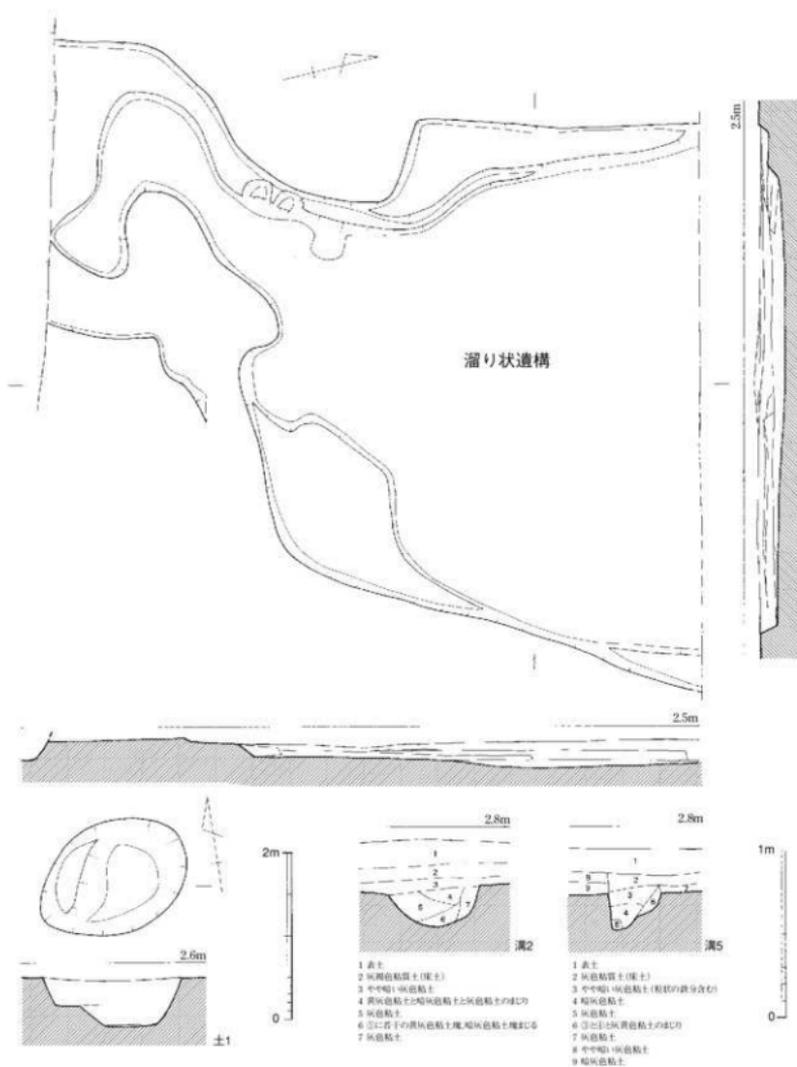
2) 溝状遺構

1号溝状遺構(図版30、付図4)

2区北東隅付近に位置する東西方向の溝。溜り状遺構、東側のクリークよりも古い。北岸が調査区外になるので幅は不明。溜り状遺構よりも西では検出されず、北へ方向を変えるのではないかとと思われる。深さは0.14~0.28mと浅い。埋土は暗灰褐色粘土と淡黄灰色粘土の混じりで、場所により暗灰褐色粘土が多い。



第35区 西蒲池下里通跡遺構略配置図 (1/800)



第36図 西蒲池下里遺跡1号土坑・溜り状遺構実測図 (1/60)、2・5号溝状遺構土層実測図 (1/30)

出土遺物 (図版30、第37図)

1は黒色土器の碗である。全体に摩滅しており、体部内外面の調整は不明である。底部外面はナデ調整。体部は丸みが強く、金属器を模倣したものか。高台はあまり高くなく、端部をやや角ばって仕上げる。復元口径14.8cm、器高6.1cm、高台径8.5cm。

2号溝状遺構 (図版30、第36図、付図4)

2区東半に位置する東西方向の溝で、1号溝とほぼ平行する。3号溝よりも古い。幅0.6m、深さ0.2m前後を測る。埋土は灰色粘土を中心とする。

出土遺物 (図版30、第37図)

2は須恵器の杯の底部小片である。体部外面はヨコナデ、底部内外面はナデ調整する。復元底径8.2cm。

3は土師器杯の底部片である。体部は内外面ともヨコナデ、底部内面は不定方向のナデ調整である。底部外面はヘラ切り離し後未調整で、板目状の圧痕が残る。胎土は精良で、焼成もよい。復元底径7.4cm。

4は黒色土器の高台付の杯である。全体に摩滅が進んでおり、調整は不明。

5は瓦器碗の口縁部小片。内面から外面口縁部下にかけて炭素が吸着しており、焼成はよい。

3号溝状遺構 (図版30、付図4)

2区東半に位置する北西—南東方向の溝。2号溝よりも新しい。幅0.4m、溝底は部分的に深くなっており、最深部で0.4mを測る。埋土は灰色粘土。

出土遺物 (図版30、第37図)

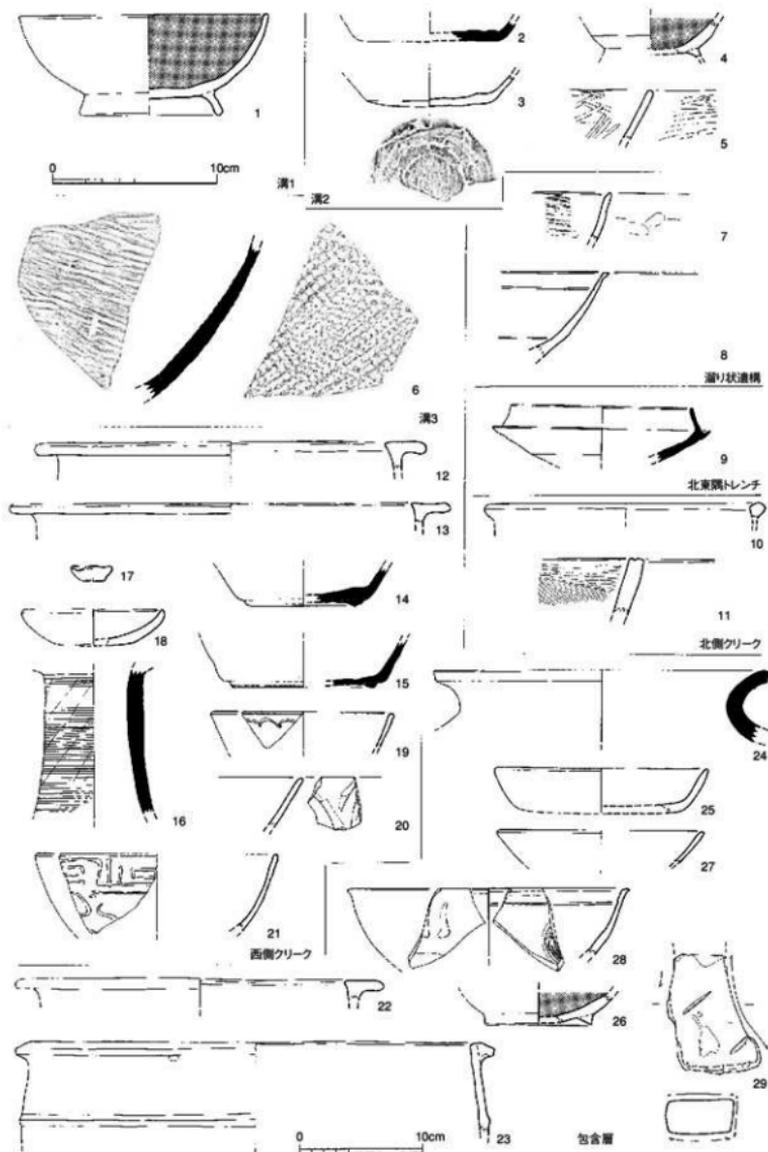
6は須恵器甕の体部片。外面は格子目のタキ痕、内面には当て具痕が残る。内外面とも灰を被っており、内面は暗緑灰色を呈する自然釉が認められる。底部に近い部分の破片であろう。

4号溝状遺構 (図版30、付図4)

2区南東隅付近に位置する北東—南西方向の溝。幅0.75m、深さは0.15～0.24mを測る。埋土は灰色粘土である。

5号溝状遺構 (図版30、第36図、付図4)

2区東半部に位置する南北方向の溝。幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粘土を中心とする。



第37図 西蒲池下里遺跡出土遺物実測図 (10・12・13は1/4、他は1/3)

3) その他の遺構

溜り状遺構（図版30、第36図、付図4）

2区東半に位置する不定形の浅い遺構。2号溝よりも古く、1号溝よりも新しい。調査区北壁部分の幅が6.78m、深さは最深部で0.28mを測る。調査区外に遺構が広がるため全形を知りえないが、調査区北壁部分が最深部と思われる。

出土遺物（図版30、第37図）

7は瓦器椀口縁部の小片である。口縁部はわずかに外反し、口縁内側を沈線状にくぼませる。体部内面はヨコナデ後ミガキ調整。口縁端部はミガキが密だが、体部は間隔においてミガキを施しており、縞模様のように見える。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデ調整で、一部指頭痕が残る。

8は白磁椀の小片である。口縁端部は外反し、水平につくる。内面口縁下、体部と底部の境付近の2箇所に沈線をめぐらす。胎土は精良で灰白色、釉は灰色味を帯びている。

クリーク出土土器（図版30、第37図）

2区東側のクリークは完掘したが、北側と西側のクリークは、20cmほど掘削して遺構の肩を出したにとどまる。

東側クリークからは9の須恵器杯身が出土している。体部内外面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラ削りである。胎土は精良で、焼成もよい。復元口径10.6cm。

北側クリークからは10の弥生土器甕の口縁部と11の土師質土器が出土している。10は甕の口縁端部はがれたもので、全体に著しく摩滅している。復元口径22.6cm。11は鉢の口縁部で、内面は細かいハケ目、口縁部はヨコナデ調整である。体部外面は摩滅して調整不明。

西側クリークからは最も多くの土器が出土したが小片が多く、図示できるものはそれほど多くない。

12・13はともに弥生土器甕の口縁部片で、逆「L」字状を呈する。13の一部にヨコナデが残るほかは、摩滅して調整不明。復元口径は、12が31.6cm、13が35.4cm。

14・15は須恵器高台付杯の底部片である。どちらも体部が直線的に伸び、体部と底部の境付近に断面台形の低い高台がつく。調整はともに、体部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデ調整である。15は外面に灰を被っている。14は7.0cm、15は8.6cmに高台径を復元できる。16は須恵器高杯の脚部片で、杯部直下の部分と思われる。外面はカキ目、内面はヨコナデ調整である。

17は土師器蓋の撮み部である。形は整わず、焼成もよくない。18は土師器小皿である。内外面ともヨコナデで、底部は糸切り離しである。底部の始末は粗雑だが、焼成はよい。外面に煤が付着している。復元口径8.2cm、復元器高2.2cm。

19～21は青磁である。19は口縁部のごく小片である。小形の杯であろう。体部外面に蓮弁の先端と思われる文様を施す。胎土は灰色で精良、釉は灰緑色である。復元口径11.0cm。20は椀の

口縁部小片。体部外面に蓮弁を削りだしており、わずかだが鑷が確認できる。胎土は精良で灰色、釉は灰緑色。21は碗の小片で、体部外面に雷文を施す。胎土は淡灰色で、釉は淡緑色を呈する。復元口径14.6cm。

包含層出土土器（図版30、第37図）

遺構面検出時に出土した遺物で図示できるものを掲げている。本調査区周辺の水田では床土中に比較的多くの土器が含まれているが、耕作に伴う客土が包含していた土器である場合が多く、必ずしも遺構とは関連しない。

22・23は弥生土器甕の口縁部片である。22は逆「L」字状、23は断面三角形状を呈する。22は内外面ともヨコナデ調整で、復元口径29.6cm。23は全体に摩滅して調整は不明。口縁直下に1箇所、刺突痕が残る。復元口径38.6cm。

24は須恵器甕の口縁部片である。大きく外反し、端部をつまみ出すように仕上げる。内外面とも灰を被っている。復元口径20.2cm。

25は土師器杯。摩滅著しく調整は不明である。復元口径12.8cm、復元底径9.6cm、器高2.8cm。

26は黒色土器。高台付杯と思われる。全体に摩滅し、調整不明。高台は断面三角形を呈する。復元高台径6.4cm。

27は瓦器碗の口縁部小片である。口縁部内面にわずかにミガキが残るほかは、摩滅して調整不明。全体に被熱し、赤変している。復元口径12.4cm。

28は青磁碗の破片。口縁端部が外反し、端部を水平につくる。内面口縁部下に沈線をめぐらす。胎土は灰白色で、釉は黄みを帯びた緑色。復元口径17.0cm。

29は砥石である。粒子が粗い砂岩で、粗研ぎ用と思われる。残存部の左側面のごく一部に使用痕が残り、形状からも左側面を含む四面を使用していたと思われる。傷は後世についたものである。残存長7.2cm、最大幅4.9cm。

3 小結

本遺跡は検出遺構、出土遺物ともに少なく、集落遺構の周囲に広がる水田部分であったと思われる。表土、床土、やや暗い灰色粘土を除去すると遺構検出面で、地表からは30cm程度の深さである。（第36図参照）

1号土坑は他の遺構との切り合い関係もなく、出土遺物もごく小片のため正確な時期は不明である。平成15（2003）年に調査した東蒲池榎町遺跡で検出した遺構の埋土状況と照し合わせると、奈良時代ではないかと思われる。

その他の遺構は全て2区東半に位置する。遺構の切り合い関係から、1号溝状遺構→溜り状遺構→2号溝状遺構→3号溝状遺構の順で新しい。4号溝状遺構は切り合い関係がなく遺物も出土していないため、時期は不明である。

1号溝状遺構は、出土した黒色土器の形状から考えて9世紀後半から10世紀前半に埋設したと思われる。溜り状遺構から出土した瓦器椀、白磁椀とも口縁部小片で底部のつくりが不明だが、12世紀代のものであろう。2号溝状遺構からはへら切り離しの土師器杯など古相の土器が出土しているが、一方で瓦器椀小片が出土しており、埋設時期は12世紀ないし13世紀と思われる。

これらのことから、平安時代から鎌倉時代にかけての水田に関連する遺構と思われるのだが、鎌倉初期には既に成立していた三落荘の一部であったろうか。

さて、クリークからは近世陶磁器を含む様々な遺物が出土している。その中には摩滅が著しく復元できない小片が多かったが、弥生時代前期後半から中期半ばの土器が比較的多く見られ、復元できた土師器、須恵器の中では8世紀後半代のもが多いようである。これらの土器の存在が、ただちに周辺の遺構の存在を示唆するものとするのは早計だが、比較的遺物が多く見られる時期は遺構との関連を考えてもよいのではないだろうか。

蒲池地区は比較的早い時期に陸地化していたと考えられ、弥生時代中期の土器の散布が三島神社周辺で確認されている。また、先述の東蒲池榎町遺跡でもわずかだが遺構が検出されていることから、弥生時代の遺構は周辺に散在していると思われる。

13世紀には三落荘蒲池村が成立しており、関連する遺構が東蒲池大内曲り遺跡（平成17（2005）年調査）で検出されている。古文書からはかなり有力な村であったと思われる蒲池村だが、この前身となる集落がどのような状況であったか大変興味深いところである。

参考文献

- 福岡県教育委員会2005「東蒲池榎町遺跡」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
福岡県教育委員会2007「東蒲池大内曲り遺跡」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集

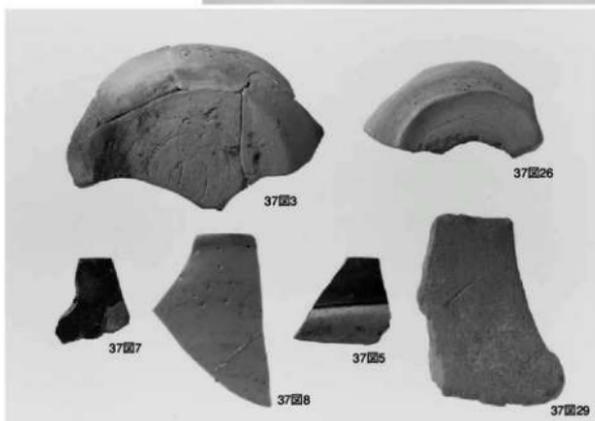
1. 西蒲池下里遺跡2区
全景（上空から）



2. 1号溝状遺構出土土器



3. 出土土器・石製品



第13章 まとめ

本報告に掲載した坂井長水遺跡、西蒲池古塚遺跡、西蒲池将監坊遺跡、西蒲池古溝遺跡及び西蒲池下里遺跡で検出されたのはいずれも縦横に走る溝状遺構と土坑群であり、溝状遺構は条里地割に伴うものと考えられる。水田床面直下で遺構面が検出されたことから、畦畔などは確認できなかったが、溝と土坑以外の遺構がないことや、遺物の少なさから見ても、集落域でないことは明らかで、広大な水田地帯であったといえる。

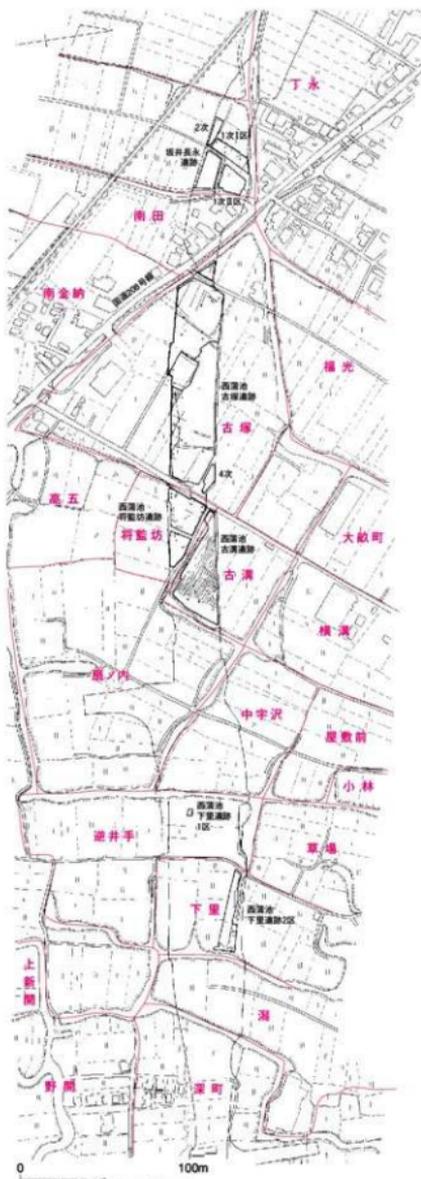
遺跡の消長について

条里地割は、大化の改新(645年)で定められた班田收受制度に伴って、田地の位置を明確にする必要から起こった条里制土地区画法で、郡ごとに南北正方位に施工されたものであり、戦後の圃場整備が行われる以前にはその地割が継承された「表層条里」が明瞭に見られる地域は、古代からの土地区画を継承しているとされていた。

しかし、大規模な道路建設に伴う埋蔵文化財調査が「表層条里」の残る低平な地域でも実施されるようになると、条里遺構の実態が明らかになってきた。

著名な調査例では、香川県中央部の讃岐平野で高松市東バイパスの建設に伴い、典型的な条里地割を横断するように発掘調査が行われており、一見整然とした地割りも、形成時期が場所によって異なっていたということがわかった。また、洪水や自然堆積により水田面の残りのよい大阪平野や静岡平野では特に条里についての考古学的な調査研究が進展しており、方位や施工時期の差を地割の基準となる古代東海道の建設や都市の形成など施工経緯の差に見ている。

このように「表層条里」の見られる地域で発掘調査が行われた結果、施工時期が律令期に限らないものや「表層条里」と方位の異なるものがあることが明らか



第38図 坂井長水遺跡・西蒲池古塚遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡遺構略配置図(1/3,000)

になった。

西蒲池地区に見られる「表層条里」は主軸方向が南北正方位でないため、当初は条里地割と認定されていなかった。しかし、こうした他地域の調査事例と今回の調査により、「表層条里」と同方位の条里地割が埋没していることが明らかになった。

本書掲載遺跡の遺構に伴う出土遺物のなかで最も古いものは10世紀であるが、このころ西蒲池地区の条里地割が成立したと思われる。

この時期に施工が始まった経緯については、三藩庄の存在を無視できない。三藩庄の成立時期は明らかでないが、文献上の初現は平治元（1159）年の「宝莊嚴院領莊園注文案⁹¹」であり、宝莊嚴院領莊園の中でも最大規模の莊園として記載されている。宝莊嚴院は、長承元（1132）年、鳥羽上皇御願寺として京都白川に建立された寺で、条里地割の施工は建立以前であるため、開発領主から寄進されたと考えられる。現段階では最初の開発領主が誰であるかはわからない。

遺跡の下限としては、出土遺物から14世紀まで見ることができる。しかし、新しいものと思われる溝や土坑を掘り下げたが、それ以降は江戸時代中期にクリークが掘られるまでの間の遺物を見ることができない。水路が埋まったということは水田が営まれていないことを指す。

この時期の遺構・遺物が断絶する傾向は東蒲池榎町遺跡⁹²・東蒲池大内曲り遺跡⁹³にも見られる。集落の断絶は生産基盤の衰退に起因しているのではなかろうか。衰退の原因については、室町・戦国時代という社会環境の変化や、中世海進のため水利環境の変化などが想起される。東蒲池地区の調査事例の増加を待って検討するべきであるが、現段階で想定されるのは、室町・戦国時代の社会的混乱である。三藩庄は鎌倉時代に地頭職が置かれて以降、武士勢力の所領が次第に増えていったが、南北朝の動乱以降、九州は勢力が二分され相争うようになる。広大な条里の中で異なる陣営の領地があれば、安定した水田経営が難しくなり、そのことが田地の荒廃を招いたのではなかろうか。

土坑

本書掲載遺跡からは多くの土坑が出土しているが西蒲池古塚遺跡2・3次調査では溝と切り合うものが多い。これらの溝を切る土坑は渇水期に溝に溜まった水を集めるためのものだろう。集落に伴う溝でなく、生産活動のための用水路として掘られた溝を見てみると、溝沿いに土坑が集まっていることが多い。特に溝が湾曲しているところは多く、水流が滞り土壌に水が浸み込むためであろう。西蒲池古塚遺跡1次調査の2号土坑や西蒲池古塚遺跡2次調査の14・15号土坑のようにすでに埋没した水路に近世の土坑が切り込むのは、埋没した溝が暗渠排水となって水分が浸み込んでいたためであろう。埋土が灰色粘土の単一層であるのは、埋め戻したのではなく水路から流れてきた泥がたまったものと見るべきだろう。

一方、坂井長永遺跡1次調査、西蒲池古塚遺跡3次調査、西蒲池将監坊遺跡1次調査、西蒲池古溝遺跡では溝状遺構に対して垂直に並んでいる土坑がある。水田面に土坑が存在することは考えにくいので、溝が削平された可能性が高い。溝の存在を示すものがないので、証明できないものの、水を流すには勾配が必要だが、低平な地形ではわずかな勾配しか取れないため、溝の上位はかなり浅いものだったのではないだろうか。

条里地割に伴う溝状遺構について

本書掲載遺跡の調査で大きな成果の一つとしては、条里地割とクリークの関係を明らかにしたことである。西蒲池古塚遺跡2次調査でクリークである2・14号溝を掘削したが、下層からは18世紀代の遺物が出土しており、中世に遡る可能性は低い。したがって、クリークを利用した水田経営は西蒲池地区では14世紀までは行われていない。

通常の条里遺跡では、掘りこまれた遺構としては坪境溝が検出されるだけで、坪の内部は畦畔

で区画されるので、畦畔が削平されていれば、明確な遺構は検出されない。では、西蒲池古塚遺跡2次調査4～7・19号溝状遺構のような直線的な等間隔の小溝はなんのために掘られたものであろうか。

東西方向に走る小溝は、この溝による区画の中央部から始まり、近い側の南北方向に走る幅広い溝に水が流れるように勾配を付けて掘られているので排水目的の溝といえる。南北方向の溝は東西壁の立ち上がりの片方が緩やかである。水の流れ込む方の壁が緩やかなのはそのためであろう。

有明粘土を基盤とする低平な地形では、水は流れにくく浸み込みにくい。他地域のように、畦畔で囲まれた水田区画を高所から低所へ水を回しながら排水することが困難なのではないだろうか。つまり、これらの小溝は有明海沿岸地域に特有の排水溝と考えられる。この排水溝が水田区画の基準となっていることに間違いはなく、条里地割が長地型であることを示している。

小溝群

西蒲池古溝遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古塚遺跡に見られ、「小溝」という呼称を用いたが、耕作痕というべきであろう。

1本の溝は幅5cm前で深さは8cm程度であるのでこのような細い溝では水は流れない。実際に、調査中に大雨で灌水した際には簡単に埋没してしまった。この幅は、畿内地方でよく見られる幅20～30cmのいわゆる「中世茶壺小溝」²⁸とは異なるうえ、畑の畝にしても幅が狭すぎる。

次に掘削方法を考えてみよう。同じ幅で直線的に検出されることから溝の進行方向に施さなければこのように掘削できない。また、同じ1条の溝でも途中途切れている部分があり、溝の間隔は不均一であるので、1本単位で施したものと見える。

これらのことは犁で土を掻き分けたことを指すとともに、人力による掘削でなく牛馬耕の存在を示唆している。馬鋳にしては溝幅が広すぎるうえ、等間隔の単位を見ることもできないので、犁で1本ずつ引いたものであろう。また溝の断面形から、犁の先端はU字形の鋤先ではなく、尖ったものであったはずである。平安時代の『倭名類聚鈔』に犁の存在を見ることができ、時期的にも使用された可能性はある。また、有明粘土を基盤層としており礫がない地域であるので、水分を含めば木製犁でも十分使用できる。さらに、この溝の中には進行方向が大きく湾曲するものが数条見られるが、これは意図的にその方向に施したのではなく、犁を入れたまま、別の場所に移動しようとしたためであろう。

牛馬の足跡は残っていないが、人の足跡もなかったので、削平されたとみてよい。したがって、この「小溝」は犁による牛耕の耕作痕と考えられる。

ここで注目されるのは耕作痕の長さである。大畦畔や水路を犁で破壊することはないであろうから、大畦畔や水路は耕作痕の方向に作られていたであろう。14世紀初頭に描かれた「松崎天神縁起絵巻」²⁹の十二紙に畦畔を越えて耕作する様子が見られる。小畦畔による水田区画は牛耕を行うには狭いことから、犁による田起こしを経て小畦畔を作り直すのであろう。

柳川市北西部・大川市南部の条里地割について

有明海沿岸道路建設に先立つ試掘確認調査は、近世以降の干拓地より内陸に当たる柳川市大和町皿垣地区以北のほぼ全線にわたって実施された。その結果、低平な水田地帯に中世以前の条里遺構が残っていることが明らかになった。本調査を経て、「表層条里」は中世以前の条里地割を継承しているため坪境溝は現行のクリークと重複して失われているが、有明海沿岸の特殊な地形環境から坪内に多くの溝が検出され、少量ながら時期を特定し得る遺物も得られた。これは、有明海沿岸地域の条里遺跡の研究に、考古学的アプローチが可能であることを示した。

今後この条里遺跡の範囲確定や施工段階、クリークによる灌漑の開始時期を解明する必要がある

あるが、後者は発掘調査で明らかになるものなので、ここでは前者について、小字名と試掘確認調査と本調査の成果を踏まえて条里の範囲を推定したい。条里名は福岡県文化財地図の名称を用い、大川市南東部については「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里³¹¹」を、柳川市北西部・大川市坂井以西を「坂井・三丸・幡保・一本条里³¹²」とする。

柳川市北西部は現在の標高で4m前後のラインより内陸側に条里型地割が見られる。この標高ラインから、鹿島・東蒲池と中村・西蒲池の間に低地が入り込んでいることがわかるが、これは大木町のクリーク地帯に広がる低湿地の水が二ッ川に流れ込む流路があったと見られる。さらに鹿島・東蒲池集落の東側は有明海沿岸道路の路線内の試掘調査の結果、条里型地割が確認されていない。この範囲の小字名は「榎町」や「深町」など陸地であったことを示す地名がついているが、沖端川からの氾濫原と交差する地点であることから安定した広域の水田地帯を確保できなかったようだ。そのため耕地としては利用されたが、条里は施行されなかったとみてよい。

西蒲池の南側は、西蒲池下里遺跡の調査で検出された東西方向の溝が条里の南端である。それ以南は「逆井出」「野々口」などの地名がついている。流路と条里の方形区画との間には空地があったものと思われ、西蒲池下里遺跡2区のように残地としてわずかな利用があったのみであろう。

下里の東隣りの小字は「潟」であり、流路の中であることが予測される。反対に西隣の小字は「扇ノ内」であり、その地名のとおり地割が扇形である。これは東西蒲池集落の中央を流れる流路が、枝光地区の微高地の西に曲がって流れていたため、その地形に沿ったものである。「扇ノ内」には弥生時代の甕棺墓が存在することが知られており、弥生時代から陸地化していたが、用地内の試掘調査では遺構は確認できなかった。

また、西蒲池将監坊遺跡からは古溝遺跡とは異なり、地割方向を無視した土坑列や溝の配置が見られる。これは条里の残地を耕地として利用したためではなかろうか。

上述のことから、条里は西蒲池集落の南から、流路の湾曲のために南端に残地を残しながら西に展開しており、条里と流路の間の区画が入らない土地は地形に合わせて変則的に利用されていたと見られる。

坂井・三丸・幡保・一本地区を見てみる。「蒲池条里」と方向を同じくしており、北側の国道208号に沿って、三丸東田口遺跡・三丸中小路遺跡・宮ノ前遺跡・園田遺跡³¹⁷といった平安時代の遺跡が分布しており、ここを集落城として水田を経営している。

本条里の地割は西部で大きく南に湾曲し、区画が歪んだ方形になっているが、これは筑後川の河岸段丘に沿ったものである。西蒲池古塚遺跡でも南北軸の溝は地形に沿って湾曲しており、条里区画はやや歪んだ方形になっていた。利水のためには溝は地形に合わせて掘削する必要があるためだろう。正方位に施された条里地割は地形を無視していたため、水がかりの悪い田を生み出してしまふ。地形に合わせた区画にするとは改良した条里区画といえるのではなかろうか。

遺跡地図では坂井・三丸・幡保・一本地区の集落の北側まで条里とされているが、これについては検討を要する。有明海沿岸道路路線内の試掘調査では、圃場整備による削平と旧国鉄佐賀線のためこの地区の中では遺構が確認できなかった。今後の調査に期待したい。

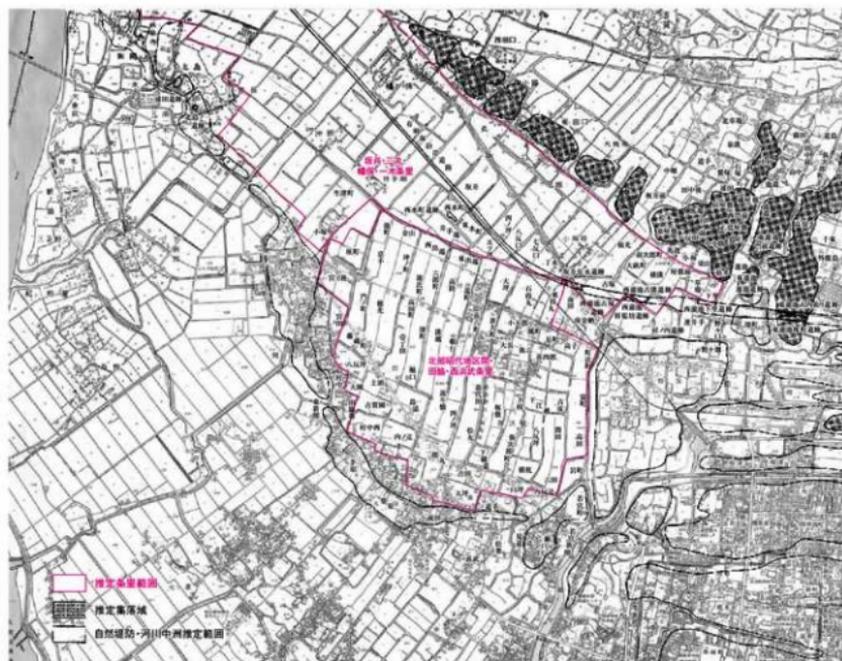
次に、「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里」を見てみよう。海岸に近いことから、新規開墾地かもしれない。この条里は「坂井・三丸・幡保・一本条里」と方位を異にし、表層条里区画が後者の条里を切っているように見える。「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里」の一角に所在する坂井長永遺跡からは、12世紀後半～13世紀後半の遺物が出土している。遺物量が少なく、これをもって条里の施行時期とするべきではない。

時期の明確な文献上での上限としては、筑後河原文書の横清文書「弘安四年(1281)蒙古合戦勲功章配分事」「筑後国三瀧庄田脇村平尾田孫太郎跡 一所一町廿六条一甲(里)東預町³¹⁸」とあり、13世紀には三瀧庄に所属し施行されていたことを示している。

「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里」の南側には諸藤・長藤・南間など湾曲した集落帯があるが、柳川市の干拓地では、堤防を建設してその内部を干拓し、それまで使われていた内陸部の堤防は入植者の集落地として使っているので、これは自然堤防があるいはそれに手を加えたそれほど高くない中世の堤防上に集落が進出したものであろう。集落の進出は、そこに埋蔵文化財の包蔵地がないことから近世集落であり、干拓地が江戸時代にさらに南に延びたことで入植者の集落となったものであろう。

第39図のように、「北部昭代地区間・田脇・西浜武条里」は自然堤防と河川の中洲に囲まれたことで安定した水田経営が可能になったのだろう。これに対して東蒲池より東側は河川の氾濫のため安定した水田が確保しにくかったために条里が施行されなかったのではないか。こうした例は、大川市北部の鐘ヶ江地区の条里にも見ることができる。鐘ヶ江地区は筑後川東側の河岸段丘を堤防として利用している。

本書に掲載した遺跡は、南筑後地域で表層条里の見られる地域を横断するように調査し、条里に伴う遺構を検出した最初の事例である。これまで歴史地理的アプローチが多かった条里研究に新たな資料を提示することができた。低平地の水田地帯の本調査は、用地に対する遺構・遺物の少なから、その必要性を疑問視されることもあるが、今回の調査では上述のような一定の成果を挙げることできた。今後の有明海沿岸地域の歴史の究明や、埋蔵文化財調査・研究に資することができれば幸いである。



第39図 中世旧地形・条里推定図 (1/30,000)

註

- 1 森下英治1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」[研究紀要V]財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 2 木原克司1994「摂津・河内の条里地割施工と直線古道」[大阪市文化財論集]財団法人大阪市文化財協会
- 3 佐野五十三1996「条里と土地開発—静岡平野における方格状地割りの導入と展開—」[帝京大学山梨文化財研究所研究報告第7集]
- 4 「御船文書」久留米市文化財収蔵館寄託
- 5 福岡県教育委員会2005「有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 東蒲池町遺跡」
- 6 福岡県教育委員会2007「有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 東蒲池大内曲り遺跡」
- 7 文治年間(1185-1189)に和田義盛が三浦庄地頭職に補任されたのをはじめとして、嘉祐年中(1235-1237)に藤原家綱が西平田村地頭職に、正元元(1259)年には横溝五郎が高三浦村地頭職に補任されている。さらに、三浦庄は元寇恩賞地にもなり、横溝資為が嘉元三(1305)年に田脇村で田地5町、屋敷2軒を配分されている。こうした武士の侵略はその後も続き、領家の荘園経営を困難にさせていったと考えられる。
- 8 中世に濠井と考えられる大型土坑が存在するが、これに比べると土木を濠めるものには小型すぎ、基盤層が有明粘土層なので湧水層から導水するものでもない。古賀章彦1994「佐賀平野における大型長方形土坑について」[佐賀考古]第1号 佐賀考古談話会
- 9 八尾博之1986「第5節 中近世書掘り小溝について」[奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 矢部遺跡]奈良県立埋蔵考古学研究所
- 10 小松茂美1983「続日本絵巻大成16 松崎天神絵巻」中央公論社 実物は防府市松崎町の防府天宮宮(旧松崎神社)蔵
- 11 この条里範囲は方形でなく周縁の凹凸があるが、施行当初の段階のものではなく周辺に拡張した最終的な形態であろう。計画段階では方形であった可能性が高いが、それを把握するためには、発掘調査による時期の確認が必要なので、現段階では最終段階の範囲を検討することにした。また、第40図の地形図は圃場整備が施行された後の現在の図面を使用しているが、圃場整備前の地図と比較しても区画に大きな変更がないので、これを使用した。
- 12 福岡県教育委員会1978「福岡県遺跡等分布地図(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)」
- 13 正確には条里跡としか記載されていないが、便宜上「条里」をつけた。福岡県教育委員会1978「福岡県遺跡等分布地図(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)」
- 14 国道385号バイパス建設に伴う東蒲池門前遺跡の発掘調査では、厚い弥生時代の包含層が形成されており、谷が埋められたことがわかる。蒲池氏の居城である蒲池城が所在しているが、蒲池城はこの流路を水運や自然の濠として利用したことが想定される。
- 15 第39図に掲載した小字は公的出版物に掲載されたものである。
- 16 柳川市教育委員会堤氏の教授による。弥生時代の遺構が見られないことから、集落地や生産地として利用しにくい土地を集落から離れた共同墓地としていた可能性がある。
- 17 川原文書 服部英雄1999「柳川地名地図…中世史研究者の視点から」[地図のなかの柳川—柳川市史 地図編—]柳川市史編纂委員会
- 18 前掲12
田脇の条里区画が三浦郡内でも独立した区画であり、変則条里で、施行時期が新しい可能性があることについては服部英雄氏も前掲16の文獻で述べている。

参考文献

- 柳川市2002「柳川地名調査報告書」柳川市歴史資料集第5集
- 日野尚志1978「筑後国上妻・下妻・山門・三毛四郡における条里について」[佐賀大学教育学部論文集]第26集 佐賀大学教育学部
- 日本考古学協会2000「はたけの考古学」日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集
- 金田章裕1992「微地形と中世村落」吉川弘文館
- 矢田勝1998「土質・地形の変化と治水・利水対策」[第7回東日本埋蔵文化財研究会 治水・利水遺跡を考える]第7回東日本埋蔵文化財研究会山梨大会実行委員会・山梨県考古学会
- 宇野隆夫2001「シリーズ日本史のなかの考古学 荘園の考古学」青木書店
- 大川市誌編纂委員会1977「第五節 奈良・平安時代 — 筑後における条里制の施行」[大川市誌]大川市役所

報告書抄録

ふりがな	さかいちようえいいせきにしちまちこつかいせきにしちまちしょうげんげいせきにしちまちふるみでいせきにしちまちがりのいせき
書名	坂井長木遺跡(1・2次)・西蒲池古塚遺跡(1～4次)・西蒲池村監功遺跡(1・2次)・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第4集
編著者名	秦 憲二・今井涼子・坂本真一・一瀬智
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかいちようえいいせき 坂井長木遺跡1次	ふくおかけんおおかわし 福岡県大川市	402125	140392	33° 10' 55"	130° 25' 32"	2005. 9. 12 ～2006. 1. 27	1,820 m ²	国道バイパス
さかいちようえいいせき 坂井長木遺跡2次	おおあざさかいちぎひがしとくまる 大字坂井字東得丸			33° 10' 54"	130° 25' 31"	2006. 8. 2 ～2006. 9. 14	1,300 m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂井長木遺跡1次	生産	平安	土坑 4	土師器 黒色土器 須恵器	黒漆土器
			溝状遺構 3	弥生土器 瓦器 瓦質土器 陶磁器	
坂井長木遺跡2次		鎌倉	土坑 3	土師器 須恵器	
			溝状遺構 2		

遺跡の概要

本遺跡は条里地割の残る低平な水田地帯に位置し、その地割りと一致する溝が見られ、平安～鎌倉時代の条里の残っていることが分かった。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしちまちこつかいせき 西蒲池古塚遺跡1次	ふくおかけんやがわし 福岡県柳川市 おおあざにしちまちあざこつか 大字西蒲池字古塚	402079	80089	33° 10' 53"	130° 25' 40"	2004. 10. 4 ～2004. 10. 29	1,170 m ²	国道バイパス
にしちまちこつかいせき 西蒲池古塚遺跡2次				33° 10' 54"	130° 25' 34"	2004. 12. 8 ～2005. 3. 29	3,220 m ²	
にしちまちこつかいせき 西蒲池古塚遺跡3次				33° 10' 52"	130° 25' 43"	2005. 9. 13 ～2006. 3. 30	9,460 m ²	
にしちまちこつかいせき 西蒲池古塚遺跡4次				33° 10' 52"	130° 25' 40"	2006. 5. 23 ～2006. 6. 15	820 m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西蒲池古塚遺跡1次	生産	平安	土坑 2	土師器 須恵器 弥生土器	条里に伴う溝状遺構
			溝状遺構 3	陶磁器	
西蒲池古塚遺跡2次			土坑 22	土師器 須恵器 弥生土器 瓦器	
			溝状遺構 19	瓦質土器 陶磁器 石器 磁石	
西蒲池古塚遺跡3次	鎌倉		土坑 25	土師器 黒色土器 須恵器 弥生土器	
			溝状遺構 21	瓦器 瓦質土器 青磁 石器 磁石 瓦	
西蒲池古塚遺跡4次			土坑 2	土師器	

遺跡の概要

本遺跡は条里地割の残る低平な水田地帯に位置し、その地割りと一致する溝が見られ、平安～鎌倉時代の条里の残っていることが分かった。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
にしかまちしょうげんぼう 西蒲池将監坊遺跡1次	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市	402079	80140	33° 10' 51"	130° 25' 47"	2005. 4. 22	1,960 m ²	国道バイパス
						~2005. 6. 29		
にしかまちしょうげんぼう 西蒲池将監坊遺跡2次	おおあぞにしかまちあざしょうげんぼう 大字西蒲池字将監坊			33° 10' 50"	130° 25' 49"	2006. 2. 27	1,000 m ²	
西蒲池将監坊遺跡2次				~2006. 3. 27				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西蒲池将監坊遺跡1次	生産	奈良	土坑12	溝状遺構 1	弥生土器		牛による鋤耕と見られる耕作痕	
			小溝群					
西蒲池将監坊遺跡2次			土坑 7		土師器	須恵器	弥生土器	
			溝状遺構 1		陶磁器	銅貨		
遺跡の概要								
本遺跡は条里地割の残る低平な水田地域に位置し、その地割りからははずれるが、耕作痕が見られ、条里の縁辺部であることが分かった。								

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
にしかまちふるみで 西蒲池古溝遺跡	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市	402079	80148	33°	130°	2005. 4. 27	3,820 m ²	国道バイパス
				10'	23'			
おおあぞにしかまちあざふるみで 大字西蒲池字古溝				52°	50°			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西蒲池古溝遺跡	生産	平安 鎌倉	土坑 7	小溝群	土師器	須恵器	弥生土器	牛による鋤耕と見られる耕作痕
			溝状遺構 1		瓦質土器	青花	土葬	
遺跡の概要								
本遺跡は条里地割の残る低平な水田地域に位置し、その地割りと一致する溝が見られ、平安~鎌倉時代の条里の残っていることが分かった。牛による鋤耕と見られる遺構が発見された。								

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″				
にしかまちさかり 西蒲池下里遺跡	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市	402079	80155	33°	130°	2006. 2. 13	2,800 m ²	国道バイパス	
				10'	24'				~2006. 3. 15
				51°	6'				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
西蒲池下里遺跡	生産	平安 鎌倉	土坑 1	小溝群	土師器	黒色土器	須恵器	弥生土器	
			溝状遺構 12		瓦器	瓦質土器	陶磁器	砥石	
遺跡の概要									
本遺跡は条里地割の残る低平な水田地域に位置し、その条里の縁辺部と思われる溝が検出された。									

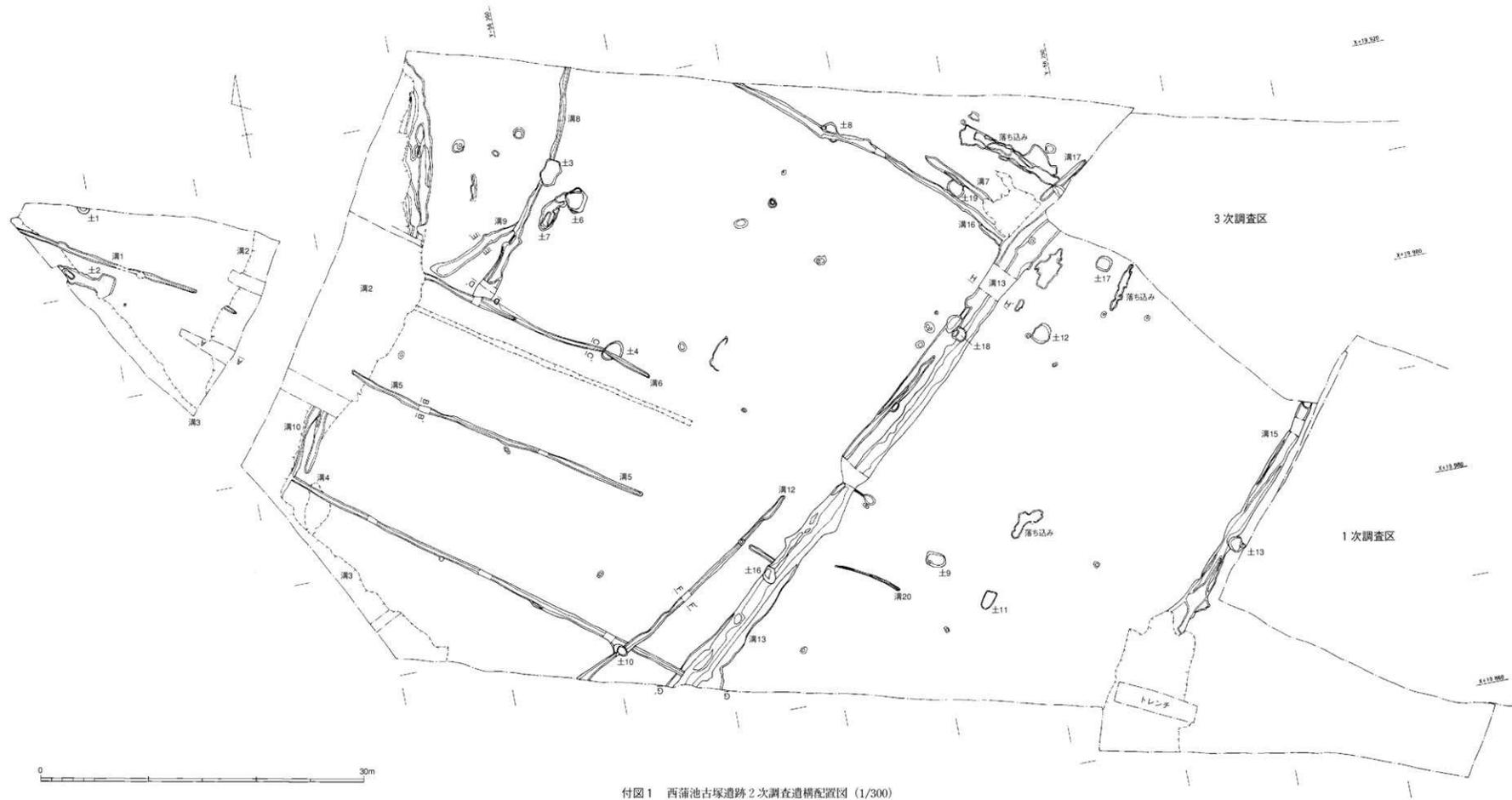
福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 5

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

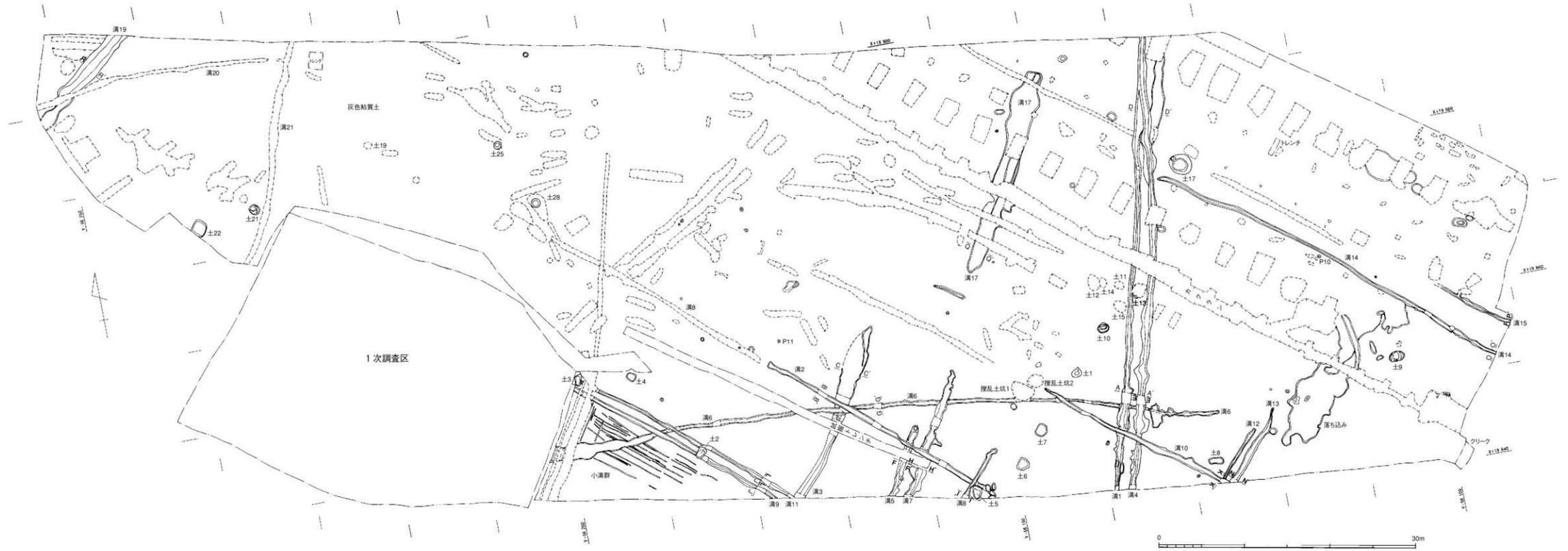
坂井長永遺跡(1・2次)・西蒲池古塚遺跡(1～4次)・西蒲池
将監坊遺跡(1・2次)・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡

平成20年(2008年)3月31日

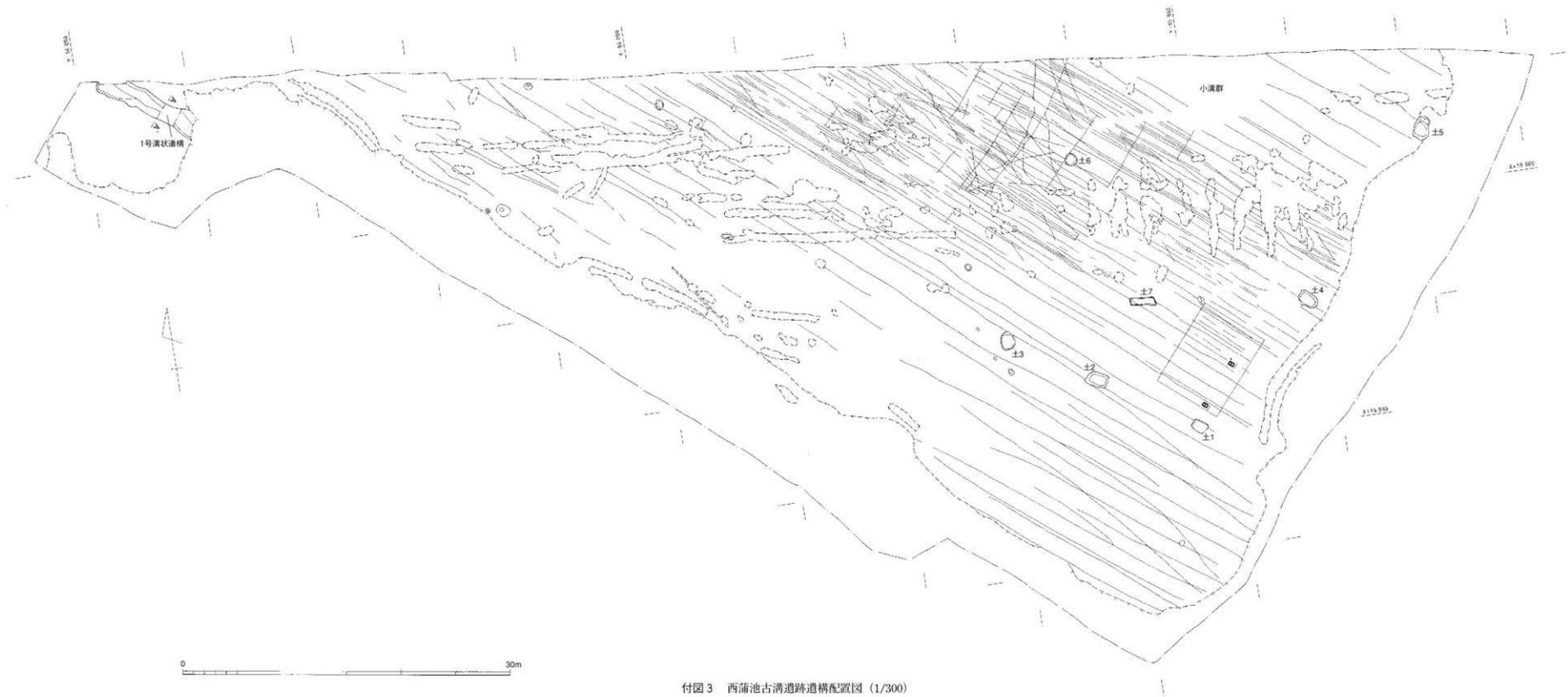
発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 文化印刷株式会社



付図1 西蒲池古塚遺跡2次調査遺構配置図 (1/300)



付図2 西蒲池古塚遺跡3次調査遺構配置図 (1/300)



付図3 西蒲池古溝遺跡遺構配置図 (1/300)

